

予防接種に行ったはずなのになんでV t u b e rになってるの??
～地味女子JKは変態猫や先輩V
達にセンシティブにイジられるそ
うです～

ビーサイド・D・アンビシャス

自宅に隕石（メテオ）が落ちたことで生活一変！

プライベート皆無のバイト三昧な日々を過ごしていた女子高生…姫宮紗夜は、バイトのために予防接種を受けた！

「君の目標はなんだ!？」

「（健康寿命を）100年延ばすことです！」

「（チャンネル登録者を）100万伸ばすか！ いいぞ、それでこそ逸材だあ!!」
オーディションに合格！ 墮天使V t u b e r 【宵月レヴィア】としてデビューすることに!!

シスコン天才妹の策略によって、バイトは辞めて、配信配信配信!!

同じ事務所の先輩Vにエッツなことされたり……したり!?

更には学校一のイケメンが自分のファンになってたり、その彼と一緒に自分の配信を見させられ、恥ずかしさで悶えたりい!!

それでも彼女のV生活は始まったばかり。

先輩Vの洗礼（セク〇ラ）を乗り越えろ！気弱JKの巻き込まれ系Vコメディ！
一人ぼっちだった少女は、紳士だけど清楚はいないV t u b e r業界で、大切な

繋がりを得ていく……

カクヨムでも掲載中です！

カクヨムコンテンツの応援よろしく願います

！

目次

第1話	V t u b e r オードイション！（本人は知りません）	1
第2話	合格通知が届いたよ！（あと5分で初配信だよ!）	11
第3話	初配信スタート！（もう何回PONしたんだろう……）	19
第4話	初配信にオド○☆ココロが（お風呂鼻歌を勝手にUPされてました）	27
第5話	初配信終了！（次回のコラボはヤバい猫!）	35
第6話	身バレこわいよお！（クラスメイトが私を推してました）	43
第7話	推しを語り合う仲になりました（推しは私自身です）	51
第8話	マジできつい淫乱猫（女子のみんな、逃げるよ!）	57
第9話	もうヤダ助けてパパあ！（コラボ配信、始まります）	63

第10話 ほおーら♡一気♡一気♡(病みロリと猫の一気飲みハラスメン

ト)

第11話 お〇っこ我慢ス〇ブラ決着！(もう……むりッ！)

第12話 勝者の特権じゃあ！(カミソリ用意)

第13話 眉毛 ええええええええ!! (まゆげ ええええええ!!)

第14話 鼓膜は処女膜!! (好きな推しに破いてもらいたいものなんで

すか?)

第15話 リエル先輩は男の娘!? (ASMR配信、頼りにしてます!)

第16話 え、ASMRはじまります(先輩……八つ橋って何ですか?

)

第17話 ASMR配信しゅうりょお♡(みんなの鼓膜……破こっか??)

第18話 精神世界で先輩Vと会いました(えまって精神世界とかある

世界観なの?)

第19話 お絵描きオフコラボ開始い！（拉致から始まる絵師Vオフコラボ!?)

第20話 ママあ！ママとお絵描きするう！（起きたら既に襲われていた件について）

第21話 お絵描き配信再開！モデルは妾!?（あの、M字開脚って……なんですか?）

第22話 堕天使、ジャックオーチャレンジに挑戦だよ！（ママ、10分キープは無茶です）

第23話 太ってる魂は……きらい？（眷属のみんな……ごめんなさいい）

第24話 オフの日デート、緊張します（相手は……だれだと思えますか?）

第25話 先輩Vとお泊り歌コラボ！（エレキ○リカルな歌声らしいですよ）

第26話 お泊り振り返り配信……♡（先輩、どうして謝罪配信してるんですか？えなにしました？）

第27話 墮天使の今後の課題！（妹マネちゃんからお叱り受けました…）

第28話 クラスの端っこと中心（ねえよく見たらうちのクラス変な人ばっかじゃない？）

第29話 妾って……トーク下手？（推されるってこういうこと）

第30話 妾っ、立派なメスガキになってみせる！（なんか不穏な視線を感じたけど気のせいだよね）

第31話 悪役令嬢…早乙女さん!?（まってちがうの、誤解なの!）

第32話 ボルケーノ・早乙女（テニス勝負ってドユコト?）

第33話 おのれえええくっ殺！（私、2センチ大きくなったんだ?）

第34話 墮天使、初布教です（初めてのリア友……できました）

第35話　メスガキD○D配信なんだけどお♡（眷属の雑魚、みってる！?）

第36話　へブメン勢ぞろいで殺し合いー♡（おいなんか猫いんどぞ?）

第37話　墮天使の裏側生活音（オフの姫宮家のことですよ）

第38話　シルバーシールド!?!（記念配信枠、なにしよう）

第39話　身バレ事変（——心に背いた、声）

第40話　記念歌配信かい——ッ（墮天使は砕け散った）

過食気味の惰眠を貪る（——どうして誰も○めてくれないの）

姫宮紗夜という『魂』

会いたい人は、誰ですか？

パジャマ登校姫宮！（こっちです、アル○ツクー!）

肩の温かな重み（——溶けだす、声）

いつもじゃない放課後、いつもの校舎裏（たわいもないつながり）

私はそうは思わない

リベンジ記念歌枠！ 始めッ！（――〇に落ちる音がした）

へブメンブチギレ暴言まとめ／切り抜き動画（おまけ ※暴言注意！）

おまけの2 へブメン・メストラトゥーン（キル喘ぎ縛りです！）

幕間の3 裏でのへブメン（深夜の雑談）

幕間の4 堕天使を分からせられるのは……（エッチスケッチワンタツ

チィ！）

幕間の5 へブンスと！いっしょ！（妹ちゃん、マスコットデビュー!?!）

妾の同期がデビューするぞ！（一か月遅れで！ おっそ！）

朝レヴィ開始だぞ♡（一人目の同期はどんな娘かなあ？）

二期生の機械神は邪神崇拜者らしいです（いあいあー！）

後輩（同期）と初コラボです！（うぐいすパンになりたあい）

ゆっくり寝ろ墮天使（二人目の二期生！）

はいっへブンズチェストオー！（魔女ちゃんは癒し粹なの！信じて！）

筋肉！やはり筋肉はすべて魔法！（リングフィット並走勝負配信！）

墮天使さん、二期生オーディションです（妾は二期生なんだが!?!）

妾は創るだけだ……このイカレた世界を

マイ○ラ振り返り配信①（雷神BBAは若返りたい）

マイ○ラ振り返り配信②（ステラママ、法律って知ってる？）

マイ○ラ振り返り配信③（邪神後輩に負けないで天使先輩）

第66話

第1話 Vtuberオーディション! (本人は知りませ

ん)

「それでは姫宮紗夜さん。あなたの志望動機を教えてください」

私は首を傾げて思った。

あれ、予防接種に志望動機いるっけ? と。

雑居ビルの二階の一室。

注射待ちの列に並んで、ようやく入れたと思ったらソファに座らされ……向かい側にはきれいな女の人とうさんくさい男の人が横並びになって座っていた。

女医さんとその助手……なのかな?

もしこの女医さんの副業がモデルだって言われても、ちっとも驚かない。

そのくらい、その人はきれいだった。

通った鼻筋、シャープなフェイスラインにぱっちりお目目。

私なんかとは大違いだ。

「姫宮さん？」

「あっ！ あわっ、わっ、ごめんなさい。えっとえっと」

「落ち着いて姫宮さん。まだ一問目よ？」

女医さんの心配する声が飛んできて、私は更にテンパってしまふ。だってこんな美人さんと話す機会無いから……えっと志望動機、だよ、ね？

多分、予防接種の前のアンケートみたいなものかな。だったら、私が予防接種を必要な理由を言わないと。

「えっと。私の家、隕石で潰れたんですけど」

「ちょっと待って姫宮さん」

「幸い、家族は全員出掛けてたし、ご近所さんにも被害はないんですけども」

「そんなことある？ 姫宮さん」

「それで家計苦しくなって……私も稼がなきゃいけないんです！」

「止まってくれない姫宮さん」

「だから今、病気で休むわけにはいかないんです！」

届け私の想い！ 伝われ我が家の経済状況！

労働のために、私は絶対に予防接種を受けねばならないのだ!

気付けば私はテーブルに手をつけて、女医さんに向かって身を乗り出していた。「な、なるほど。これ以上ない志望動機だわ姫宮さん。それじゃあ、次の質問に……」すると女医さんは身をのけ反らせて、私の目から視線を外した。

——勝った……っ!

数多のバイト面接を受けてきた私だから、分かる。

これは受かる手応え!

私は女医さんに見えないよう、小さくガッツポーズした。

やったよ、お母さん、伽夜ちゃん。私の志望動機《想い》ちゃんと届い……

「——君の志望動機、たしかにすごいねエ」

安心・油断・刹那の隙。

流れ出した勝利確定BGMを遮るように、女医さんの隣に座っていた男がテーブルに足を乗っけて——宣言する。

「ただし、日本じゃあー2番目だア」

「なん、ですって……っ!?」

それはつまり……私以上に予防接種を求める人がいた……ってコト!?

にわかには信じられない。でも、この人の目を見ていく内に分かってしまう。

一見うさんくさく見える、この男の人こそ——主治医。

私が女医さんだと思っていた人は女医さんではなく……看護師だったのだ。

「くっ!」

「いや、『くっ!』じゃないから姫宮さん。悔しがらなくていいから」

「お願いします! もう一度、私にチャンスをください!」

「それは落ちた人のセリフよ姫宮さん? 貴女まだ落ちてないから安心して……」

「良からう。では、ここからは俺が相手してやろう」

「ちよっ!? 駄目よ、あんたロクなこと聞かな」

「お願いします!」と、私は看護師さんの言葉を遮って頭を下げた。

私はフンスと鼻を鳴らし、今度こそと気を引き締める。

組んだ両手に顎を乗せて、主治医さんが問いかけてきた!

「君は……今日これ（Vの面接）が終わったら何をやるんだ?」

「はい!（予防接種が）終わったたら、店長ババに報告に行きます!」

勢いよく言ってから、「あっ」と後悔する。しまった。

店長のこと——パパって言っちゃったよ!?

いつもバイトの時は店長から『パパ』呼びを強制されていたから、つい癖で言っ
てしまった!!

まずい、早く訂正しないと……。

そう思っていたら、看護師さんが「へえ〜」と目を丸くして尋ねてきた。

「なんだか羨ましいです。家族仲が良いんですね」

「は、はい! アットホームさを売りにしてるので!」

「一気に不穏な気配が増したのですが?」

「そんなことないですよおお——!?!」

私の馬鹿ああああああ!!

後悔先に立たず、もう二人とも納得した感じの雰囲気です。先に進もうとしている。

——押し通すっきゃない!!

「じゃあ、もし受かったらお父さんがどんなアクションするか言ってみてくれ」

「もっと早く受けてこい、このノロマって言います!」

「お父さん厳し過ぎない!？」

「いやでも娘への期待値半端ねーな!? え、受からなかったら何て言うんだ?」

私は思わず想像した。

もし予防接種受けられなかったら………あの店長だったら………。

「——(シフト) 入れさせて、くれないかもです」

「(家に) 入れさせないの!? やっぱりあなたのお父さん厳しすぎでしょ!？」

「獅子は子を谷に落とす、か……子も逸材なら親も逸材だなッ!」

「だんじゃないわ、このちゃらんぽらん! イヤよ私!? こんな話聞いて落と

せないわよ!」

そう叫んで、看護師さんが主治医さんの肩に掴みかかった。

良いのそんなことして!?

看護師さんの態度にびっくりしたけど、何もなかったかのように、主治医さんが

咳払いして、次の質問に移った。

「では仮に受かったとして。週に何回(配信) やれそう? ぶっちゃけ(配信) 何

時間までやれる?」

私は少し考えて、質問の意味に思い当たる。

これは……予防接種の後どんな生活をするか聞いてる、のかな？ いやそうだ

！ ここまでの流れ的に絶対そうだ！

だから私は今後のシフトについて答えた。

「そうですね！ 週に幾つ入れるかは分かりませんが（他の店員との兼ね合いもあるし）、やったらだいたい十は固いと思います！」

「十時間！ 姫宮さん体力ありますね。私も以前やったけれど翌日に響いちゃって」

「へ？ いや十日ですよ？」

「死ぬ気かしら姫宮さん!？」

看護師さんのオーバリアクションに、私は「あはは」と穏やかに微笑み返す。
「やだなあ。大丈夫ですよ、前にもしましたから（十連勤）」

「十日間耐久配信経験者!？」 なるほど、お父さんが期待する理由が分かったぜ！

手を叩いて喜ぶ主治医さん。やった！ なんか知らないけど好印象！

ホッと胸を撫で下ろしていると、主治医さんは「最後の質問だ」と言ってから、眼光をキラリと光らせた。

「君の目標はなんだ？」

その鋭さに私はごくりと唾を飲み込んだ。

ここに来てようやく、私は主治医さんの、ひいてはこのアンケートの意義に気付けたかもしれない。

そう、これは予防接種を受けてから先の人生、あなたはどうか生きるのか。

それを問いかけるためのアンケートだったんだ！

だったら答えるしかない。

今の私の、人生の目標は

「(健康寿命を) 100年延ばすことです！」

「(チャンネル登録者を) 100万伸ばすか！ いいぞ、それでこそ逸材だあ!!」

—— やっ……た。

受かる手ごたえを再び感じた私は今度こそ！

袖をまくって、主治医さんに腕を突き出した！

すると主治医さんも腕を突き出した!

「合格だ! 君なら出来る! 目指せ金の盾!! 目指せスパチャ1億! 我が

事務所は総出を上げて君を支えるぞお!!」

ガシッ! と腕を組みかわす私と主治医さん。

注射してもらえと思った私は……………

「ほわ?」と首を傾げた。

こうして私は、Vtuber事務所【ヘブンズライブ】に所属するVタレントになった。

私は合格通知が届いてからようやく、あれが予防接種じゃなくてオーディションだったことに気付き——私を騙してオーディションを受けさせた妹を正座させた。

泣かした。

本作は同サイトの「あれ? 予防接種に志望動機っているっけ?」勘違いから始

めるVtuber生活」の改稿作です。

同じ箇所はありますが、後半につれてだいぶ違ってくるので、お楽しみください。
初めての方にも楽しんでいただけたら幸いです。

カクヨムコンテストにも参加しているので、ぜひ応援よろしくお願いします。

<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>

741950

「し、しぬかと思った……っ！ 一日に二回もだなんて……ひんじやうう」

そんな大げさな。

呆れてため息も出ないけど、姉の威厳を精一杯引き出して、腰に手を当てた。

「さあ、言いなさい！ どうして予防接種って騙してまでVtuberのオーディションを受けさせたの!？」

「Vtuberになってスパチャでじゃんじゃ稼いだらお姉ちゃんもうバイト行かなくて良いかなーって思ったのー♡」

「考えあっつき!？」

うそでしょ、伽夜ちゃん!？」

そんなにおバカさんだったっけ伽夜ちゃん!？」

そんなの上手くいきっこないじゃない!？」

でも伽夜ちゃんはムツと眉毛を吊り上げて、じたばたと反論する。

「浅くなんかないよお！ 現に受かったじゃん！ あたしからすれば予防接種だって勘違いしたままどうやって合格したのが謎だよ！ いやホントなんで?」

「い、いや……そもそも変だなーとは思っていたのよ？ 微妙に話噛み合わない

「というか……今更だけどスパチャ1億って何？ 金の盾？ いや盾より注射針ください」

「その時点でなーんで気付かないかな、このお姉ちゃんは」
う、ううううううるさい！

鼻で笑うな！ ため息つくなあ！

二回くすぐり泣かされても妹のふてぶてしい態度は変わらなかった。

まあそれはいつものことだけど……私は家に届いた合格通知に目を落として、息を吐く。

「伽夜ちゃんには申し訳ないけど……迷惑かけちゃう前に合格断らせてもらうね」
「—————なんで？」

どうしてって……そんなの分かり切ってるでしょ。

家族みんなでちょっと深夜にコンビニ行ったら、家にメテオ降って粉碎。

通帳もクレカも家の財産は文字通り木っ端みじん。

保険でなんとか六畳二間のアパートに住めたけど……とてもじゃないけど配信活動なんて出来る環境でも状況でもない。

良い感じにむ……むちっとした太ももお。

そういうエ……エッチなところに限って切れ間《スリット》が入った、白基調のドレス。

でも何より特徴的なのは、背中と頭に生えた四枚の——黒い翼。

「これがお姉ちゃんのカワだよ♡ 堕天使【宵月レヴィア】！」

可愛すぎて神が尊^し死になっただから下界に墮とされた傲慢な堕天使。

墮天の際、落下地点の宵月家を大破させる。

お詫びとして下界で働きながら、宵月家に居候している——という設定が事務所の公式サイトに載ってた。

悶絶した。

畳に転がった。

可愛すぎるっておま……神が死にそうになるっておま……堕天使っておま！

「厨二かあ！」

「中二ですが？」

そうでしたあ！ っ、て、言いたいことはそこじゃなくて！

いけしゃあしゃあと答える妹の肩を掴んで、私は突っ込んだ。

「これ私ん家じゃん！ 宵月家って姫宮家じゃん！ 墮天使ってこれ、私ん家に落ちたメテオじゃーん！」

「どっちも落ちてんだから変わらないよ」

「あっ、なるほど……ってならないからね？」

「とにかく！ あたしはこの日のためにずーっつと『お姉ちゃんVtuber化計画』に専念してきたの！ だから配信部屋に行って！ ほら早く行って！

挨拶は【こんレビ】だよ！」

「待ってえっ!? お姉ちゃんに考える時間ちょうだい!? お願いだからあああ

あ！」

その時、私は思い出した。

私の妹は大人顔負けの天才で。

その能力を全部【私のため】に全振りしてくるシスコンだって。

「じゃあ、トラブルあったら後ろ向いて？ あたしがカンペで指示するから」

「この……状況がもう……トラブル」

「うん大丈夫そうだね！ でもとりあえず第一声のセリフだけ書いといてあげる！」

伽夜ちゃんはカンペとなる大きめのスケッチブックに、さらさらっと書いていく。

——え、これ言うの？

「あつ、ほら始まるよ！」

「えまってまってまって！」

「大丈夫だよ——お姉ちゃんは綺麗だから」

「ううううううう、私は傲慢な墮天使私は傲慢な墮天使私は傲慢な墮天使！」

自分にすっかりそう言い聞かせながら……もうどうにでもなれて気持ちで、第

一声の挨拶を読み上げた！

「ふあつ、ふあーはっはっは！ 待たせたな眷属達！ さあ、邂逅を告げし鬨の声を上げようぞ！ こ……こんレビい!!」

「コメント」

・は？

・は？

・は？

・ハ？

・はあ？

塩対応のコメントを前に、私はプルプル震えながら、真っ赤になった顔を覆う。

「殺して……殺してくださひい……！」

デビュー後1秒で死を望む堕天使が今、生まれました。

カクヨムコンテンツに参加しています！

応援よろしくお願いします！

<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>

741950

第3話 初配信スタート！（もう何回PONしたんだろう……）

私は傲慢な墮天使私は傲慢な墮天使私は傲慢な墮天使ブツブツブツ……。

待機画面の前、必死にそう言い聞かせた私は今――

「コメント」

- ・なんて？
 - ・も一回言ってみ
 - ・か、かいこ……なんだって？
 - ・よく聞こえないなあ、おかわり
 - ・声上擦ってるの可愛い
- コメントの総ツツコミに、顔真っ赤で悶えていた。

「言わないよお!! あううううう何がかわりだよお……しっかり召し上がったるじゃんかよお……可愛いってなんだよお……恥ずかしいよお……」

「コメント」

・かわいい

・カワイイ

・可愛い

・き (・v・) ㄝ !!

・KAWAI

「ちよっ、なんで……恥ずかしいって言ってんじゃあん!?」

あれ私、日本語間違えた!?

可愛いという言葉に溢れるコメント欄に、私のメンタル限界。

助けを求めて、伽夜ちゃんの方を振り返る。

すると既にカンペに指示が書かれていた。

さすが妹お!

私はカンペの通りにまた読み上げる。

「ほ、褒めて遣わす! わら、わりやりやをっぱりやぱりやっぱ!」

「コメント」

・ 噛んだー！ー！ー！ー！

・ 盛大に神田

・ 転がり落ちるような噛みっぷり

・ ゴロンゴロン！

・ なんて？

もおおおおおお伽夜ちゃあー！ー！ー！ー！！

私は一人称を『妾』に設定した伽夜ちゃんを恨みがましく睨む。

こんなの噛むに決まってんじゃあん！

でも今はそれどころじゃない。

ンッンッ、と咳払いで恥ずかしさを消し飛ばす。

「……妾じゃ。高貴な存在たる墮天使だからこそ、一人称まで厳かに……」

「コメント」

・ ぬるっと言い直してんじゃねえ

・ 仕切り直しざつつつwwww

・ わりやりやカワイイ！

・わりやりや様あゝ可愛いよおゝ

「そんなに言わなくても良いじゃあん!?　　な、泣いちゃうぞ!?　　妾泣いちゃうぞ!?

もうとつくに涙目なんだからな!?　　後、わりやりや様じゃなあい!!

かわいくなんてない!　　もおゝゝかわいい禁止!」

「コメント」

・いとあはれ

・あはれあはれ

・げに愛らしき天使なり

・愛い少女ぞ

「え?　あ……みんな賢い。え、いや普通にすごい。妾の眷属、天才では?」

思わず素でびっくりした。

かわいい禁止に伝えてくれたのもそうだけど、かわいいと同じ意味の言葉こんなすぐさま言えるなんてすごい!

私はマイクの前でパチパチパチと拍手した。

そしたら

「コメント」

・めっちゃ褒めるやん

・やめろ拍手するな、恥ずかしい

・やだこの子、すごい褒めてくれる……

・もっと褒めてくださいお願いします！

わあああ……コメント欄が、『褒めてほめて』とすごい勢いで流れていく。

こ、これ一人一人が言ってるんだよね……このコメントの一つ一つの向こうにいる人の顔をぼんやり想像した途端——じわあって、暖かい気持ちが生えた。

胸の中、ずっとドキドキしてたけれど……たった今それだけじゃなくなった。

「み、みんな……すごいなあ！ さすが、妾の眷属！ えらいなあ！」

大丈夫かな、ちゃんと聞いたかな、ちゃんと聞こえたかな。

目を拭いながら、声が震えてなかったか心配になる。

ちゃんとやりきろう。楽しんでもらおう。

そう思えるように、今なった。

……って言っても何すれば良いの!?

そしたらコツン、と後頭部を小突かれた。振り返ったら伽夜ちゃんがマジックで書かれたカンペを指さしていた。

『自己紹介。あと、挨拶やりなおし。普通に初めましてから』
言わされた言葉じゃない。

私自身の言葉で言えと、伽夜ちゃんは既に背中を押してくれていた。

「あ、あー、えと、その……今更であるが、あ、改めて。は、はじめまして。

よ——宵月レヴィアである。よ、よろし、く頼む！」

バクンバクンうるさい心臓のせいで、つかえつつかえただけども。

今、この時、ようやく私の中で『宵月レヴィア』の自覚が芽生えた。

「コメント」

- ・ やっと名前言ったよこの子
- ・ ふあははが実質名前
- ・ 宵月ふあはは
- ・ わりやりや様でもある！
- ・ こいつ何回PONすんだろう

第4話 初配信にオド○☆ココロが（お風呂鼻歌を勝手にUP されてました）

「ふ、ふぐっ……で、では軽く自己紹介をす、するぞ？　まずは妾の種族である

が一応『天使』である。しかし、そのまま、なんだ……か、かか可愛すぎて神に墮
天させられたという……やめろやめろやめろ！　かわいいを連呼するな神に同意
するなあ！」

すんすんと鼻をすすりながら何とか設定を言ったら……すごい勢いで神の賛同者
が増えてる!?

あう~~~~~頬がにやけるううううはずかしうれしいいいああああ！

赤くなった頬をつねって、話題を軌道修正。

カンペに書かれた設定を横見しながら、自分の言葉で言い直していく。

「そんな訳で墮天使になった妾だがな？　天界から落とされた時に……一軒家を潰
してしまっただけ？　それで今はその家、宵月家に居候しておるのじゃ。墮天の弁償

代としてバイトに明け暮れておった所、ヘブンズライブと出逢えたという訳じゃ」

「コメント」

・墮天が思ったより物理！

・踏み潰してしまっただか……

・墮天使さあーん、どうしてそんなに大きくなっちゃったんですかあ？

「真面目にやってきたから……じゃないよ！ そんなにおっきくもないよ！」

「コメント」

・体重何キロ？

・一軒家の破壊規模からエネルギー規模特定して、墮天速度が分かればワンチャ
ン計算できる？ $E \parallel mc^2$ の法則。人ひとり分の質量で被害が一つの家屋限定
だから墮天速度はそんなでもなさげだけど（以下略）

「まってまってまって!! すごいインテリいた今!! すごい論理的に妾の体重

計算しようとしてた!! ていうか墮天速度ってなに!!」

あれ？ なんだか——私、上手く配信やれてる？

だってなんだかんだ20分くらいずっと喋れてる。クラスメイト相手だったら1

分も間が持たないのに。

あれちよっと嬉し……

「コメント」

・鼻歌動画から来ました！ 可愛いかったです！

・寝息最高！

・声出し動画にしては、めちゃめちゃ沢山投稿してますね。これからも応援して
ます

・お風呂の水音＋鼻歌カワイすぎ

・ふにゃふにゃ寝言言ってるあの動画、実質ASMR

「——え？ なにそれ知らない」

「コメント」

・知らない!?

・なんで!?

・草WWW

「え、え、え？ お風呂？ 寝息？ は、はなう——はっはっはっはっはっはっはっ

はっ」

胸騒ぎが激し過ぎて過呼吸になる。

生い茂るコメント欄を無視して、速攻YUTUBEのチャンネルを確かめた。

あった。ショート動画が……30本近く。

「どゆことどゆことどゆこと!? まって知らない! 私こんなの知らないよ!?

い、いやまだだよ。再生してみたら全然関係ない内容かもしれない!

カチッ。

『へいじょーい、ふんふん、ふんふんふん♪ いっじょーいん♪ ふん、ふふ
ふふんウッ!』

「いやああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああ
あ!!!!!!」

ちゃぽちゃぽ、と湯舟でリズムを取りながら、私の鼻歌はご機嫌に心躍らせてい

た。

「コメント」

・ウツ☆

・カワイイ過ぎる W W W W

・私呼び、助かる

・ウツ☆

・W○☆

・心オドッテンねえ！

・お風呂のちゃぱが妄想掻き立てるう！

「ああああ……あ、あ、あ、あ」

ぴくぴくと突っ伏した体が震える。なんで……なんでなんでどうして。

一体誰が——後ろを振り返る。

カンペを持った伽夜ちゃんがニコニコ笑顔で舌を出していた。

「ちよと、ちよっと一旦ミュートするぞ。すまなんだな眷属達。ちよっと……話つけに行ってくるわ」

「コメント」

- ・消えたWWW
- ・ガチトラブルやんけ
- ・本人じゃないなら誰なんだ？
- ・え、普通に歌声可愛くない？
- ・上手くはないけど好きなんだな〜って伝わってくる
- ・これは歌枠が楽しみだあ

——温かいなあ、眷属のみんなは本当に温かいなあ……っ！

だからこそこんなすがた配信裏見せられないなあ〜。

「はいいい！ あたひはあ！ おねいちゃの生活音録音しへえ！ 勝手にupしまひたああー！ あひいいいいやめっ！ もっ、やめへえー！！！！」
妹泣かしてるところは見せられないなあ〜。

カクヨムコンテストに参加してます！

応援よろしくお願いします！

7
4
1
9
5
0
<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>

第5話 初配信終了! (次回のコラボはヤバい猫!?)

「戻ったぞ〜眷属達よ〜、犯人は宵月の娘じゃった〜。聞き苦しいものを公開してしまつて申し訳なかったの。後でしっかり削除するでな、安心して……」

「コメント」

- ・ やめてえ!!!!
- ・ 消さないでえ!
- ・ 聞き苦しくなんかないよお!
- ・ 控えめに言つて天国なんよ
- ・ 癒し動画を消さないでえ!

「え、え? え? え? な、なんで? だって下手くそじゃろ、妾の歌!? 妾、カラオケで下手くそ過ぎて友達いなくなつたんじゃない!?」

コメント

- ・ 草www
- ・ 自分からぼっち暴露していくう

・友達いないんですねわかります！

・そんなこと無いけどな

「良いか、眷属達よ！ 具体的にはこれから入学、クラス替えする眷属達よ！

—— 親睦会のカラオケでハジけるな!! 死ぬぞ!!」

コメント

・気迫がすごい
WW

・遭難かな？

・寝るな死ぬぞ並のガチ感草

・説得力がちがう

「と、とにかくもうこの話終わり！ 終わりじゃもう……でもショート動画は残しとくねその……う、嬉しかった……から」

途端、コメント欄がすごい勢いで流れていった。カワイイばかり……っ！

恥ずかしくて顔を覆ったら、ほっぺが熱い！ ちらっと指の隙間から見てみたら、たまたま目についたコメントを拾った。

「なにになに？ えーと、妾がどんなバイトを経験されてきたかだと？ コンビニ

である」

配信前に話して良いことを伽夜ちゃんと決めてて良かったあ。

私はウキウキと質問に答える。

「こう見えても妾、棚整理めっちゃ得意なのだぞー。お客のおじさんに褒められてなあー。でもレジ打ちは未だに苦手で……ほんと途中から水道代の紙とか出すのやめてほしい……妾のスマイルは商標登録されてないんじゃないよお……」

——ハッ、しまった!

自慢話(誰も聞いてくれないから)しようとしたのに、いつの間にか愚痴になっちゃった! 今のはあんまり墮天使らしくなかった、どうしよう!

私は慌てて訂正しようと思ったら……

「コメント」

・公共料金の支払いは最初にやろうね

・わかるマーン

・スマイルで金取りたい

あ、れ?

意外と反応が良かった。むしろ共感してくれるコメントの方が多かった。

それを見て私は……おそろおそろと、アノ事について触れてみることにした。

「あの、眷属達に聞きたいことがあるのだが――店長から『パパ』って呼んで欲しいって言われたこと、ある？」

「コメント」

・は？

・え、コンビニだよね？

・きしよいきしよいきしよいきしよいきしよいき

・ヤベエ職場じゃねえか
WW

・すまん、吐いてくる

・パパって呼んで♡(このコメントは通報されました)

自分の顔が一気に晴れやかになるのを感じた。

「だよねえ!？」 やっぱり変だよねえ!？ いや私だって変だなーって思ってたの

！ 『アットホームな職場ってこういう意味だっけ?』 って首傾げたもん！ ちがうよね、バイトにパパ呼び強制はアットホームじゃないよね!？」

その時、私の中で何かタガが外れた。

どうしよう、止まらない。ずっと我慢してたことが溢れてくる。

伽夜ちゃんが後ろから小突いてるけど、一人称『私』に戻っちゃってるけど、構わず話し続ける。

みんな、そんな私の愚痴に共感して付き合ってくれるから、ブレーキも利かなかった。

「タバコの銘柄とか言われても分かんないよぉ〜! 棚の番号で注文してよぉ〜! 『マイセン一ミリ』ってなんだよぉー!」

「コメント」

・あれ、酔ってる?

・泣き上戸カワイイ

・脳内でアルコール分泌できる天使

・良い大人のみんな、タバコは棚番号で注文しようぜ!

時間はあつという間に吹き飛んでしまい、伽夜ちゃんがカンペでバァンと頭叩いてくれてやっと正気に戻れた。

「あうううう……えっと、その、取り乱した……ごめんなさい。みんなが優しいから甘えてしまった……ほんとにごめんなさい」

「コメント」

・!? !?

・何の音!?

・誰かいる?

・甘えたって……ええんやで

・せやせや

・一向に構わん

「~~~~っ! 温かい……みんな温かいなあ……うううごめん、ほんとうにごめん……優しい、ほんとやさしいなあみんなあ——おわり、たく、ないなあ」
じわっと広がる胸の温もりに切なさを覚える。

あんまり上手くできなかったのに……本当にありがたくて、目が潤む。

でもさっきからずっと伽夜ちゃんがツンツンと頭をつついてる。

滲んだ視界に次回の配信予告について書かれたカンペが映る。

名残惜しさに後引かれながら、配信画面に向き直る。

「——うむ！ でも明日もまたみんなと会えるから！ だからちょっとだけバイバイなのだ！ うむ！ という訳で明日はきゅ……【キャスパー】？ とうVtubeerとコラボ……するらしい！ 眷属のみんなぜひ来てくれ！」

最後くらいハツラツに、ハキハキと！

そう思って元気よく言ったんだけど——直後、コメント欄に不穏なざわめきが走った。

「コメント」

・え

・あつ

・あつ、これは

・うそやん

・初手であれとコラボ!?

・天使が汚されるううううううう！

・貴重な天使枠が……

・こうしてあの猫の毒牙にかかるのね……

・キャスパアアアーーー!!

・あの猫はやバいですよ、レヴィアたん

「……え？ え!?　ちよっ、それってどういう……」

詳しく聞こうとした途端、後ろから伸びた手が配信終了ボタンを押した。

「初配信、お疲れ様☆　おねーーーちゃん!」

伽夜、ちゃん？

振り返って見た私の妹の顔は——年より幼い、無邪気な笑みを咲かせていた。

カクコムコンテストに参加してます！

応援よろしく願います！

<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>

741950

第6話 身バレこわいよお！（クラスメイトが私を推してました）

バイトやめてきた。

というより「やめさせられた」って言った方が近い。

『いいねいいねえ！ お姉ちゃんやっぱ最高だねえ！ 登録者数じゃ、もう収益化の条件クリアしちゃったよ!? すごいよお！ これからも一緒に配信頑張ろうね、お姉ちゃん！ あ、ちなみにバイト先に辞表出しといたから、もう行かなくてよいよ』

これが、妹が起こしにやってくる微笑ましい日常シーンのセリフである。

うううう、朝から胃が縮んだよおお。

妹目覚ましが早い時間だったから、学校に行く前にバイト先のコンビニに行って確認してきた。

マジだった。

「怖い……もう怖い……伽夜ちゃんが怖い」

私の筆跡そっくりの辞表を見た時の寒気は、未だに収まらない。

春のお日様はぼかぼか温かいのに、胸の中は冷え冷えだった。

冷え冷えな原因は分かっている。

朝日に照らされた通学路からスマホに視線を落とす。そして【宵月レヴィア】の YUTUBE チャンネルを見る。

わあ〜、4桁超えてりゅ〜〜〜。

色々悟った私の顔をパァ〜とお日様が照らす。

そして笑顔のまま、私はガ君と膝から崩れ落ちた。

「どう、しよ……どうしよどうしよどうしよどうしよお〜〜!?」

不安に叩き伏せられた私は、ひしっと電柱にすがりつく。

—— バレてたらどうしよう!?

昨日、配信が終わった後ふと考えちゃったんだ。……もしクラスの誰かがあの配信を見ていたら? って。

そんなのあるわけないじゃんと思っただけ寝ました。起きたらチャンネル登録者 1

万人超えてました。

「お願い、嘘だと言って……」

もう一度、【宵月レヴィア】のチャンネルを見る。数字は変わらなかった。

「あうう……こ、こんなことならボーイチェンすれば良かった……いや、日頃からボイトレしていれば……」

どれだけ後悔しても、もう遅い。

まあクラスに友達はいないし、名前も覚えてもらえてるかどうかって感じだし。声を掛けられる時なんて、宿題写さしてと頼まれた時とか、放課後の掃除を頼まれた時とか、クラスの雑用を頼まれた時しか無いし………良いように使われているなあ……。

それでも私と宵月レヴィアの声は同じだ。

クラスで【V t u b e r 界限】に詳しい人はいないと思うけど、でもチャンネル登録者が増えれば、認知度が増えれば、それだけバレる確率高くなるわけだ！

「……いや、よく考えてみて」

私は努めて冷静さを取り戻しながら、校門をくぐる。

クラスの誰かにバレると言ってもさ、この世界にはすごいエンターテイナーはたくさんいるわけで。

クラスで話題になるレベルなんて、登録者ウン十万超えのトップVtuber位にならないと。

つまり……そこまで気にしなくても、良いかも。

そんなこんなで教室の前に着く。

いつもの習慣で度無しメガネを掛けてから、自分に言い聞かせる。

「うんそうだ絶対そうだ！ そうだよ、私が思う程、みんな私なんかに興味ないじゃん！ アハハッ、胸が軽くなってきた！」

気付かない内に自意識過剰になってたよ。はーあ、杞憂杞憂♡

私は胸を撫で下ろしながら、教室の戸をサラッと開けた。

「好きなVtuber？ 【宵月レヴィア】かな。昨日、初配信したばっかの子
なんだけどさ……切り抜きあるよ。見る？」

クラスを中心《イケメン》がおもっつきり布教してた。

「三波くうーん!! ちよっと私と一緒に来てほしいイイイなああアああ!!
!？」

談笑中、否、布教中の彼の袖を引っ張って、私は彼を教室から引きずり出した。
ホームルーム開始を告げるチャイムが後ろから聞こえてきた。

そうして教室とは反対側の校舎、その裏の日陰まで来た時に、彼——三波恭介君
が声を掛けてくれた。

「あのくもうそろそろ良いんじゃない？」

「え……っ!？」

だから今気付いた。

袖をつまんでるだけと思っていた私の手は……三波君の手を握ってた。

「ひゃあ!? ご、ごごごめんなさいっ!」

私はパッと彼の手を離すと、慌てて頭を下げた。

彼は後ろ手で頭を掻きながら、首を傾げた。

「いいって謝らなくて。で、俺を連れ出したのはなんで？」

………まずい。

私は頭を下げて顔が見えないことを良いことに、たらたらと汗を垂らす。どうしようどうしようどうしよう何か言わなきゃ、でも何言ったらいいの!?

「え、はっ、その、あの……あ、の」

うゝゝうるさいよ心臓お!

前髪をサツサツと降ろして、赤くなっちゃった顔を隠す。

なんで!

よりによってなんで……三波君が【レヴィア】を知ってるの!?

彼の名は三波恭平。学校を代表するイケメン君だ。

スポーツ万能・成績優秀で『フィクション』出身です』と言われても納得しちゃう

うくらいの美男子。

そんな人が、彼が、どうして。

そうこう考えてる内にどんどん辺りに静寂が包んで——サアアアアツとどこ

からか風が吹いた。

日陰に咲いた桜の花びらが、私と彼の間に舞い込む。

「もしかしてさ——姫宮さん……好きなの？」

「……ひいえ!？」

バクン!! と心臓がひと際強く胸を叩いた。ぼわって顔が熱くて熱くてアダメだ訳分かんなくなってきた!

「そ、そんな！ ちが……っ！ 私なんかが三波君と」

「宵月レヴィア、好きなの？」

「だなんて………エ？」

桜の花びらを押しつけて、ぐいっと一歩踏み込んだ彼の顔。

その切れ長クールな瞳の中にある輝きは……伽夜ちゃんと同じだった。

第7話 推しを語り合う仲になりました（推しは私自身です）

「宵月レヴィアは間違はなく次にくるV t u b e rだよ。姫宮さん、V t u b e rって前から見てたの？」

「あ、いや、妹が見てたのを横でちよっこっとだけ……」

「そっか、それで宵月レヴィアを知ってるのすごいね。推すタイミングは人それぞれだけど、レヴィアさんに関しては今が推し時だよ」

「れ、レヴィアたん……」

「愛称だよ、昨日、初配信だったんだけどすごく可愛かった」

「か、かわっ！ かわ……かわ……かわ……かわ」

「そう、俺も最初はガワから興味持ったんだ。へブンズライブのステラってV t u b e rが描いてるんだけどさ。ほんと可愛いんだよ、でも俺が本当に好きになったのは最初の挨拶でさ。墮天使の威厳っぽさを出す高笑いなんだろうけど、あんまり

にも似合ってなくて可愛いよね」

「あ、あああああああ~~~~~！！」

「それとあのショート動画！ お風呂鼻歌は最&高だった。ココロ〇ドルをあんな可愛くできるのは天性の才覚だよ。湯舟の水音も良き」

「っ！ っっ！！ ~~~~~！！！！ (声にならない悲鳴)」

「でも俺は寝言の方もイチオシなんだよ。ムニヤムニヤ感がすごく庇護欲かきたたえられるというか……撫でたい、頭撫でたい。イヤホンあるけど聞く？」

「勘弁してください……おねがひしまひゅ……」

こてんと地面に転がった私は「はあはあ」と息絶え絶えで彼にお願いした。悶え過ぎて息が辛い……！ いやもう彼の語りが辛い！

三波君、真顔で淡々と推し語りしないでお！

クラスの中でもイケメンとして知られてる彼の鉄面皮はすごい強度だった。

ぴくりとも動かないんだよ、表情筋。

なのに目だけは無邪気に燦然と輝いてるんだよ！

「……ごめん喋り過ぎた。嬉しかったんだ。V t u b e rの話できる人、いなくて

「さ」

「え、でもさっき話してたよね？ れ……レヴィアちゃんのこと」

「あれはどうしても話したくて。でも、あんまり伝わってなかった。好きなものを語り合いたいだけだったんだけどなあ……」

その時の三波君の顔があんまりにも寂しそうで……。

私は、なんて言えればいいんだろう？

ああ——こわい。

どうして、言葉ってこんなにこわいんだろう。

嫌われないかな、引かれないかな。

そういう不安が喉を塞ぐ。私にとっては慣れた感覚——昨日起こったことが特別過ぎて忘れてただけの感覚。

——でも。

コメント欄が頭の中に浮かんで流れてくる。

好きだって言ってくれた。

可愛いって、言ってくれた。宵月レヴィアを、あんなにも。

三波くんも、その中の一人なんだ。

……勘違いしちゃ、いけないって分かってるけど。

「私も、好きだよ」

きゅっと、隣にいる彼の袖をつまんで、言う。

墮天使だった自分を、脳裏に描いて、言う。

「宵月レヴィアが好き。だからっ」

応えたいと思った。目の前の眷属に。

すっごい恥ずかしいけどっ、でもそれ以上に……嬉しかったから。

「ここで、私と語り合いませんか」

声が震えた。指が震えた。でも、胸の中は震えなかった。

言わなきゃいけないことを、伝えなきゃいけないことを、言えたから。

彼はきょとんと目を丸くして——鉄面皮が、綿毛のように解けた。

「良いの？」

暖かくなった目の輝きに、私はふにやって頬が緩んでしまった。

「私で、良かったら」

こうして私は、三波君と【宵月レヴィア】について話し合う仲になった。

「じゃあ、一緒にレヴィアさんの寝言聞こっか」

「……………え？」

「はい、イヤホン。いやさつきも言ったけど、俺のイチオシは入浴鼻歌じゃなくて寝言の方でさ。想像以上のふにゃふにゃっぷりで、しかも出てくる単語が『なんでそれ？』みたいなものばっかで」

キュッと問答無用で、耳にイヤホンを詰められる。

初めてクラスメイトの男の子とイヤホンを分け合いました。

聞くのは自分の寝言です。

「一体レヴィアさんってどんな夢見てるんだらうね」

「……………ホントにね」

この後、私はめっちゃめっちゃ悶えまくりました。

第8話 マジできつい淫乱猫（女子のみんな、逃げるよ!）

「どう？ レヴィアさんの寝言。本当ふにゃふにゃでかわいいよね。ちょっとしたASMRだよ。ぜひとも寝起き凸配信をやってほしい」

「はい、分かりました、一考しておきます……。」

「？ なんで顔隠して小刻みに震えてるの？」

「か、かわいすぎてえ！ つらいなあ！」

「ヤケクソ気味の自画自賛に、当然だけど彼は気づかず、むしろ指をぱちんと鳴らす。」

「分かりみが深い。尊みの過剰摂取だよね、見た者を心肺停止に追い込むなんてさすが堕天使、罪深い」

「冤罪だよお!!」

「わたしそんな悪くないよお！ 諸悪の根源、私の妹お!!」

「？ なんで口パクパクしてるの？」

「……（真実を伝えられなくて） つらたん」

「ね、つらたんだね、プリティはギルティだね」

プリティギルティレヴィアちゃんってか？ こいつあ傑作ダゼこんちくしょうめ。

体育座りしてた私は、両ひざの間に顔をうずめた。

伽夜ちゃ~~~~あん！ 幾らなんでも投稿し過ぎでしょうよお！

帰ったら妹が痙攣するまでくすぐろうと思った。

そんな風に復讐の決意を固めてたら、ふと三波君のスマホ画面が目に入った。

宵月レヴィアのチャンネルに今夜の配信のリマインダーが表示されている。

サムネにいるレヴィアと猫のAvatarを見ながら、私は三波君に聞いてみようと思っただ。

「ね、ねえ三波君。キャスパーってどんな人？ い、いやね？ 今夜、あの人とレヴィアちゃんコラボするじゃない？ 私、他のVtuberは詳しくなくて」

「あ……キャスパー、ね。うん……あれは、個人で活躍してるVtuberだね」
あ、あれ？ なんだろう？ テンションが露骨に落ちてるような。

明らかにローテンションだけど、三波君は語ってくれた。

キヤスパー。

私みたいに企業とか事務所に所属していない、個人で活動しているマスコット系 V t u b e r 。

白くてモフモフの毛、ぴよこんと立った長耳に……子猫特有の、あの魔性の魅力を秘めたプリティフェイス!

「かつ、かわい! かわいいー!」

キュンツと胸の中が絞めつけられて、声が絞り出される。可愛すぎてばたばたと悶えてたら、三波君が「猫好きなの?」と尋ねてきた。

「うん! だいです……き」

パアツと心の底から笑顔になれそうだった私は……額を抑える三波君を前にして、しりすぼみ的に声が小さくなった。

「そっか……そっかあああ~~~~」

「え、え? ど、どうしたの?」

なんだろう、なんかこの反応見たことある気がする。少し思い返せば、すぐに思い至った。——昨日のコメント欄とまったく同じ反応してる!?

同級生に他人の寝息を聞かせてきたあの三波君が、躊躇いながら聞いてきた。

「……知りたい？　どんなV t u b e rか」

「え、う……うん、知りたいよ。だって……」

だって今夜話す相手なんだから。

なのに昨日のコメント欄しかり三波君の反応しかり……どんどん怖くなってきた。

でも、このまま何も知らずに、その人とコラボする方が——よっぽど怖い！

「分かった。じゃあ、キャスパーのB w i t t e r ^{ブイッター}のアカを送るよ」

ほどなくして、さっき交換した三波君のB I N E ^{バイン}から、URLが送られてきた。

あれ？　話してくれないの？

私がそう思ったのが伝わったのか、彼は念を押すように言った。

「いいかい、いくら俺でも同級生の女子にアレを見せるのは躊躇うんだ。見るなら

自己責任で見てくれ——俺には荷が重い……」

「こ、ここまで恥ずかしい思いさせといて……今更躊躇う……だどっ!？」

思わず本音が漏れてしまった。

私は慌てて首を傾げた三波君からスマホの画面に目を移した。

そしておそろおそろ……URLをタップ。

キャスパーさんのBwittierのアカウントに飛んだ。うん、プロフもアイコンも別に普通………

『ぼんような猫ならたべてねるだけだろうけど、吾輩はおなにーもできるえらいねこだ。にんげんよ、ほめたたえよ、しこしこできてえらいねってほめたたえよ』

『ねこのにんしんりつは百パーセントなのだ。つまり吾輩のちんちんはNTRの竿役に適役なのである』

『クレアちゃんによしよしびゅっびゅっさりたいよー、ステラちゃんのちっちゃい手でもふもふしてもらったあとにぎこちなくしこ

スマホを投げた。

今までこんな剛速球投げたことないってくらい、ぶんなげた。

140キロはかたかった。

肩が震える息が荒い。

がたがたと肩を両手で抑える私を、三波君は優しい目で見守ってくれてる。

第9話 もうヤダ助けてパパあ！（コラボ配信、始まります）

「こ、こんレビ！ 待たせたな眷属達よ。ヘブンズライブ所属の墮天使…宵月レヴィアである！ そして！ 今宵、宵月家に訪れたのは、この猫！」

「大きいち○こには棘がある。どうもはじめましてこんキヤスです。個人勢V t u b e rキヤスパーです」

かひゅ、って声、初めて喉から出した。

初手の挨拶からくじけそうになった私は必死に立て直そうと、笑顔を浮かべる。笑えばいいと思うよ。

そう残してくれた三波君のアドバイスの通りに。

「ふ、ふはは、ふはははは！ それにしても今日はVとして先輩であるキヤスパーさんに来てもらって本当にありがた」

「えー今日は天使の聖水が飲めると聞いたので来ましたにゃん。という訳で天使、

コップ持ってきたから駆けつけ一杯」

ことん、とコップを置く音がヘッドフォンの向こうから聞こえてきた。

スウーッと、息を吸えば吸う程、顔が青ざめていく。

「ア、アハハタスケテアハハ！　アハハハハハハタスケテタスケテタスケテ」

三波君、あなたの言う通り笑ってみただけどやっぱり無理だよ。

私の引きつった頬をアバターのレヴィアが反映したまま、キャスパーさんとのコラボ配信が始まった。

「え、と、えあ……そ、それでは企画の説明を……」

いや、ていうか——本気でコレやるの!?

信じられなくて、信じたくなくて、このコラボを企画した伽夜ちゃんを見るけど……読むべきカンペの内容は変わらない。

「き、企画の説明を……あ、うあ」

はくはくと空気を求めて喘ぐ。声が出ない頬が熱い恥ずかしすぎて涙出てきた。

配信に禁物の無言が続いて、でもぜったい口にしたくなくてわたしは！

「~~~~~っ！ キャスパーさんお願いしますう!!」

「ええ？ 僕がいうのお？ 梓主、君なのにい？ ええそれってどうなのかなあ？ 僕、招かれた側よお？ 頼むにしても言い方ってあるよおねえ？」

こ、この下種ネコォ!!

こんな奴に頼まなきゃいけないだなんて……悔しくて、くうつと歯を噛みしめる。

「お、おねがいます……妾じゃ、は、はず、恥ずかしくて……言えないからあああ。こ今回のルール説明をおまかせし」

「負けたらがぶ飲みい！ うおしっこお我慢スマブラああああ!! 負けたら朝チュンASMR配信決てええええええええい!! !!」

「聖水い！ せめて聖水って言ってよお！ バカア！ えっち！ 変態！ もうヤダたすけてパパああああああああああああああああああああああああああああ!!」

今朝やめたばっかりの、元バイト先の店長に私はみっともなく助けを求めた。

「コメント」

・どけ！ 俺はパパだぞ！

・なにやってんだよ店長お！

・パパ（店長）の大群が押し寄せている!?

・くつつつつつつそwwww

・ASMR!?! (ガタツ)

・朝チュン!?! (ヌギツ)

コメント欄は、『自称パパ（店長）を名乗る眷属』と『朝チュンASMRを求め
る眷属』の二つに分かれて混沌を極めていた。

その混沌を前に、私は顔を手で覆って呻くことしかできなかった。

その間にノリノリのキャスパーさんがルール説明に入っていた。

配信ルール

① 5本勝負

② 勝負に負けたら一杯分のお茶を飲む

③ 負けた方が罰ゲームをやらせる。罰ゲームの内容は勝者の自由。

「あれ？」

「うん？ どうしたんだい、レ・ヴィ・ア」

区切って呼ばないで、怖気が止まらない。……って言いたいのを我慢して、私はおそろおそろ尋ねた。

「あの、妾が勝った場合の罰ゲーム決めてないような……？」

キャスパーさんが勝ったら、私の次回の配信は朝チュンASMRになる。

じゃあ、私が勝ったら、キャスパーさんは何をするんだろう？

ふとそこが気になって聞いてみたら、キャスパーさんが——可愛いもふもふ猫のAvatarがパチクリと目を丸めた。

「え？ 決めなくて良いでしょ。だって僕に勝てるわけないんだから」

——パチン、と視界が瞬いた。

くらりと眩暈を覚えるほどの、怒り。

リアルAvatarも、どんどん目が細くなっていく。

「では、こうしよう。もし妾が勝てば」

手を掲げると、私の意図を察した伽夜ちゃんが電動カミソリを手渡してくれた。かちつとスイッチを入れ、刃が回転するカミソリを、マイクに近づけた。

「その毛、ぜんぶ刈り墮とす」

泡と見間違えるほど白くてモフモフの『ガワ』の毛も！

変態なことばかり言う、『魂』の方の毛も！

一本残らず！

「カミソリの準備をしておいて貰おう。

配信で眉毛も頭髮も刈らせるぞ。

丸刈り差分のガワも用意してもらおうぞ。諸々の依頼料の準備もしておくのだ。

ガワも魂も！

もろとも丸ハゲにされるのを楽しみにしておけえ!!」

自分の口と思えないくらい、つらつらと飛び出た言葉。

そんな私への返答に、キャスパーは首を傾けて「ハハッ」と笑って一言。

「死体（敗北済み）がしゃべってる」

これより、聖水我慢スマブラ配信の幕が切って降ろされた。

第10話 ほおーら♡一気♡一気♡一気♡（病みロリと猫の一気飲みハラスメント）

「あっやめっ、あっあッ!? だめっ、ぐりぐりだめえ！ いやああああ

ああああああああああああ!!」

プ○ンの下投げで、地面にぐりぐりされたル○レが宙にぶん投げられる。

そのままプ○ンの横スマがぶち込まれた瞬間、タイムアップ試合終了が来た。

「コメント」

・決まったああー！

・一戦目、敗北

・キャス猫うつま

「はい、じゃあ一杯目飲んでもらいましょお〜か。ほら、早く飲んで。待ってるから。ほらほらほらほら」

「うるさいい！ 言われなくてもちゃんと飲むよお!!」

うううう、可愛いのに！ 声はすっごい可愛いのにっ!!

プ○ンの勝利演出とキャスパーの煽りが、私の悔しさを煽ってくる。

でもどれだけ悔しくても、早くお茶飲まないと……まだかな伽夜ちゃん。

お茶を汲みに行ってくれた妹のことを考えた瞬間——ゴトンと一杯分のお茶が置かれた。

「……え？」

正しくそれは【一杯分】だった。

たとえ——ペットボトル一本分のお茶が入ってしようと、そのコップを使えば確かに【一杯分】だった。

「え……？ ま、え？ え？」

「コメント」

・なに？

・状況が分からない

・ゴトン言うたぞ今

コメント欄は困惑してる。

そりゃそうだよ……このコップのサイズ見れないんだもん。そしたらキャスパーがフォローを入れてくれた。

「はいちなみにく、今回僕らが使ってるコップこれね！」

配信画面に映る、銀色のコップの画像。

それは私の前にあるコップと同じものだった。

「保温性抜群、500ミリリットル入る優れもの！」

「飲めないよこんなのお!!」

私の絶叫にコメントが高速で流れる。

「コメント」

・それはやめとけ

・おいクソ猫お!!

・2。5リットル以上は命の危険が

「ヤダヤダヤダヤダヤダ!! やだぁー……!!」

レヴィアが激しく首を横に振る。

こんなのって無いじゃん! もうお○っこところの話じゃないじゃん!?

お

茶の飲み過ぎで命の危険迎えたくないヨォ!!

そしたらキャスパーが衝撃の事実を告げた。

「いや——このコップで飲もうって提案したの、レヴィアたんだからね？」

……………え？

頭の中が真っ白になる。

いや、私、そんなこと言っただけ。

ハッと気づいて、私はゆっくりと後ろを振り返る。そしたら、私の視線に気づいた伽夜ちゃんが……ペロっと笑顔でベロを出した。

「お前かあああああああああああ————————っっっっ!! !!

!!

「だから僕じゃないヨォ!?!」

「あっ! ちがう! ちがくて!」

や・や・こ・し・い!

慌てて勘違いを訂正してから、私は机の上のコップを見つめる。

——やばい、ぜったいやばい。

ハツハツと呼吸が浅くなる。

震えながら手に持ったコップは、ずっしりと重たくて。

飲まないと配信が続かない。

けど飲んだら絶対……………ッ！

「では、一気飲みしていただきましょお！」

「わああー……!! 南無三——!!」

「南無三は墮天使的に色々違うのでは!？」

キヤスパーのツツコミを無視して、私はコップを傾けた！

こくこくこくと自分の喉が鳴ってる。

冷たいお茶が喉を通って、お腹に溜まっていく。

「あそーれ、一気！ 一気！ 一気！ 一気！ いいよおレヴィアたん！ 輝いてるヨォ!？」

んくんく飲んでる声色っぽいヨォ!!」

この、クソ猫お!!

キヤスパーのコールのせいで離すに離せなくなる。

一気飲みなんてしたことないのに……………あれ、でも意外といけ

「んむっ!？」

それは一瞬だった。

ほっぺたが膨らんだと思った途端、ツウツと口の端からお茶が溢れる。垂れたお茶が首筋を伝って、服を濡らしていく。

「っ~~~~~~~~ぷあっ！」

空のコップを叩きつけた時には、私の服はびしょびしょになっていた。んはあはあはあ、と荒れた息がマイクに入る。

「コメント」

・ひい！

・初台パン！

・いやこれ台パン!？」

・だいじょうぶ!? ねえ、だいじょうぶ!？」

あー……なんかいっばいながれてるう。

心配と不安が高速で通り過ぎるコメント欄を、ぼーっつと見つめる。あたまふわふわするう、なんだかぜんぶ他人事みたいにかんじるう。

ほうけたまま配信画面を見つめていたら、レヴィアの目から光が消えていった。
あーわたしもこんなかおしてるのかなあ。

不思議なことに、楽し気に煽ってたキャスパーが一番心配そうにしていた。

「あ、あの、だ、だいじょうぶ？　ねえ？」

わあ〜〜かわいいこえ。

わたしは何も言わず、にっこりとほほ笑んだ。

そしたらハイライトの無いレヴィアもにっこりほほ笑む。

「れ、レヴィアさん？　ちよっ…どういふ感情？　今それどういふ感情の顔!？」

「——クルシイってカオだよオ？」

わたしはゆっつっつくりと、一気飲みの感想を語った。

「あのねえ？　いまわかったんだけどねえ？　ヒトってねえ？　のみの飲んでるとき息止まるんだよお？　しってたあ？」

「ぞ、存じ上げませんでした…」

「それでねえ？　くちのなかお茶でいっっぱいになってねえ？　ごぼってあふれてね？　わたし今ぐしよぐしよでねえ？　寒くてねえ？」

「あ、あの、ごめんなさい。申し訳ありません。僕が悪かったです」

「んう？ どおしてあやまるのお？ おかしいんだあ。さっきまであんなによるこんでたのにい。おかしい猫ちゃん」

「止めてえええ!! 若干ロリボイスなのやめてエ！ ホラー味増すから！ めっちゃ怖いからあ！」

2回戦は、キヤスパーさんがダメージ100%の状態から始めてくれた。

わたしはじっくりじっくり攻撃して、300%になってからていねいにてえねえに吹っ飛ばした。

キヤスパーさんの一気飲みの際は、応援してあげた。

がーんばれ♡がーんばれ♡……って。

「コメント」

・スマブラってホラゲーだったっけ

・こわいよお!!

・こんな『がーんばれがーんばれ』は聞きたくなかった……

・草

- ・ w w w
- ・ 闇落ちV t u b e r
- ・ 病み堕ち天使
- ・ あれ・・・なんか・・・えっちい
- ・ どきどきします
- ・ ぞくぞくします
- ・ えちちちちッ、ポッ
- ・ 透き通った声しやがって
- ・ 初配信より清楚なの草
- ・ あっ
- ・ うっ
- ・ ふう
- ・ お世話になりました

カクヨムコンテストに参加しています！

応援よろしくお願いします！

741950
<https://kakyomu.jp/works/16816927859130>

第11話 お〇っこ我慢ス〇ブラ決着! (もう……むりッ!)

リスナーさんから一気飲み禁止が出た。

『やめなさい』の一言がぶわああと流れる様子は圧巻だった。

でも一気飲みはやめるけど、飲む量(500ミリリットル)は変えなかった。

そうしてスマブラ5本勝負再開。

キヤスパーは強かったけど、なんとか最終戦にもつれこませた——ンダケド

「キヤスパー!? ちょっとこれ何の音!? 何の音流してるのコレェ!!」

「コップにお茶注いでる音だが?」

「まだ勝負終わってないでしょおがああー!? 喰らええええええ!!」

棒立ちしてるプ〇ン目掛けて思いつきリスマッシュをかます。試合はタイム制だからいくら倒してもプ〇ンは復活してくる。

キヤスパーの可愛い猫顔がニヤニヤ不細工になっていく。

「いやいやいやレヴィアたん強いからさ。僕は負けを悟って、お茶の準備をしてるだけだよ? 何も怪しいことはしてないサ」

「うそ！　ぜったいいうそだあ！　だってさっきから何ッ回もゴポゴポ音してるもん！　ねえ！　コップ二つ用意してるでしょ!？」

こぼこぼとお茶がコップに溜まる音に、背筋がぞくぞく震える。

音が止んだと思っただらまたこぼこぼとお茶が注がれる音がするんだけど……その時ね聞こえるんだよ。

キンッ、てコップとコップがぶつかる音が！

「なんのことかわかんないなあ~~~~~?」

「わああああ~~~~~!!　しらじらしい！　白々しすぎるよお!!」

「キヤスメロ、猫だからよくわあかんない♡」

「んにゃああああああああああああああああああ!!　!!　!!　!!」
叫んでもキヤスメロディへの怒りは少しも減らなくて、私は配信の机をダラダララッ!!　と叩きまくった。

——それが、いけなかった。

ブルッと自分の意志関係なく、肩が震える。

それは下腹部からやってきて……次の瞬間、私の意識は一気にお股に持ってい

れた。

「あ」

コンマ何秒で私はコントローラーを離し、両手で抑える。

ゴトンと落ちるコントローラー、制止するル○レ。

「いや」

きゅっと爪先を丸めて、尿意を抑え込む。

けれど、この時には、もう。

「——さて、取り返しますか」

キヤスパーが動いていた。

今やってるスマブラの設定はタイム制。制限時間以内なら何度でも復活するけど、勝敗を握るのは【相手を倒した数】。

キヤスパーがお茶を注いでる間、私はプ○ンを5回倒した。圧倒的に私の方がリードしてるのに。

「ほい」

バシン！ と、プ○ンの小っちゃい拳で華奢なル○レが空中へ浮き上がる。

そこに叩き込まれる、必殺技。

プ○ンの目蓋が落ちた瞬間——カキーン!! と甲高い雷鳴がル○レが粉々に消し飛んだ。

「あと5回かあ、ちょっとと急ぎ目に殺《や》ろうか」

「う、うううう……させるもんかあ!」

コントローラーを手にして言ってみるけど全然だめだった。

こっちの攻撃は全部ガードされるか躲されて、向こうは次々と当ててきて。

ピンチが迫り寄ってくる。

ゲームも——私の膀胱も!

「ああー! うあん! やっ、ちよっ、ムリィ!! もうムリィ……む、り」

フーフーと荒く息をする。

もじもじ足を組み直すけど、どんどん内股になっていく。

「あつれえ? ちょっとプレイが、お粗末になってきたなあ……?」

「もうっ、あたっ、当たってよお!! なんで当たんな……あつ、もおおおお!」

途切れることのない攻撃の果てにスマッシュを決められて絶叫する。

「コメント」

・追いつかれたあー！

・せっかくのリードが

・こっからこっからあ！

「みんなあ……っ!!」

応援のコメントに涙がにじむ。

そうだ、私はまだ負けてない！ お腹はタプタプだし、今にも決壊しそうで、操もおぼつかないけど！

「ありがとお、眷属う！ 見てて！ 私ここから勝ってみせるから」

「——なあ、ちよつと。良いのか眷属」

え？ パチクリと瞬きする。

キヤスパーはあろうことか、唐突に私の眷属《リスナー》に声を掛け始めた。

「僕が勝ったら、レヴィアさんのシチュボ聞けるんだよ？ しかも朝チュンだよ？

決してR18ではない、しかし想像掻き立てるには十分なボイスだ。それに——

——あと一押しでコイツ漏らすぞ」

「キリッとした顔で何言ってるの、この汚物猫!？」

「あらゆる女性Vにおもらし企画を仕掛けてきた僕だから分かる。さっきの吐息の感じからして……あと一杯でレヴィアさんの聖水が聞けるんだぞ」

「今すぐ辞めろお！ 全ての女の子のために引退しろお!!」

このゲスマスコットめ!!

全然可愛くないゲスマスコットは熱烈に私の眷属に言葉を語り続ける。

「僕が勝てば朝チュンと聖水だぞ!? いいか眷属！」

僕がお前らの希望なんだぞお!？」

私はため息をついた。

ホント何言ってるんだろう、このゲスマスコットは。そんな言葉にみんなが乗せられるわけないのに……。

「コメント」

・キャスパーがんばれええー!!

・がんばれキャスパー

・勝て、クソ猫お！

・罰ゲームひどい
ww

・そこだあ、飲ませろおーおー!!

「みんなあ?」

応援のコメントに涙が枯れる。

味方だった筈なのに……コメント欄のキャスパーコールがすごく辛い。

「いよおおくくくしい! 絶対勝つぞオ!! 強くなれる理由を知ったああ

ああああああああああああああああああ!!」

「そんなもんで強くなるなああああああーあーあーあーあーあー!!」

飛び掛かってくるプリンの圧に、私は絶叫して逃げる。

どうしようどうしようどうしよう!! 倒^スした数^コのリードは潰^アされてるし、私の

PS じゃキャスパーから一本は取れないし、それに……。

キュウウウツ、と爪先を丸める。

「あう、ふっ……はう」

「へいへい! 我慢してるぜエ!?! その吐息最高にセンシティブうううう

ううん!!」

「うるっさい!! 黙れ、クソ猫ォ!!」

「おほいおほい、乱暴な物言いだなあ!? 初配信の清楚さはどうしたんだああい

! 余裕の無い証だねえ、エッチだねえ!!」

「もおおおおやだあああああ!! だいたい何なの!? あんたもみんなもお!!

私かも……漏らして何が嬉しいの!? 汚いだけじゃん!? ていうか音しか聞

けなくない!」

「え、なにその言い方? 音じゃ満足できないでしょって? 出すとこ見せてく

れるってこと? 直飲み許可ってこと?」

「あんたぜつったい許さないかな!! ぜつっったいボコボコにしてやるからあ

ああ!!」

逃げて、勝ちを拾えない!

私の膀胱も羞恥心も守れない!

ル〇レを反転させて、プリンに立ち向かっていく。

一撃離脱を意識した立ち回りに徹する。確実に入れられる瞬間に一発だけ入れて、即逃げる。

これを繰り返す。

それでもダメージは入れられるけど……落とされることはない。お互いにジワジワとダメージが蓄積され、だんだん勝負が分からなくなってきた。

「フー! ウー! グルルルフシャー……!!」

「レヴィアたん!? せめて人の言葉喋って!? 猫《ぼく》の立つ瀬が無いよ!

」
「うるしえー……っ!」

こっちはもう限界なの!! 爪先の丸み具合も内股の絞めつけ具合も最高潮。

別に好きで喰ってる訳じゃないの普通にもうヤバいの!

一発……お互いにあと一発入れたら、飛ばせる。

前のめりになって配信画面に映るゲーム画面を見つめる。

目をギラギラさせて息を浅く繰り返す。

一挙手一投足を見逃さない……ぼよぼよと煽りスクワットされても気にしない。

露骨な誘いだ。

向こうも焦ってるんだ、時間がもう無いから。

試合時間《タイムリミット》が迫る。

すると——向こうのプ○ンがじりじりと歩いてきた。誘いかと思ったけど……皮肉かな、プレイを通してキャスパーのこと分かってきた。

私もル○レをじりじりと歩かせる。

操作キャラが一秒二秒と時間を踏み潰すにつれて、プレイヤーの緊迫が高まる。配信にあるまじき沈黙が降りるけど、コメントは変わらず流れている。

……ル○レの間合いに入った。

画面右上を一瞥してから、私はカッと鋭くスティックを倒す。

細い腕の先に伸びた雷光纏う剣閃が大気を焼く！

完全にこっちの間合い、向こうは手足が短いから攻撃は届かない。

「やっ……ッ！」

ひらりと、跳躍する桃色の球体。

『ぷいっ』と可愛い声で放たれた絶死の一撃が……ル○レの体軀をくの字にへし折った。

カキインと甲高いエフェクトが鳴って、野球ボールみたいに私のル○レが場外に

第12話 勝者の特権じゃあ! (カミソリ用意)

スマブラで吹っ飛ばされる時のパターンは三つ。

1。ゲーム画面にへばりつくように吹き飛ば

2。その場で消し飛ば

3。すごい勢いで画面外へ飛んでいく

その中で3だけが、試合時間を過ぎたらスローモーションになって、吹っ飛ばが無効にされる時がある。

無効になれば、私とキャスパーのスコアはイーブン。

サドンデスに持ち込める。

だから私は試合時間を確認してから、わざと先に攻撃した。

全てはキャスパーに『勝った』と油断させるため。

でも、吹っ飛び方がどれになるかは完全に運……完全に賭けだった。

「ノーカンです」

「ええ……」

「ノーカン！ ノーカン！ ノーカン!!」

子猫V、ご立腹だった。

せっかくトイレから戻ってきたのに、うんざりだった。

私の表情を読み込んで、レヴィアもうんざり顔になっている。

「コメント」

・ジト目助かる

・ガチで見下げ果ててるやん

・興奮します

・ノーカン！ ノーカン！

「頼むよオ……先に僕の毛刈るからあ。差分も用意するし、もれなく剃った毛は郵送するからあ」

「もれなく要らない。普通に、もう、キモい」

「アッ！ 軽蔑の眼差しも良いね！」

「無敵か、この猫」

はぁー、なんだろうね。

私の中で、この人への遠慮ってものが全然無くなってる。

自分がこんな刺々しい声出せるなんて知らなかったよ……それで喜ぶ人達がいることも。

「あの、一応聞きますけど……なんでもう一回したいんですか?」

「朝チュンASMRと放尿プレ」

「それ見たことかぁ! やりますと言うとでも!?!」

「そこをなんとか!! ワンチャンス! ワンモア!」

「コメント」

・ASMR咀嚼音をおくれー!ー!

・わいのみたらし団子を食べておくれー!ー!

・しまえよ、その二玉しか付いてない団子串

頼み込むキャスパーとコメント欄を交互に見やる。

ぐぬぬぬ、と私は唇を噛んだ。

どうしよう……水飲まずにだったら別にいいかな?

でも勝ったの私だし。な

んでお願い聞いてあげなきゃいけないの………。

【って思いきれないのが、お姉ちゃんだよね】

そう書かれたカンペが、横からスッと目に入った。

伽夜ちゃんの字だ。

振り返ると、私以上に私のこと分かってる妹が、にこっと笑ってマジックペンを走らせた。

次に書かれたカンペを見て、私もこの線が妥当だなと納得できた。

【あと、さっきから素に戻ってるから。直して】

はい、すみません。

私は咳ばらいを挟んでから、

「本来なら貴様らの頼み事など聞いてやる義理は無いが……堕ちたと云えど、妾も天使の支柱。堕天使の慈悲を貴様らにくれてやろう！」

「おおお!? 60字くらい喋って何一つ新情報が無い! あのと、もっと端的に仰ってくれませんか? トーク下手?」

「断罪《ギルティ》すんぞあんだあ!!」

んんう、もうっ!

もう一回咳払いして、調子を合わせる。

「良いか、先に言うがもう一試合はせん！ 一気飲み苦しいし、我慢するのキュウツてなるし、お茶で服びちゃびちゃだし、もうイヤッ！ ヤなの！」

「ええええ濡れてんのお!? そのうっすい布濡れたら、もうドスケベ」

「もおー黙っててよおおおー黙って!!」

「だって！ 言葉遣いがそこはかとなくエツツなんだもん！ お股がキュウツとか服で透け透けとかあ！」

「あんたの頭がピンクなだけだよお！ そんなこと私言っていないよお！」

「コメント」

・ぐっだぐだやないか
WW

・猫の誤変換が過ぎる

・そこはかとなくセンチティブなのは分かる

・天然でそれやってるんだよ、この子

・そこがマジでエチエチなんだよなあ

「それ見たことかあ！」

「うそおーおー!? え、私そんな変な言い方してt」

言いかけたところで、ガツンと後ろから妹に蹴られた。

すみません！ また一人称、素に戻ってました！ ちがうもん……私エッチじゃないもん……エッチなのはみんなだもん……っ！

しょぼくれながらも、私は話を元に戻す。

「ううう……えっとな？ だからな？ 勝ったのは紛れもなく妾だけだな？ それだとみんなが楽しんでくれないのも、妾ちょっとは分かるんだ。だから……再戦はしないけど、代わりに——次回はASMR配信しようと思う」

「コメント」

・キチャーーーーー!!

・猫オ！ お前の戦いは無駄じゃなかったぞお！

「言っとくけど、朝チュンじゃないからな!? 普通のASMRだからな!? そ

んなえ……エッチなことはしないから!!」

「ん？ エッチなことはしない？ じゃあ具体的にどんな行為までが、レヴィアたんから見てもエッチなの？」

「ど、どこまで……?」

何を言ってるの、このゲス猫は?

いまいち質問の意味がピンと来てない私に、キャスパーが畳みかける。

「キツスはエッチですか?」

「そんなの……す、好きな人となら、そのっくくく!」

「じゃあ深い方は?」

「それは駄目だよお!!」

「お? 深いチューの意味は理解できるんですねえ! なるほどですねえ!」

「こいつうううううううううう!! !!」

「コメント」

- ・ 何の質問してんだよ W W W
- ・ 深い方って聞き方えぐっ
- ・ おいら分かったぞ! これ AV のインタビュアーだ!
- ・ 好きな人とならエッチじゃないって発言自体がエッチだ
- ・ 逆に好きな人としてもディープは駄目なのか……この墮天使、乙女か?

ねええええナニコレえええええ!!

私は涙ながらにコメント欄を睨む。

別に变なこと言っていない(はず)なのに！　なんで私がエッチなこと言ってるみたいな空気なんだよおー！？

「フレンチキスOKなら唇以外の場所でも構わない？　手の甲は？　頬は？　首筋は？　鎖骨はどう？　いやあ~~~~~どこまでが堕天使にとってのエッチラインなのか気になりますなあ!!」

「はいっ！　もう終わり！　配信終わり！　眷属のみんな、視聴大儀であった！　貴様は約束通り、毛え剃れ！　眉毛剃れ！」

「なぜに眉毛!？」

「うるさいうるさい、さっさと眉毛剃れクソ猫お!!」

「あっー堕天使様！　困ります困ります堕天使様！　PCブチ切りはおやめください堕天使様！　アッー!!　堕天使様アー！　レヴィアさんの貞操観念が明らかになるASMR、みんな絶対見てくれよな!!」

ブチンと、配信は終了した。

通話アプリ『ビィスコード』のサーバーにて

キヤスパー「はい、おつかれサマンサタバサ!」

レヴィア「おつかれさまです」

キヤスパー「最後の世紀末ボイス良かったわー断罪咆哮《ギルティロア》WWW」
レヴィア「うつつつつさいですよ!! !! もっと手を抜いてくれるって言った

じゃない

ですか! 全力で漏らそうとさせないでくださいよお!

キヤスパー「だあいじょうぶだよ、マジ漏らし0。1秒前で配信ブチ切るさ。
後輩をBANから救い、僕だけ放尿音を聞く。先輩らしい完璧な対応だろおう」

レヴィア「スクショしました。B w i t t e r でつぶやきますね?」

キヤスパー「申し訳ございませんでした墮天使様。眷属ハルマゲドンの軍隊呼ばないでください。
い。最終炎上ラグナロクやめてくださいお願いします」

レヴィア「そんなことより、剃ってください」

キヤスパー「? なにを?」

レヴィア「毛」

キヤスパー「承知、脇毛で良いかな……剃ったら郵送するね♡ 住所と郵便番号教えてもらえるかな？」

レヴィア「ねえどうして猫は死なないの？」

キヤスパー「幼児みたいな無垢な質問なのに、含みを感じずにいられない。ハッ……！ チ〇毛をご所望なんだね？」

レヴィア「ねえ死？」

キヤスパー「こ。これは……っ！ 殺意が昂り過ぎて、もう文字打つのも面倒になったと見た！」

レヴィア「なんで分かるんですか腹立つなあ……剃るのは眉毛にしてください。それで剃った毛はB w i t t e rで晒してください」

キヤスパー「じゅ、住所と郵便番号……」

レヴィア「ねえ死？」

キヤスパー「受け取ってよオ！ キヤスパー（毛）を身近に感じてよオ！」
ぽこん、とビィスコードの通知音。

墮天使と淫乱猫のチャットに———天使が降臨した。

リエル「ASMRやるんだって? 僕、詳しいから色々教えてあげるよ!」

後日、ヘブンズライブの先輩【旭日リエル】と【宵月レヴィア】のASMRコラボ枠が立てられた。

そしてBwittter上でキャスパーが、剃られた眉毛を乗せたティッシュの写真を流した。

リップ欄には「白猫じゃなかった?」「毛、黒いやん」「おまえ黒猫なんか」「身代わり立てたな」と散々なつぶやかれようだった。

カクコムコンテストに参加してます!

応援よろしくお願いします!

https://kakuyomu.jp/works/16816927859130

741950

第13話 眉毛ええええええ!! (まゆげえええええ!!)

お昼休み、教室から離れた校舎の裏で、私はハアハアと息を荒げていた。

胸のざわつきが強すぎて、口元を抑える。

なんでなんでなんで、って頭の中がぐるぐるする。

朝に教室に入ってからずっとハラハラしていて、同じ所をうろろ歩いている。

やがて……彼がやってきた。

「あっ、姫宮さん。呼びつけてごめんね。なんとなく、この場所を語り場にした方が良いかなって思ってた……」

「三波くうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうくうんん!! !! !!」
ぐちゃぐちゃなんかどうでも良いこと言ってる三波君の言葉を遮って、私は彼の肩を掴んで揺らす。

「ま! まゆ、まゆっ、まゆっ、まゆゆっ!」

そして……朝からずつつつと気になったのに聞けなかったことを、大声で聞いた。

「眉毛ええええええええええええええええええええええええ!! !! !! !!」

「ああ……転んだ！」

今日の朝登校したら、学校一のイケメンの眉毛が剃られていました。

その影響は凄まじかった。

女子は阿鼻叫喚、膝から崩れ落ち、涙を垂れ流し、天を恨んだ。

男子は呵々大笑、マロ眉を描いて、笑い泣きして、肩を組んだ。

私はというと、大騒ぎしてるクラスの皆から離れたところで、人知れずプルプルと衝撃に震えていた。

顔のパーツとか造形自体は変わってないから、整ってて美形なのはそうなんだけど……なんか、なんか宇宙人《ミュータント》感がすっごい！

人間じゃない感とか違和感がバリバリ仕事してるというか。

これで頭も丸刈りだったら、一周回ってイケメン僧侶に見えなくもないけども。

「ウソ！ 絶対ウソ！ お母さん言ってたもん！ 男の子の『転んだ』は、情報商材のセールスくらい信じられないって!!」

「うん。俺も言ってみただけど、かなり無理のある言い分だよ。どんだけピンポイントな転び方だって話だよね」

「そ、そうだね……三波君」

「なに？」

「——もしかしてそんなに気にしてない？」

「うん！ どうでもいいね！」

目を輝かせて、臆面もなく言い切った。

わあ〜…：…すっごい悔いの無い顔。

彼は腕を組んで、うんうんと嬉しそうで頷いた。

「俺は昨日とても善い行いをした。三桁は固くて、四桁の人が幸せになるようなことを成し遂げた。その代償が眉毛だよ？ 軽すぎるさ」

「い、いったい何したの!？」

「それは言えないけど…：…まあそんなことよりさ！」

彼は制服《ブレザー》のポケットからイヤホンを取り出して、片方を私に差し出した。

春風みたいなの、にこやかな笑顔で。

「一緒に見ようよ、お〇っこ我慢スマブラ！」

「その顔で！ そんなことを！ 私に言わないでくれないかなあ!?!」

私は差し出されたイヤホンを押し返した。

ていうかもっと大事なことがあるでしょおが!?

そうして——ずっと手にしていたポーチを掲げて、彼の顔を見上げた。

「眉毛書いたげるから、しゃがみなさい！」

こうして私は人生で初めて、男の子の眉毛を書いてあげることになった。

つくづく思うけど、三波君と伽夜ちゃんってホント似てる。

目の輝きとか自分の見た目気にしない所とか。化粧ポーチ持ってきて正解だった

よ……。

彼には校舎裏にある、アスファルトの段々に座ってもらおう。

「目、つむっててね」

「ん」と返事して、瞼を閉じた三波君が私を見上げる。

き——きれいだなあ〜ホントに！

伽夜ちゃんもかなりきれいな顔立ちだけれど、男の子だからかな？

……妙にドギマギする。

ちよつと頬が熱いまま、私はポーチからアイブローペンシルを取り出した。

「は、始めるね」

「うん」

ペンシルの先端を押し当てる。気分としては色鉛筆でお絵描きしてる気分。

でも書き込んでる紙は紙じゃなくて、男の子だ。

昨日と打って変わって、沈黙が流れる。

改めて、自分の置かれた状況を確認する。

男の子と二人、校舎裏。

相手は学校を代表するイケメン。

——下手な眉毛なんて書こうものなら……女子たちの阿鼻叫喚を思い出した。

ううう……緊張するなあ。手先がぎこちなくなってきた。

このままじゃ駄目だと思って、私は三波君に語り掛けた。

「あ、あのごめん、三波君。ちよつと静か過ぎるから、何かスマホで音楽掛けてく

れないかな? 気晴らしというか」

「作業用BGM的な?」

「そそ、それ！」

良かった、分かってくれた。

私はホッと胸を撫で下ろしてから、またペンシルを三波君の肌当てた。

『負けたらがぶ飲みい！ うお○っこ我慢スマブラあああああ!! 負けた

ら朝チュンASMR配信決めてえええええええええい!! !! 』

ガリンツ!! と手元が狂った。

三波君の額に○リーポツ○—みたいな稲妻が刻まれた。

「痛あゝい」

「ちょっと!? な、なにしてんの、やめっ、やめてえ! 今すぐ止めてえ！」

「いや、これが俺の作業用BGMだから」

『カミソリの準備をしておいて貰おう。配信で眉毛も頭髮も刈らせ……』

うるっつさあい! ちょっと黙れ昨日の私いっ!!

ペンシルが、手先が震えてまともに動かせない。

「ね、ねえ三波君!? 他のBGM掛けるって選択は……?」

「やだ。俺は姫宮さんとお○っこ我慢スマブラ見たいんだ」

その曇りなき眼を見た途端、私は悟った。

—— あ、コイツ、変態猫（キャスパー）と同類だ。

だってそうじゃなければ、どうしてこんなキラキラした目で、同級生の女子にお
○っこ我慢スマブラを勧めるだろうか？

スウウウつと気持ち冷めていく。

……あれ、この眉毛、適当に書いても良いんじゃない？

クラスの女子達の阿鼻叫喚を想像したけど—— だからナニ。

騙されないで女子達、こいつ変態だから……今、目印つけてあげるから。

「いやあ、この『あ、いや』って所はマジ感あって良いよね。声の震え方的に、絶
対肩ブルツとして恥ずかし赤面してそうというか。この反応からすぐ妄想はかど
r」

ゾリンツ！ と書道の『跳ね』みたいに、アイブロウペンシルで肌を引っ掻いた。

「ぐうああああああああああああああああ!! !! !! !?」

「ほらー我慢してー。オシヤレは我慢だよー？」

「そ、そうだな……オシヤレは我慢」

ガリン！

「ぎいいいいあああああああああ……！！！！！！」

オシャレは我慢オシャレは我慢。

三波くんにそう言い聞かせながら、私はごりごりとペンスルの筆圧を高めていった。

カクヨムコンテストに参加しています！

応援よろしくお願いします！

https://kakyomu.jp/works/16816927859130
741950

第14話 鼓膜は処女膜!! (好きな推しに破いてもらいたいものなんですか?)

「三波くん、ASMRってなあに？」

「ごんぶと眉毛の三波くんは、私は尋ねる。」

派出所勤務の警官みたくなった三波くんはニチャアと答えた。

「色んなところがびくびく気持ちよくなる音だよ」

「ほんつつつとにコイツさあ~~~~~??????」

「クラスできゃーきゃー言ってる女子達に見せたい、この笑顔。」

「駄目だ、もう昨日の私には戻れない。」

「というか少しでも彼にドキドキしてた自分を無かったことにしたかった。」

「姫宮さん? どうしたの、そんな見下げ果てた目をして。俺ドキドキするよ?」

「はあ~~~~(クソでかため息)いいからもうASMRってどんなのか教え……て」

目の前にかざされた三波くんのスマホ画面。

映っているのは、彼がお気に入りに入ったYOUTUBEのASMR集だった。

『お姉ちゃんが包み込んであげる♡トクトク心音で子守歌』

『おにいさまの耳はむはむして良い？ ブラコン妹がお耳舐め』

『好き好きこれ好き♡健康器具オンでとろけるメイド』

「ひぎゃあああああーっ！！」

「姫宮さん!？」

私は飛び上がって三波くんから全力で離れる。

ギョツと目をつむって全力で顔を逸らす。

「やめて、このド変態!」

「え、今更?」

「どっ! どーせまた無理矢理イヤホン突っ込むんでしょ!？」

それで恥ずかしがってる私の顔見てニマニマする気なんですよ! もうパター

ン分かってるんだからあ!」

「その通りだとも。熟練者はいつだってビギナーの反応で愉悦するものなのだ。ほ

ら、耳を貸してごらん？」

「やだああ!! !!」

「脳みそ溶けちゃお？」

「やめてあああああああ————!! ああああああああ————!!
!!」

私の両耳に、三波くんのイヤホンがずっぽしハマる。

そうして————強制ASMR体験が始まった。

「最初はじゃがりこ」

「あっ、あっ、あっ、すごい。すごいしゃぐしゃぐ食べてる」

「みたらし団子」

「へ……ッ！ ちょっと、こ、こんな音……えっうそ」

「ブラシ」

「ふぁっ！ ヤッ!? え？ え!!? 耳入ッ~~~~~!!」

「オイルマッサージ」

「いや、やつ、ん!? お、おく、ふぁっ！ やだ、だめだめだッ……め」

「甘噛み」

「はっ……あ……ふ、うあ」

あむあむと可愛い声が遠ざかる。

イヤホンが外されてすぐに、私はころんと倒れた。肩をひくつかせながら。

私の耳から抜き取ったイヤホンを手にしながら、三波くんは純粹無垢に顔を輝かせた。

「すごいでしょ？　これがASMR。俺が現代に生まれて良かったと思える理由の一つさ。技術は偉大ハッキリわかんだね」

「ううううるさあ~~~~~いいいい……」

ホントツ、コイツ！

マジコイツウウー~~~~ツ！

耳の中まだふわふわする。

目がうるうるしてきて恥ずかしくて顔を伏せる。

すくめた肩越しにジトツと睨むと、三波くんの顔がぱあっと華やいだ。コイツっ

！　私は無理矢理イヤホンを嵌められた耳を手で押さえる。直接動いてくる分キヤ

スパーより厄介だ!!

キツと睨む私だけど、三波くんは照れ臭そうに指で頬を掻いた。

「それにしても……俺の（お気に入りASMR）で良かったの、姫宮さん？ 初めてだったんでしょ（ASMR）？ やっぱり処女（はじめて）はレヴィアさんの配信まで、取っておくべきだったんじゃない」

「勘違いされる絶妙なラインを攻めるなあ!!」

二度と言わないで!?

彼はやたら同じもじしながら「だって!」と涙をキラキラさせて、私の肩を掴んだ。

「鼓膜は処女膜なんだよ!? 一度しか破れないんだから、それだったら大好きな相手に……推しに破られたいと思うのが乙女心じゃない!!」

「そんなもん乙女心って呼ばないよ!」

例え好きな人でも鼓膜破られたくないよお!!」

「いやいやいや! 乙女は好きな男に処女膜を破られる。Vおれオれタは推しのVおれtれuらberに鼓膜を破られる。」

そこに何の違ひもありやしねえだろうが！」

もお~~~~やだあ~~~~

私はさめざめと顔を覆った。

なんなの？ V t u b e r好きな人って皆こうなの？ 鼓膜破いても良いの？

分かんない、もう分かんないよ私。V t u b e r分かんないよお……っ！（デ
ビュー済み）

私が途方に暮れてると、三波くんはハッと我に返った。

「ごめんごめん姫宮さん、ちょっと熱くなり過ぎた。姫宮さんはまだビギナー、ラ
イトなVオタだ。【鼓膜の境地】は早すぎたね」

「境地ってなに？ そんな武闘家みたいなシステムなの、Vオタって？」

分からない。もうわたし何にも分かんないよ、みんなの需要が分からないよ……
バイトに忙殺されてきたからか、お客様が求めているものを供給する精神は育つて
る姫宮であった……（遠い目）

そんな風に黄昏れてる私を置いて、三波くんはウキウキと語り出す。

「ようし、ならまだまだライトなVオタの姫宮さんに解説してやろう! 旭日リ
エルの敗北伝説を!」

「ん?」

私は首を傾げた。

流れ的にてつきり【宵月レヴィア】について語るのかと思ってた。

そう言うと、三波くんは「いやいやいや」と断りを入れる。

「推しとコラボする相手のことは知っておかなきゃ!」

姫宮さんだって、自分の娘を学校に行かせる時、担任の先生の人となり位は調べ
ておくだろう? それと一緒にさ!」

「待って、私その例えには頷けないよ?」

墮天使《わたし》は、眷属《あなた達》の娘ではない。

でも、それはさておいて。私自身、すごく気になってはいた。

「旭日リエルさんって……どんな配信をするV tuberなの?」

「フハハハハ、ならば教えてしんぜよう。空前絶後! 超絶怒涛の天使メイド!

勝利の女神にフラれ続け、敗北の女神に監禁されてる女!

可哀そうは可愛いを地で行く雑魚Vの伝説を！」

「そんなポロカスに言わなくても良いんじゃないの、三波くん!?」
幾・ら・なんでも大・げ・さ・に・言・い・過・ぎ・で・し・よ、ま・っ・た・く・う。

カクヨムコンテストに参加しています！

応援よろしく願います！

<https://kakyomu.jp/works/16816927859130>

741950

第15話 リエル先輩は男の娘!? (ASMR配信、頼りにしてます!)

【旭日リエルの敗北伝説列伝】

- ・ウシ娘のガチャ配信……推しが当たると何故か毎回データ消える
- ・EGOのガチャ配信……3千の石と引き換えにして、☆4どころか☆3も来ない

- ・バリオカート配信……高レート行くまで耐久を行って、49時間後にダウン。
- ・ス〇ブラ配信……視聴者に勝つまで耐久配信で、リスナーの半分と勝負し、敗北

- ・跳躍王配信……女性Vtuberとコラボ対決↓罰ゲームで『初体験喪失ASMR』

- ・壺姉配信……Vtuberと以下略↓罰ゲームで『ベッドで愛撫ASMR』
- ・天界村配信……女性Vtuberと略↓罰ゲームで『ビキニローション風呂A

S M R』

エトセトラ、エトセトラ、エトセトラ……。

500本の配信中、ただの一度も勝利は無く、数多の女性Vtuberから『罰ゲームASMR』でセクハラされてきた敗北の少女（♂）が——今、私の目の前にいた。

「先輩iiiiiiiiひっく!! うううええ強く生きてええ~~~~わあああ~~~~ん!!」

「ねえ初対面の後輩にさあ！ 出会い頭に号泣されて励まされる気持ち考えてみてえ!?!」

放課後直行した事務所にて。

私は初めて【旭日リエル】もとい『天海渚』とご対面した。

すごい……っ！ 年上相手に見下ろすなんて初めて！

というか雰囲気はハムスター！ こんなに小さくて儂い存在、初めて見た！

「……~~~~っ！ 強ぐ！ 生きてええええ~~~~っ!」

「ちよつとおおおおおおおおおお!! !! わたし、先輩だよ！ もうちよつ

と尊敬してくれたって……」

「あの、だ抱きしめても！ 良いですか!？」

「話を聞けえ！」

天海先輩は憤慨した様子で地団太を踏んでる。19歳♂が全力で地団太踏んだ音

が———— たむ、たむ、たむ、たむ、たむ。

「かわいいいいいいいいいいいいいいいい!! !! !!」

「うるせええええええええええええええ!! !! !!」

つやつやの黒髪（なでなでしたい!）。

丸顔だけれど滑らかなフェイスライン（指でさわわしたい!）。

女子より華奢な体つき（ぎゅゅって抱きしめたい!）。

こんな見た目なのに………男子、だと？

つーーー、つと、視線が下に行く。

「あ~~~~もうほらこれよ。わたしと会った人、みんなそうなるの。股間見て全てを知った気になるんだよ、宇宙猫みたいになるんだよ!!」

そう言いながら、彼は頬を赤らめ、目をキッと吊り上げて、内股になって、服の

裾を引っ張って、お股を隠してた。

「きゃわいいいいいいいいいいいい！！！！！！」

「うるせええええええええええええ！！！！！！！！」

そう、これは【旭日リエル】の御主人様《リスナー》は知らない事実。

旭日リエルは——バ美肉Vtuberである！！！！！！

！！

ただ中身の魂が、ボーチェン要らずのプリティボイスで仕草が完全に乙女でなんか髪めつつちゃ良い匂いするだけの——男の子である！！！！！！

「受肉の工程、要りますか？」

「それどういう意味!?!」

「だってそのままでもすごい美少女じゃないですかあ！」

「マシユマロ食べる?」

旭日リエルの大好物をご本人から貰って、私はもきゅもきゅ食べる。

先輩も両手でマシユマロをちょこんと持って、もきゅもきゅ食べる。

二人でマシユマロを無言で食べてたら……だんだんぼーっとしてきた。

「さてと。姫宮ちゃん、今日はありがとね。コラボ受けてくれて」

もきゅもきゅ………だ〜いすきなのは〜ひ〜まわりのマロ〜。

「わたし、ヘブンズライブの中じゃ一番後輩だったからさ。姫宮ちゃんみたいな可愛い子が後輩になってくれて本当嬉しかったっていうかさあ〜」

25こ〜はいるよネズ次郎〜。

「……ねえ聞いている?」

「ふっふーん………え?」

「聞いてないねえ?」

瞬間、私の血の気がサアッと引いた。アツまづいまづいまづい!

マシユマロで意識がぼわって飛んだ!

「あえ、あ、き! 聞いてましたよ!」

「嘘つけ！ なにご機嫌にとつとこしてんだよ！ 鼻歌ぜんぶ聞こえてんだよお!!」

「すすすみませ、へ!? じゃあ2番と3番まで聞かれ……」

「熱唱してんじゃん！ なにもうわたしだけベラベラ喋ってめっちゃ恥ずかしいわ！」

「あっ、いやその、まったく聞いてない訳じゃなく！ こ、こちらこそコラボのお誘いありがとうございます！」

「嘘つけ、とつとこ墮天使が!!」

「ほ、ほほ本心ですよおーooooooooo!!」
本心だった。

三波くんに住込まれた【リエ虐】の歴史では、旭日リエルのASMR配信（罰ゲーム）は50本以上。ヘブンズライブの中で一番の経験者だった。

だからすぐく頼もしくて———ということを言ったら。

「えー？ いやた、頼もしいって……そっ、そんなまたまた心にもないことを」

「本当ですよ！ 私、その……色々事情を割愛しますが、いつの間にかVtuberになって。初配信もクソね……キャスパーさんにも」

「あっ、あいつのこと『さん付け』しなくて良いよ。あの女の敵。わたしも被害者」
「あのク・ソ・猫(声でかボイス)とのコラボしか経験してなくて……そもそもVの世界のことも配信のことも分からなくて。そんなんだから実は『ASMRやる』って言ったのに全然ASMRのこと分からなくて……」

だから、嬉しかった。

『ASMRやるんだって? 僕、詳しいから色々教えてあげるよ!』
ボイスコードで先輩のメッセージが来た時。

初めて、ヘブンズライブのつながりを感じて。

「だから私、その……本当に……頼りにしてます。リエル先輩」

「……………ふうん」

天海先輩はそっぽを向いたまま、くるくると毛先に指を絡ませる。

「ふうん……ふうん……ふうん。そっか、ふうん……」

「? せ、先輩?」

「——じめ、だ」

? 先輩の口がもごもご動いてる。

よく聞こえなくて、耳を澄ます。

そしたら先輩は両手で目元を隠しながら、ぽそっと呟いた。

「頼られたの……はじめて」

しっとりした喜びに染まった眼差しが、私に向かう。

そうして先輩は「ふふん」と胸を張った。

「良いでしょう、存分にこの先輩に任せなさいな。ASMRも……女磨きも、ね」

「へ？」

「へ、じゃないわよ！ なにその恰好は！ 学生期間の制服マジックに頼りつき

りじゃ、ファッションセンス腐るわよ!？」

「せ、制服マジック!？ いや、その……家で一番高価でしつかりした服、制服《こ

れ》しかなくて……」

「服は高けりゃ良いってもんじゃないの！ 今度、ショッピング付いてってあげ

るわ！ 今よりもっと可愛くしてあげるから」

にっこりと吹かせた先輩風が、私の目を輝かせる。

女の子より女の子を心掛けてる先輩に、私の心はもう………つ。

「はいっ！ お世話になります、先輩！」

カクヨムコンテストに参加してます！

応援よろしくお願いします！

<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>

741950

ヴィアである。そしてえ〜今宵、宵月家に訪れたのは、この天使い〜」

「海の果てよりいらっしやいませ、ご主人様あ〜。こんリエ〜天使メイドの旭日リエルです」

青髪のお団子頭に天使の輪っか、白と水色を基調としたメイド服姿の少女――

――天使メイド【旭日リエル】が配信画面の上で清純な笑顔を浮かべた。

でもガワの可愛さも素敵だけど、私が一番びっくりしてるのは天海先輩の仕草だ。

――完全に女の子だ。

配信が始まった途端、ぴったりの清楚で可愛らしい少女となっていた。

同じ女の子だから分かる――めっちゃかわいい。

「……というわけでね、僕にとって初めての後輩だからうんと可愛がってあげたいんだ〜ねっ、レヴィアちゃん？」

「えっ……っ！ アッはいっ！ そうですな！ がんばります！」

どうしよ。先輩の可愛さに惚けて聞いてなかった……って!!

上の空だった私に「んー？」と首を傾げながらにじり寄る先輩。

「あれ〜レヴィアちゃん〜？　ちゃんと先輩の話聞いてたのかな〜？」
からかい口調＋怪訝なジト目が真下から迫ってきて、私は思わず唾を飲む。

「ち、近っ……近いです先輩……い」

「アハハッ、なんで照れてるの〜？　みなさ〜ん、レヴィアちゃんにそっぽ向かれちゃいました〜。これは嫌われてるのかな〜？」

「コメント」

・レヴィアたん、まともなVとコラボ初めてだから緊張してるのかな？

・良かったねレヴィア……優しそうな先輩で

・パパどっか行ってもろて

・え、キャスパーとコラボしたよね？

・あのクソ猫がまともなVだとでも？

「うあの!?　ち、ちがくて！　その……先輩がすっごく可愛くて……ぼ、ボウっとしちゃってまし、た——あっ今の失言！　失言ですすみません何言っただ私ごめんさ」

「えっ……何この後輩……むっっちゃ可愛い……！」

手を引かれて、ぼすんと顔が先輩の胸に納まる。

? ? ?

固っ、いや柔らかい?

あっ良い匂いあれ?

え?

何が起こったか分かんない。

でも頭の上から降ってくる先輩の黄色い声と胸の奥のトゥンクを理解した時――

私の頬が赤く染まりあがる!

「せ、せんば!! だめっ! 抱きしめっ、ダメ! は、離して!」

「えー? なんでー? 先輩後輩の仲じゃ〜ん。別に良いじゃ〜ん?」

「ああああ頭ポンポンしないでええええええええええ!」

しゅごい落ち着くううううう……っ!

そうして先輩の包容力に包まれていたら不意に、ふにっ唇に感触。

「こーらレヴィアちゃん。ASMRなんだから――おっきな声出しちゃだーめ」

そう耳元でささやきながら、リエル先輩の指が……私の唇に触れていた。

「コメント」

- ・ 天使の抱擁！（おい墮天使代われ）
 - ・ 間に挟まる空気になりたい
 - ・ パパ嬉しい！ 先輩と仲良くなってて……
 - ・ だからパパどっか行ってもろて
 - ・ パパを名乗る眷属、根強い
 - ・ レヴィアさんの頭ポンポン良いですねえ
 - ・ さわさわ……
 - ・ さわさわ……
 - ・ 【キャスパー】レヴィアさんの髪撫でてるのかぁ……食べていいですか？
 - ・ さわさわ……
 - ・ なんかいるぞ！
 - ・ 変態猫だぁ！ 囲め囲め！ 通報しろ！
- 「あ……っ！ そうですよ、ASMRですもんね。ごめんなさい」

「あ〜しよんぼりしてるレヴィアちゃんもかわいい〜。気にしないで、先輩が教えてあげる。ほら、手、握って」

「え？ え？ な…：…なんでですか？」

「レヴィアちゃんの手…：…八つ橋みたいだね（イケボ）」

「? ? ? ? ?」

「はいっ、ぎゅーーーー」

ふやあああああああ!

先輩の勢いに押されて、手を握られる。先輩と私の指がしっかりと組み合わさる。ぴったりと重なり合う手の平の感触に、私の心臓がパクパク鳴り始めた。

「コメント」

・ 八つ橋???

・ 奴は死

・ だれ!?

・ キャスパーだ

・ この猫でなしい!

- ・キャスパー…なんでえ???
- ・自害せよ、キャ○ター
- ・宗○郎様あ???
- ・とばっちりで鬱展開産むな!!!

カクヨムコンテストに参加しています！

応援よろしくお願いします！

<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>

741950

第17話 ASMR配信しゅうりょお♡（みんなの鼓膜……破こっか??）

「さてさてコメント欄はどう……なにこの暴走。ほったらかしにしてたリスナーさんごめんねえ。ごめんねごめんねごめんね」

「あっ！　いう！　ひいん！」

「ははっ！　なんでレヴィアちゃんビクビクしてんの」

「そ、それ、は」

「はい、ふう~~~~」

「んいいいいっ!!」

耳に吹きかけられたぞくぞくが、首筋から肩まで行き渡る。

継るように、繋いでいたりエル先輩の手をぎゅうううっと握りしめる。

「うわっ、うわうわ、すごい手握ってるね〜。手と肩すごい震えてる、かわいい〜」

ハッハッと浅く息を吐く。チカチカ瞬く視界がじんわり熱く濡れる。

「レヴィアちゃんって耳……」

イヤホン越しなのに……っ！　なんで……っ!?

耳打ちされてるみたいなのに、リエル先輩の声がっ、吐息がっ、近づく。

「びん・か・ん」

「ひゃめ、あっ、やっ、あっ」

ささやきに、耳、の中っ、こしょこしょされ、て

「な・ん・だ・ねえ……」

「……っ！」

あったかい!?　声っ、ぬくもりが！　イヤホンなのに、とどいて……っ！

「……かわあいいね♡」

ちゅっ、と響いた唇の音が、とろとろの脳に届いて、爆ぜた。

——モウイイヤ。

「レヴィアちゃんもやってみ……」

一緒にあったKU100ごと、私は先輩を押し倒す。

私の下に来た先輩が、目をぱちくりさせる

「へ？ ちょっと、あれ?? レヴィアちゃん？」

「せんぱい……きよとんとして……かわいい♡」

「あつ、そ、そのささやきは100点ねレヴィアちゃん。あの……でも、どいてくれるとたすか」

「せんぱい……♡ 聞こえますか？ 私の胸の音、とくとくとくって」

私と先輩に挟まれてるKU100に、私は胸元を押し付ける。

私の鼓動が、想いが、先輩の耳に入ってる……っ！

「コメント」

・おほー！

・レヴィアさんの心音サイコーですぞお

・でもその前凄い音したな？ なんだらう？

・【キヤスパー】いいぞお！ そのまま！ そのまま押し倒せえ！

・なーに言ってんだこのクソ猫

・ 抱けえっ!!

・ 抱けっ!! 抱けーっ!!

・ 抱けええええええええええええええええ!!

・ くそっ、じれってーな。俺ちよっとやらしい雰囲気にし

・ もうなってるから帰れ!

・ 後輩に圧されるなよ、先輩天使WWW

・ おっぱじめやがった!

・ 飛んじまうぞ!?

・ 配信3回目でBANの危機

・ 自分のチャンネルだからって滅茶苦茶しやがる!?

・ おい止めろお!! あの墮天使止めろお!!

・ レヴィアたんがあ生きてりゅ!

・ リエルンもお生きてりゅ!

・ 推しが現実中存在する……ありがたい……

・ 心音たすかるう!

・戻れ！ パーパ！

・このコメ欄の名が！ パパ髭だああああ!!

・総員退避 イイイイイイイイイイイイイイ！

・音量下げろオオオオオオオオオオオオ！

コメント欄が戦場と化す。

その阿鼻叫喚を見て……私は一度だけ、慈悲を示した。

「ねえゲス猫お、今すぐブラウザバックしないと——ころすよ」

「コメント」

・失せろクソ猫お!!

・コメ欄から消え去れええええ!!

・【キヤスパー】ヒイン(´・ω・｀)

・ころすよ頂きましたあ！

・ぶひい！ 屠殺してください！

・ありがとうございますありますがどうございますありがとうございます！

一部感謝のコメントが流れる中、私の下にいた先輩は

「目が……ガチ……」
恐怖に震えていた。

カクヨムコンテストに参加しています！

応援よろしくお願いします！

<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>
741950

第18話 精神世界で先輩Vと会いました（えまって精神世界とかある世界観なの？）

「ねえ姫宮さん！ 俺悔しいよ！」

レヴィアさんに俺の初めて捧げられると思ってたのに……どうしてギルティローア断罪咆哮してくれなかったんだレヴィアたあああああんあん!!」

「鼓膜破いてもらいたい人なんて少数だからだよお!!」

後日。

いつものお昼休み、いつもの校舎裏で、三波くんの悲嘆に暮れた声が響き渡った。ほんとどうしようもないなと思った。

「やっぱ理解できないよ……鼓膜は処女膜じゃないよ……それに三波くんの鼓膜を破ることで数百人の鼓膜が犠牲になるんだよ？ それはギルティだよ」

「ぐううううぐうの音も出ないいいっ！ そうだよね、俺の欲望で同志の鼓膜を犠牲にする訳にはいかないよね。さすがレヴィアさん！ 優しい好き！」

「うんうん、分かってもらって良かった」

ああ、『好き』なんて言葉じゃぜんぜん動揺しなくなっちゃってるなあ……（遠い目）。

初めて三波くんと話した日がずいぶん昔に思えた。

この間もずっと三波くんの推し語りを聞き流してたけど、不意に彼が腕を組んでがっくりと首を落とした。

「どうしたの？」

「いやね？ 実は昨日の配信さ。訳あって途中でコメント欄から追い出されて……リアタイ最後まで追えなかったんだあ」

「そうだったんだ……残念だったねえ」

「そうなんだよお、貴重な発情レヴィアたんを聞き逃すなんて……っ！ どころか、リエルんとレヴィアたんの心音サンドイッチも最後まで聞いてないんだよお!! だから姫宮さん！ 今から二人で一緒に、天使と墮天使のパイに包まれないか？」

「キリッとしてるところ申し訳ないんだけど、誘い文句もうちょっと考えなよ」

私はジトツとした目でそう言ってから、ぷいっとそっぽを向いた。

「ああああああ！ そんなぁ！ そんなこと言わずに聞いておくれよだって素晴らしいんだよレヴィアさんのASMR！ほんと才能あるんだよ！ぜひVオタ初心者の姫宮さんにも体感してほしいんだよおおおおお!!」

その後、三波くんは涙ながらに宵月レヴィアのASMRの上手さを語り続けた。

私はそっぽを向いたまま………ずっとそれに耳を傾けていた。

『起きなさい、我が娘……起きるのです、レヴィアちゃん』

「——ふや？」

落ち着いた声に揺り起こされて初めて、私は寝ていたことに気付いた。

あれ……学校、終わって……家に帰ろうと……うーうーまだ頭の中ぽやぽやする。

『あらあら、まだお眠なの？……少し盛り過ぎたかしら』

大人びた声を『ふふふ』と震わせて、神秘的な幼女が年相応の幼い笑顔を見せた。

白金色のおかっぱ頭に、ウサギさんみたいな丸くて紅い瞳の幼女が、宙をふわふわ浮いていた。

「なんだか服装も相まって、星の王女さまって感じだった。

「ど、どなたですか？」

『ステラは【星の妖精】よ☆ アニメで語尾がうざい小動物いるでしょ？ あれよ』

「こ、ここは一体……」

辺りを見回すと、私は星空の中にいた。

真っ黒な空間に散りばめられた星の光がラメみたいに安っぽく輝く。

『ここは精神世界。頭の中と言っても良いわ。気を失う前に、ステラの切り抜き見ただから影響受けちゃったんでしょね。ふふふっ、単純で可愛い♡』

切り……抜き？

ていうか……あれ……うん、やっぱりそうだ。

「ステラ先輩、ですか？」

【明星ステラ】。

絵師系Vtuberにして、ヘブンズライブに所属するVtuberのガワを手

掛けたヘブンズライブのママ。

それがなんで……私の目の前に!?

カクヨムコンテストに参加してます！

応援よろしくお願いします！

7
4
1
9
5
0
<http://kakuyomu.jp/works/16816927859130>

第19話 お絵描きオフコラボ開始い！（拉致から始まる絵師V オフコラボ!?）

【明星ステラ】

絵師系V t u b e rにして、へブンズライブに所属するV t u b e rのガワを手掛けたへブンズライブのママ。

それがなんで……私の目の前に!?

『戸惑うのも無理はないわ……二次元のキャラが目の前にいるんだもの……。でも聞いて妖精の世界がピンチなのよ、あなたの助けが必要なのよ……。』

これって……っ！

瞬間、脳裏に駆け巡る、日曜の朝を楽しみにしていた幼少の記憶！

でも……っ、私は苦虫を噛み潰したように顔を背ける。

「だ、だめですステラさん！

世界の危機如きでそんな簡単に助けを求めちゃいけないですよ!?

弱みを見せたらだめなんですよ！

でないとすぐエッチなバイト紹介されるんですよ！

ずっと仲良くしてた親戚からも縁切られるんですよ！」

『言葉に宿った実感がすごいい!! え、魔法少女スカウトをそんな理由で断るの

? 世界の危機なのよ? けっこうヤバいのよ?』

「そんなの現実、どうでもいいんですよお!! 皆、目の前の自分の危機で手いっ

ぱいなんですよ! 世界の危機如きで人は動かないんですよお!」

『生々しい! すっごい生々しいわレヴィアちゃん!』

うううううう……っ!

魔法……少女お……かわいい……ドレスうう(っω、)

メテオで家が潰れてから味わった辛酸が、あの頃のワクワクドキドキを否定した。

『まあ、嘘なんだけども』

「嘘なの!？」

『めっちゃショック受けるじゃないレヴィアちゃん。さては貴女ワクワクキしてたな?』

「そっ……そんなこと、ないもおん」

『まあ、何はともあれ。困ってるのは本当なのよ。』

ステラ、最近良い絵が描けなくて……そのためにレヴィアちゃんに手伝ってもらいたいなのよ。本当、情けないことだけど』

あっ、と私は息を呑む。

遠い星空の彼方を見やるステラ先輩の横顔は……幼女の見ただ目からは程遠い憂いに満ちていた。

その顔を見ていたら、なんだか……なんとかかしたいと思ってしまう。

だって私も、辛くなったその時——誰かに助けてもらいたかったから。

「わ、私で良ければ……お、お手伝い、します」

『ほんと？ ありがとう！ じゃあお腹吸わせて？』

え？

と言う間もなく、幼女が私のお腹に顔を埋めた。

途端、吐息とかその他諸々で生暖かくなるお腹。

『はあああああああああああああああああああああああああんお腹柔らかい

「あびゃあびゃ言いながらよだれ垂らさないでくださいよお!! !! うううう……」
私の気持ち返せえ……っ!」

『さて、時間も来たところだし、そろそろ現実《リアル》起床しておきなさい』

「時間!? 何の時間ですかもう!」

キツと睨み上げたら、意味深に細められた眼差しとぶつかる。

『そんなの————拉致《オフ》コラボの時間に決まってるじゃない』

ぐにやり、と視界が歪んだ。

幼女も、星空も遠ざかっていく。

そして目を開けたら………

「コメントの皆さん、こんステラ〜。

明星ステラのお絵描き配信、始めて行くわよ〜」

すぐ隣から、ステラ先輩の声が聞こえた。

配信画面を映したPCには、既に星の妖精と墮天使のライブ2Dが映っていた。

PCの明かりが見覚えのない部屋………沢山のイラストで埋め尽くされた部屋

カクヨムコンテストに参加してます！

応援よろしくお願いします！

7
4
1
9
5
0
h
t
t
p
s
:
//
k
a
k
u
y
o
m
u
.
j
p
/
w
o
r
k
s
/
1
6
8
1
6
9
2
7
8
5
9
1
3
0

第20話 ママぁ!ママとお絵描きするう!
襲われていた件について)
(起きたら既に

「コメント」

- ・長い
- ・長いなあ
- ・ミユートしてから長いなあ
- ・どうしたんだろうなあレヴィアちゃん
- ・なんか叫んでたねえ
- ・事件性のある悲鳴だったねえ
- ・どうしたんだろうねえ
- ・まあお決まりだけどねえ
- ・アトリエに呼ばれたVはだいたい叫ぶからねえ
- ・ステラのお絵描きオフコラボだから……

コメント（ステラ先輩のリスナー）の皆さん、落ち着き過ぎじゃないですか？
眷属達のコメント欄との違いに目を取られていたら——バアンと耳元で壁下の音が爆ぜた。

「ぴい!？」

「あゝあゝ、ったあつく、こんのべらぼうめ」

濁っててドスの利いた声が、私の頭上から降ってくる。

PCをミュートする前の、ステラ先輩のロリロリしい声と全然違う……っ！

ビクビクと萎縮してたら、半端に閉められたファスナーで余計サイズを強調された丸見えの谷間がゆさりと視界に急接近する！

「なあ、なんだってんだ？　なんだって帰ろうとする？　せえつかくオレが娘の

エロ……美麗イラストを供給してやるってのに、手伝いもせずにトンスラたあなあ
？」

「エロって言ったあ！　今エロって言ったあ！　あとさつき私のことデッサン人
形って言いかけたあ!!」

ただでさえ、帰り道に甘い何かで気絶させられて、部屋に連れ込まれてるんだ。

これで逃げない女子高生はいるだろうか!? いやない!

視界の下半分を埋め尽くす谷間に負けず、私はキッと気を強く保つ。

すると裸パーカーのお姉さんは「かかっ」と笑って私を見下ろす。

「だいじょおぶだいじょおぶ、ヘブンズライブのお約束だから。リエルもクレアも皆この企画やったから。オレの娘なら必ず通る道だから」

「そ……そうなんですか……?」

V t u b e rの文化でガワを描いてくれたイラストレーターさんは『ママ』と呼ぶ。

イラストレーター【明星ステラ】……いや、『星辻綾香』は私の股下に膝を潜らせて、私との距離を更に詰めてわぷっ。

「んまあ、クレア……来栖はノリノリでポーズ取ってやがったけどねえ。オレも筆が乗ったもんさ。リエル……天海の野郎はなあ。表情がイイんだよなあ……あいつのおぼこな羞恥顔は見てて昂ったよお。よっぽどオレがぶち込みたいくらいだったね」

「ふひいこむっ(ぶち込む)!?」

ていうか柔らかくて隙間が！ い、息が！ すっと一歩引きさがる双丘。

解ッ放ッ感！ 私はすうっと思いきり息を吸った。

「という訳だ。いっちょ付き合ってくれや」

星辻先輩は手で軽く拝んでるけど………ああ、だめだ。

私の目、今きつと三波くんを見てる時の目になってる（もしくはキャスパー）。でも………ちらっと星辻先輩のPCを見る。

既に始まつてる配信画面。

今もおつとりと私と先輩の戻りを待ってくれてるコメント欄。

さっきは思わず逃げようとしちゃったけど……もう配信は始まつちゃっている。恥ずかしいけど、拉致られたけど、もう楽しみにしてくれてる人達が……いる。

「~~~~っ！ わ、分かりましたよ。やりますよお！ やればイイんでしょお!？」
「ようし、そうとくりゃ話はあ早え」

星辻先輩は小気味よく手を叩くや否やドカッとその場で座り込んだ……んう？

首を傾げる私を見上げて、星辻先輩は初めて【幼児《ステラ》】っぽく両手を広げた。

「腹肉吸わせてえ♡」

「ふじゃっつっつけんなああああああああああああああああ!……!……!」

なんでだよお!! 　　なんで私のお腹をそんな求めるんだよお!!

お腹はおっぱいじゃないんだぞお!? 　　???

「オレダメなんだよ。お腹吸わないと母性が目覚めないんだよ。声のチューニングもできないし明星ステラになりきれないんだよお。なあ? 　　良いだろおう?」

「ふじゃっけん! 　　ふじゃっけん! 　　夢の中でも吸ってこっちでも吸って」

「え? 　　夢のな……あっ」

——なあに? 　　その反応?

嫌な予感がした。

私はスカートの中にしまったブラウスの裾を出して……めくった。
そこには既に着けられた、キスマークで。

「もう真っ赤なおおおお!! 　　!! 　　!! 　　!!」

「いただきまぢゅうううううううう!!……!」

「んうわあああ——————!! 　　!?! 　　!?!」

カクヨムコンテストに参加しています！

応援よろしくお願いします！

<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>

741950

第 21 話 お絵描き配信再開!モデルは妾!? (あの、M 字開

脚って……なんですか?)

「お待たせ、ねえみんな聞いてえ? さっきレヴィアちゃんのお腹ちゅうちゅうさせてもらったのお! お肌まっしろでふにふにで奥の方しっかり筋肉あって美味しかったあ〜〜! あーでも脇腹の方が少しプニってた〜〜♡」

「やめてよおーおーおー!!! ちよっと気にしてたのにい!! ばがあ! マのバカあああ〜〜〜」

「コメント」

- ・ほんとにお腹好きねえ
- ・ちゅうちゅうできてよかったねえ
- ・お腹の肉事情を暴露されたぞおおお!
- ・薄い本が厚くなるぞおおお!!
- ・復唱せよ! レヴィアさんの脇腹はぷにってる!

私は膝立ちになって、スカートからはみ出たブラウスの裾を自分からめくった。ぬくぬく温まってたお腹が冷え込んだ外気にさらされて、寒くて震える。

「これで……いいの？」

「ツアーーーーー!!!」 良いいいい!! その涙に潤んだ上目遣い良い

よおう!! 止まってえ!? 貴女も時も止まってえ!?

【コメント】

- ・ 凄まじい勢いで描き込まれていく!?
- ・ ラフ画なのにもうお腹のぷに肉感が伝わってくるう!?
- ・ 天才じゃったか
- ・ つーかこれ実質スカートたくし上げ
- ・ エチチチツフワア
- ・ エチチ昇天していくう!
- ・ テンション高いねえ今日のステラ様
- ・ よっぽど良いデッサン人ぎよ……モデルなんだねえ
- ・ ふむ、泣き顔羞恥とは……堕天使やるねえ

・吸われた!? (ガタツ)

・お腹を!? (又ギツ)

・ごめん腹は分かんねえわ

・キャスパー…おまいら猫の腹吸うやん。それをレヴィアたんのぼんぼんでやるんやで? 勃つだろ? あ?

・猫の圧力がすごおい

・お腹をぼんぼんと呼ぶところにこだわりを感じる

・つまり墮天使はキスマークで真っ赤なぼんぼんを、涙目恥じらいでたくし上

げ……

・やめて眷属のエチチ耐久度はもう 0 よ!

「乗ってるのってるう!! コメも筆も乗りに乗ってるう!! ようしこの勢いな

ら M 字開脚いやさ、V 字・Y 字開脚もしてもらおうかい!」

………うん?

ブラウスの裾をつまみ上げたまま、私は首を傾げる。

「どしたあ!? ママの言うこと聞けねえってのかアァン!」

「あっ、いや、そうじゃなくて」

首を傾げた理由は、ステラ先輩の変貌っぷりに呆れたとか、もうこの場には変態しかないとか、そんな分かり切ったことじゃなくて。

ただ単純に——指示の意味を上手く理解できなかっただけだった。

「あの、M字開脚？　ってなんですか？　わた、妾よく分かんなくて……え？」

静寂が……訪れた。

絵描きの筆は止まり、コメント欄は三点リーダー（…）の洪水状態が——続いたのだった。

カクヨムコンテストに参加しています！

応援よろしくお願ひします！

7
4 h
1 t
9 t
5 p
0 s
://
k
a
k
u
y
o
m
u
:
jp
/
w
o
r
k
s
/
1
6
8
1
6
9
2
7
8
5
9
1
3
0

第22話 墮天使、ジャック〇ーチャレンジに挑戦だよ! (ママ、10分キープは無茶です)

「え、え……え?」

地獄みたいな静寂に、どうしてか罪悪感で心がちくちくし始める。

え、なに? なんなのこの空気!?

へっ、私……なにかいけないこと言っちゃった!?

冷や汗が始める。なんだろう、この冷や汗に比べたら、さっきの状況の方が何万倍もマシだって思っちゃおう!

「——レヴィアちゃん」

「っ! ステラ先輩!? あのっ、ごめんなさっ! 私なにかやっちゃいましたか!?!」

「いや……違うよ……違うんだ。間違っていたのは——俺達だった」

PC上の【明星ステラ】が瞳孔ガンギマリ状態から目蓋を閉じた清らかな表情に

切り替わる。

時を同じくして、星辻先輩が私に慈愛に満ちた抱擁をしてくる。

「ありがとう……っ！ 無知《きれい》なままでいてくれて……!! ありがとう!!」

「ひうええええ？ な、なんで……？」

耳元で感謝を告げられても、そのっ、何が何だか分からないし……ただくすぐったくてドキドキするだけなんですけれども。

ていうか、あっ、あのっ、星辻先輩が抱きしめてるせいでその……アタツテル。

「貴女は雪原《おとめ》。何の足跡《フェチ》もない、汚されていない純白の雪景色！」

お~~~~おつきいいいい!!

「危うく欲望のままに踏み荒らすところだった！ 足跡《フェチ》は！ 自ら踏みしめて刻んでいくべきものなの！」

や~~~~わらかあ~~~~い!!

「レヴィアちゃん聞ってる？」

「え? あ」

「聞いたらんかったねえ。まあいいわ——良い? レヴィア」

その時、細めた星辻先輩の眼差しは……すぐく母性《バブ味》に溢れていた。

これが……ステラママ。宵月レヴィアを産み出した、イラストレーター!

「もうエチチイラストは描きません。」

本当はぶっ○けとか手○キとかフランクフルトの影を顔にかざす構図とか描くつもりだったけれど……貴女の純白に免じて、辞めます」

「そっ、そんな……な?」

「コメント」

・俺達は何を見せられてるんだろう……?

・なんて綺麗な声なんだろう

・ラインナップえっぐWWW

・レヴィアたん、分かんないなら分かんないって言いな?

・キャスパー…そんなこと言わずに描いてよステラママあああああ!!
貴女が

描かなければ生まれなかったものがここにある!!

・クソ猫の断末魔 W W W

「ただ、一枚だけ。一枚だけ描きたいポーズがあるの。それが終わったら後はもう雑談。ママといっぱいお話しよ」

パアツと私の胸の中が晴れやかになる。

もう、エッチなポーズをしなくて良い!

でも顔を輝かせた私に、星辻先輩^{ママ}の目がスツと細くなる。

「でもこのポーズはすごく難しいの。普段使わない筋肉を使うからとっても辛い。

……それでもやってくれる?」

今日で一番真面目な星辻先輩^{ママ}の問いかけに……私は力強くうなづく。

「はい……っ! がんばります——お母さん」

「っ! レヴィア……」

涙ぐむ星辻先輩。

けれどそれは一瞬で、涙を拭いた後に見せた表情は——母親のそれではなくプロの絵師のそれ!

「あっ、ちょっとレヴィアちゃん動かないでくれる？
ほら10分キープ10分キープ」

カクヨムコンテストに参加しています！

応援よろしく願います！

<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>
741950

第23話 太ってる魂は……きらい? (眷属のみんな……ごめんなさいい)

「姫宮さあ〜ん!

昨夜、ステラ様がピクシブに上げた【レヴィアたん疑似スカートたくし上げ】と【ジャック・〇ー・チャレンジ墮天使(股間アングル)】のエチチイラスト見ようぜえ〜〜〜?」

「氏ねええええええええええ!! !! !!」

「あふうんっ!! !?」

後日、いつものお昼休み、いつもの校舎裏で、私はついに三波くんの脇を挟んだ。伽夜ちゃんを泣かす時のように、どれだけ体をくねらせても逃げられない態勢で、私は脇を挟りくすぐる!!

「女子にい! エッチなイラストをお! 笑顔でえ! 見せないでよもおおお

お!! !!」

おおおーっ！！！！

そもそもステラ先輩もなんであんなにそっくりに描くの!? もうちょっと脚色

してくれても罰当たらないよ!? （主に足の太さ）

「もお……やだあ」

恥ずかし過ぎて手の平で顔を覆う。

キュツと内股になって、今更遅いけど身を小さくする。

ごめんなさい皆様、ぶよ肉で限りある世界の面積を占領してしまつて本当にごめんなさいい……っ！

もう何回目かも分からない後悔を、手の平の内ではぼそつとつぶやく。

「こんなことになるなら……もつとおやつ減らせれば良かったあ」

「ん？ なに姫宮さん、ダイエツトでもすんの？」

——聞こえてるんか……い。

ちよつと目を離れた瞬間に地べたから私の隣に移動していた三波くん。

瞬間移動かな!? 私慌てて取り繕う。

「いやっ、ちがうよ!? 決してレヴィアたんのお腹がぶにっけるからって、私も

気を付けようと思ったとかそんなんじゃないかね!？」

「え？　なんで？　気にする必要はない？」

「おっ、仰る通りです！」

ああああああ何言ってるの私ィ！

確かに気にする必要ないじゃん、宵月レヴィアがぶってようが、姫宮紗夜の腹には何も関係してない訳で……え？　でも私は宵月レヴィアだよ？　墮天使のぷよ肉は私の腹肉であれあれはれ？　あ頭こんがらがってきた。

「姫宮さん？　目が回ってるよ姫宮さん。そうなる人初めて見たよ姫宮さん」

「そそそうだよね!!　　太い娘は嫌いだよね!!　　ごめんなさい今度こそ我慢するから」

「いや俺が言ったのはそういう意味じゃなくて」

目を丸め、首を傾げて、当然のことを話すように。

「お腹がぷよってようが、レヴィアさんは推す。これは、確定事項だ」

三波くんはさらりと言ったのけた。

私はその表情に、言葉に、息を呑んだ。

「な、なんで？　だ、だって」

「そんなん宵月レヴィアだからに決まってんじゃない。それよりここ聞いてよ！

クレア様に寄せ乳レクチャーされて、レヴィアたんめっちゃ困惑しててさあ！」

「う……うん」

真っ白になった頭を、こくんと縦に振る。

またいつもの、三波くんの推し語りが始まった。

私は呆然と、それに耳を傾けていた。

「ていうかレヴィアたん、もうちょい太ってくれないかな。

そしたら限りある世界の面積の中で宵月レヴィアの質量が増加する。そうすれば

眷属達の幸福度指数が増加し……」

速攻で後悔した。もっかい痙攣させた。

カクコムコンテストに参加します！

応援よろしくお願いします！

741950
<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>

第24話 オフの日デート、緊張します（相手は……だれだと思いませんか？）

姿見の前で、くるりと回ってみせた。

ふわっと浮かび上がる赤チェックのミニスカート。

ちらりと見えちゃうダメーjistトッキング。

そして右肩だけ露出した、黒の長袖Tシャツ……。

「伽夜ちゃん……本当にこれで大丈夫かなあ？へ、変じゃないかなあ？」

「ん〜良いんじゃない？ 厨二心忘れてない乙女みたいな感じで」

「それは遠回しに言って言っていない!？」

ステイック野菜をぽりぽり食べながら「だいじょぶだいじょぶ」と棒読みする妹。
こ、この妹め……っ！ 姉がオシャレに真剣に悩んでるってのに……。

私の恨みがましい視線に気づいたのか、伽夜ちゃんは問うた。

「何がそんなに不安なの？ 普通に可愛いと思うよ？」

「~~~~っ、それが問題なの」

このコーデはリエル先輩に選んでもらったものだ。

夜中にビスコードで通話しながらネットショッピングで買ったコーデ。

可愛くない筈が無い。

ただ……。

「自分とその服が釣り合わないとも思ってるの？」

呆れ気味の伽夜ちゃんの言葉に私はゆっくりと頷いた。

すると伽夜ちゃんは腰に手を当てて、これ見よがしにため息をついた。

うぐぐ……中々辛いなあ、妹のため息。

「お姉ちゃんさ、先輩に勧められたから無理に着てる訳じゃないんだよね？」

「そ！ それは違うよ！ 私、ちゃんと」

「なら大丈夫」

私の声を遮って、伽夜ちゃんが私の手を取る。

姉の手を包みながら、妹はまっすぐにはにかんだ。

「お姉ちゃんは可愛いよ。自信持って」

「——伽夜ちゃん」

「デート、楽しんできてね」

「……うん」

私は妹のおでこに自分のおでこをくつつける。口に出すには気恥ずかしい言葉を伝えるために。

学校もバイトもない休日なんて、何年ぶりだろう。

電車の揺れにもたれながら、隣町の駅へ向かう。

改札をくぐると、少しだけざわざわしてる人だかりを見つけたから、小走りで手を振った。

「お待たせしてすみません！——クレア先輩！」

「こゝろら、姫宮さん。そっちの名前で呼んじゃダメでしょ？」

人だかりができる程の美形を少しだけしかめっ面に変えて、ヘブンズライブの歌い手V——【鳴神クレア】先輩が私を嗜めた。

そ、そうだった。バカだ私……。

「ご、ごめんなさい。来栖先輩」

「……ふふふつ、そんなシユンとしないで。『奏先輩』で良いわよ。久しぶりねえ、オーデイション以来？」

「はいっ！　そうですー！」

『来栖奏』先輩はオーデイションの時、私が看護師さんだと勘違いしていた人だ。白いワンピースと黒のカーディガンにハイヒール。

そんなシンプルなコーデなのに……ちよっと一度見たら忘れられないくらい綺麗。

たまらず「ほわぁ」とため息が出る。

それに相まって、オフ特有の緩さが妙に私の胸をドキドキさせた。

「まさか予防接種と勘違いしてたとはねえ。わたしが女医って……アハハッ」
「そ、そのお話は、その、触れないでほしいです……っ」

どうかしてた、あの時は本当にどうかしてた！

でもしょうがないんですよ！　だって、家計のピンチだったし……恥ずかしくて俯いていたら、

「え〜〜駄目なお？」

奏先輩がニヤニヤした顔で、私の顔を覗き込んできた。

先輩のプラチナブロンドの髪が、目の前に垂れる。

「みっ、見ないで……ほしいです」

「え〜〜？ 我が儘な後輩だなあ……じゃあ何なら見ていいの？」

——い、言って、良いのかな？

奏先輩の袖をおそろおそろつまんで、少しだけ顔を上げて、言ってみる。

「ふ、服……リエ、あ、天海先輩に……相談して、その」

鼓動が激し過ぎて、顔が熱くなっていく。

耳の奥、ばくんばくんうるさい。

それでも……っ！

ぐっと溜めてから、口を開いた。

「——へ、変じゃ……ないですか？」

震える声を喉から絞り出した。

「(*、D(ε)ハハハ あぁん……すこ。すこすこのすこお (*、D(ε)ハハハ」

うん？

思わず瞬きする。

なんか今、奏先輩から変態《キャスパー》の波動を感じたような……。

「あの、奏先輩。今なんて」

「可愛い服ねって言ったのよ。もお〜そのぼんやりした感じ、オーデイションの頃から大好き」

先輩は口元を隠したまま、にっこりと微笑んだ。

き、気のせいかな？

奏先輩は袖をつまんだ私の手を取って、駅前のショッピングモールへ歩き始めた。「我が儘な後輩は可愛がりたい性分なの。おいで、姫宮さん」

ヒールの音をかつこよく鳴らして、颯爽とエスコートする奏先輩。

——やっぱり、すごいなあ。

尊敬に胸を膨らませてから、密かにホッと撫で下ろす。

可愛い……だって。

キュッと、少しだけ先輩の手を強く握った。

カクヨムコンテストに参加しています！

応援よろしくお願いします！

https://kakyomu.jp/works/16816927859130

741950

第25話 先輩Vとお泊り歌コラボ! (エレキ○リカルな歌声らしいですよ)

「ふぁーはっはっは! 待たせたな眷属達! さあ、邂逅を告げし関の声を上げようぞ! こんレビい!」

「きゃー! 初配信以来の高笑いかわわ~~~~~!!」

「せ、先輩先輩、挨拶を! 挨拶をお願いします!」

「あっそうね。いやあしっかり者だわあ……という訳でこんクレアあ♡」

雷鳴の如く轟く歌姫V♡ 雷神【鳴神クレア】でーす♡ 今日のはあ、かわいいかわいい後輩ちゃんのお家で歌声轟かせていくぞお♡」

「コメント」

・キッツ

・きつつ

・近所迷惑なので辞めてもらえませんか?

・こんな目になった娘、見たくなかった

・だからパパ帰ってもろて

・いやレヴィアたん、先輩一人喰ったけどね？

(*) 口を拭いてたから

ね？

・リエルはしょうがない。クソ雑魚だもの。

・リエルんは犠牲になったのだ……犠牲の犠牲にな

「こらこらこら殺すな殺すな、リエル生きてっから。今日だってレヴィアちゃん、リエルが選んだ服でおしゃれしてきたんだから。ね〜レヴィアちゃんっ♡」

「くっクレアせんぱっ!! んなっ、ななにを言っつて」

「聞いてよ眷属さん達い〜。今日のお昼ね？ あたし達、駅前で待ち合わせしたんだけどね？ レヴィアちゃんってばあたしの袖をつまんでね？ こう、上目遣いで……」

アッアッアッアッ！ や、やめ……っ。

止めるのも間に合わず、クレア先輩はうきうきで私の声真似を始めた。

「ふ、服……リエ、あ、天海先輩に……相談して、その。すう——へ、変じゃ……」

ないですか？　って！　言ったんだよお~~~~~!!　!!」

「コメント」

・かっつっつっつっつっつわ

・おほーたまらん

・初々しいですぞオ

・そのポジション代われください雷神BB A様

「い・い・で・しょお〜？　おらっ、羨ましいと言わんかい眷属共お!!」

「なんっ、なっ！　なんで言っちゃうんですかぁあー！！　思い出！　二

人だけの！　もお先輩のバカアアアア!!」

「いたた♡　いたたい♡　レヴィアちゃ、やめっ、ハァン、ぽかぽか幸せ」

「コメント」

・先輩後輩でえてえー！！

・レヴィアちゃんの反応すこすこのすこ

・二人だけの思い出……やだこの墮天使、ピュア

・キャスパー…僕のだぞっ!! ぼかぼかは! 僕のだあん!!

・淫猫が撲殺を希望のようです

「気持ち悪い野良猫が迷い込んできたねえ、レヴィアちゃん」

「アハハ! —— ぼかぼかで済むとでも?」

私は笑顔のまま、バキンと骨を鳴らした。

「コメント」

・音エツツゲ!

・ぼかぼかっ! 殴り殺しちゃう、ぞ!

・撲殺墮天使レヴィアちゃん

・キャスパー…ぶひひいいん!! 天上の恵み(拳)ありがとうございますニャ

アン!

・猫か豚かはつきりさせてくださいます?

「はい! じゃあそろそろ歌っていかうかしらあん!? 歌っちゃっちゃっちゃっ

いましょうかあー!!!?」

「け、眷属達よ! 今宵は主らが太鼓持ち(クレア先輩のリスナー)であるから

な！ 妾と共に！ 大いに盛り上げるのだあ~~~~!!」

背後でずつとスタンバってた伽夜ちゃんが、百均のんでん太鼓を鳴らす。

クレア先輩のマイミニ太鼓をお借りして、私もとことこ叩いた。コメント欄では太鼓のスタンブが高速で流れ始めた。

「じゃあ〜いくわよお！ 最初の曲はやっぱりコレ！ だって雷神だもん！ 歌
います！ ——エレ○トリカルコミュニケーション!!」

「コメント」

・ おいおいおいおい！

・ 品性の無い雷神だよ

・ ぶんぶんぶんぶんぶんぶん

・ ぶんぶんぶんぶんぶんぶん

「？ 何を振り回してるの？ 眷属？」

「おっい、ざっけんじゃねーぞレヴィアちゃんに余計なもん見せんなあ!! つー
かロツ○マンきゅんクソかっこいいかなあ!？」

カクヨムコンテストに参加しています!

応援よろしくお願ひします!

7
4
1
9
5
0
<https://kakyomu.jp/works/16816927859130>

第26話 お泊り振り返り配信……♡（先輩、どうして謝罪配信してるんですか？ えなにしました？）

「——と、いう訳でな？ 妾にとってクレア先輩は、その……頼りがいのある……お、お姉ちゃんって言うか……そんな、存在……んぬうにゃあああああ~~~~~！！！！！！」

「コメント」

・照れ声カワイイ

・え、その雷神どなた？

・あのお泊り歌枠の後、そんなことがあったとは……

・お姉ちゃん宣言キチャーーーー！！！！！！

・一緒のおふとうんてえてえーーーー！！！！！！

・かあくやらしか女ばい

「やらし……っ!! やらしくないよお！ なんで眷属達ってすぐエッチなこと

考えるの!? わかんないっ、妾分かんないよ!!」

「コメント」

・は？

・ん？

・んん？

・先輩の天使押し倒したよなあ？

・雷神の先輩には抱き着いて

・星の妖精には……うん、まあ……どんまい

「励まされた!？」

最後、励まされたぞお!？」

うぬぬぬ、でもお!

それは先輩

達がとってもとっても魅力的でえ! つい気持ち溢れちゃうの!

好き好きっ

てなっちゃうの!」

「コメント」

・告白

・なんも違くない

・誤魔化すな、己の宿業を

うううう、眷属達の分からず屋あ……っ!

涙目で配信画面を睨む。

伽夜ちゃんに言われてお泊り歌コラボの振り返り配信してみたけど……みんな全然分かってない、クレア先輩のすごいところを！

「あーもう分かったもんね、もう覚悟したもんね。みんなにクレア先輩のこと『布教』するんだから！ 分かるまで聞いてもらうんだからね！」

そうやってぶんぷんと腕を振っていたら、コメント欄にいつもの猫がやってきた。

「コメント」

・キャスパー…ぽっぽう！ 荒ぶっていると聞いて飛んできたよぽっぽう！ 君の言うクレア先輩だけど、今とある罪を懺悔しているよ！ 君の話とまるで違うね、ぽっぽうぽう！

・鳩にもなるのか、あのクソ猫

・豚にもなるよ

・そんな猫ヤダア……

・囲え囲えええ！ 仕留めるぞォ！

・おい猫お逃げんじゃねえ！

「？ ぞ、懺悔？ クレア先輩が？」

何のこと……あ。

そ·う·い·え·ば·、ク·レ·ア·先·輩·も·今·、私·と·同·じ·振·り·返·り·配·信·を·し·て·る·ん·だ·っ·た·。

ち·よ·っ·と·お·邪·魔·し·て·み·よ·う·か·な·。

で、でも前もって確認とらないと失礼だね……？

キーボードの上で指をさまよわせていたら、後ろから肩を叩かれた。

見ると、伽夜ちゃんのフリップにデカデカと「構わん、やれ」と書かれていた。

「よ、よし。マネージャー（のような者）さんから許可貰ったから、クレア先輩の振り返り配信に行くぞ。……あれ？先輩、マ○クラしてる？なんで？」

首を傾げながら、ライブ配信をクリックしたら。

『あたくし鳴神クレアはああああああ！レヴィアちゃんに添い寝してもらった

時にい！！大！変！ムラムラ！！して・しまいましたああああああああ

あああああああああああ！！！！あっっちいいいいいいいい

いいいいいい！！！！！！』

「鳴神クレアのコメント」

・ 焼き土下座だああああ!!

・ YE A H H H H H H H H H H H H H H !! !!

・ どんどこどんどこどんどこ

・ ド淫乱雷神のスメルがスパイシイだぜえ!!

・ わざわざ会見場（焼き）を建設してからの謝罪バーニング燃えるぜえ!!

・ どんどこどんどこどんどこ

そこには、自ら何度も焼かれに行く雷神様を、太鼓でヒヤッハー大盛り上がりするコメントで溢れていた。

「コメント」

・ 温度差の極み W W W

・ 盛り上がり方が世紀末なんよ

・ 墮天使探検隊はアマゾンの奥地へと向かった……っ！

・ グ○マでは一般的な光景ですね

・ レヴィアたんフリーズしてるううう W W W W

・なんて目をしてやがる……ハイライトがない

・レヴィアにはちよつと早かったね

・しっ！ 見ちゃいけません。パパと一緒に菓子食べに行こう？

『だってさ！ あんた達、聞きなさいよ！ 同じ布団で、お互いに浴衣がはだけた状態であの子スベスベの足絡めてきたのよ！ 背中にもマシユマロおっぱい押し付けてきたのよ！』 ムラムラが止まんないわよお!! 胸も子宮もキュンキュンよおお!! あー！寝たふりして良かった!』

「鳴神クレアのコメント」

・エチチ太鼓用意!

・それは仕方ない

・あの墮天使、さてはむつつりだな?

・キャスパー…その時レヴィアたん、なんか言ってたらしんだけど聞いてた?

『え?』

………ああ〜なんかブツブツ言ってた気がするけど……聞いてなかったわ。それよりあたしはもう添い寝でスイッチ入っちゃってたから。

カクヨムコンテストに参加しています！

応援よろしくお願いします！！

<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>

741950

第27話 墮天使の今後の課題! (妹マネちゃんからお叱り受けました…)

「お姉ちゃん。メスガキになってえ?」

妹が人生で初めて私におねだりした。

……しわを刻んだ眉間を揉み揉みする。

先輩達との3連続コラボを乗り越えた日の朝のことだった。

「ま、待って伽夜ちゃん? も、もう一回行ってもらえる?」

「おねえたあん♡! あたち、おねえたんにメスガキムーブしてほちいのお♡! 散々調子こいた拳げ句にいいいい! 無様に屈服させられてほしいのおーっ! ……!」

「わかった! わかったから朝の通学路で萌え咆哮轟かせないで!」

私と伽夜ちゃんは、中高一貫の同じ学校に通っている。

何が言いたいかと言うと妹よ、人の目あるからティガ○ックスにならないで。

「分かった。やめる」

「素直で良い子っ♡」

頭を撫でてあげよう。

伽夜ちゃんの頬がどンドン吊り上がってく。

カワイイ。

「でも割と本気でお姉ちゃんがメスガキムーブかましたらおもろ……受けると思うの！」

「ちよっと伽夜ちゃん？ 朝から痙攣する？」

指の骨を順繰りに鳴らす。

伽夜ちゃんはハッと顔を青くして、びくびくと縮こまった。

「やめて……やめてほしいのだから……抉るなら見えないところでして欲しいのだから……もお苦しいのは嫌なのだから……」

「ちよっ伽夜ちゃん!? 言い方に悪意あるよそれは！ ただのちよちよじゃやない!?!」

「おねいぢや……おねいぢや、もおやめてほしいのだから。昔のやさしいおねいぢやに戻って 欲しいのだから」

「朝陽を浴びながら闇深いこと言わないで!? それに私は今も昔も、伽夜ちゃんに優しいお姉ちゃんでしょ? ……でしょお!」

…あれ?

自分で言ってる、全然そうじゃない気がしてきたよ?

なんかむしろ闇の深さを肯定しちゃった感があるんだけど。

「うう…:…:そ、そうなのだ。おねいぢゃはいつだって優しいおねいぢゃなのだ…:…:屈し^く屈し^く」

「屈してるんじゃない! やめてよ言わされた感出さないでよお!!」

「———はいこれ。こういうことやってほしいの」

目元を擦って怯えていた伽夜ちゃんが、急に元のクールな表情に戻った。

な、なに? どういうことなの?

目を白黒させる私に、伽夜ちゃんがキラッと解説し始めた。

「今わたしのことをこちょこちょで脅したように。眷属——リスナーともこんな感じで脅したり突っ込んだり、言い合いしてほしいの」

「おどっ!? そ、そんなの無理だし駄目だよ! だって眷属さんは、私の配信

見に来てくれる、云わばお客さんなんだよ!? そんな乱暴にできないよ……嫌われちゃう」

「……お客さん、ねえ」

伽夜ちゃんはがっくりと肩を落として、深くため息をついた。

そして頭を抱えながら、

「でもさ? 鳴神クレアの太鼓達はどう? けっこう配信者とリスナー同士でバチボコに言い合ってなかった?」

あっ、と息を呑む。

たしかにクレア先輩、けっこうリスナーのこと煽ってたけど……むしろ太鼓さん達はその倍ひどいこと言って煽り返してた気がする。

それはステラ先輩のコメントさん達にも、リエル先輩のご主人様達にも言えることだった。

「そりゃ、根っこはエンターテイナーだからサービス精神は大事よ? でもみんながVtuberに求めているのってね、『友達感覚』なのよ」

「——とも、だち?」

「そう。バカなこと言い合ってどつきあう気軽さっていうか……フレンドリーさ。煽って煽り返して、リアルタイムで時間を共有する楽しさ」

将来の進路とか、クラスでの立ち位置とか、学校でのキャラとか。

そーいうのぜーんぶ放ったらかして、マク○ナルドとかでただただお喋りする。そういう感じなの、って伽夜ちゃんは言っていた。

「お姉ちゃんも分かるでしょ? こういふ感じ。お姉ちゃんは優しいから、そういうこと言えないかもだけど。別に眷属の人達は今更」

「……………分かんないなあ」

放課後にそんな、ゆったり話せる時間なんて。

いや、そもそも——

……目を細めて、私はアドバイスをくれた妹の頭を撫でる。

「ごめんね伽夜ちゃん。でも大丈夫! 友達感覚だね? これからはそこを意識して配信してみるよ。アドバイスしてくれてありがとうっ」

にこっと微笑みかける。

伽夜ちゃんはうつむいて唇を尖らせていた。

「……そうじゃ、ないのに」
聞かなかったことにした。

カクヨムコンテンツに参加しています！

応援よろしく願います！

<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>
741950

第28話 クラスの端っこと中心（ねえよく見たらうちのクラス変な人ばっかじゃない？）

教室に入る前、私は度が入ってないメガネを掛けた。

これがいつもの私の習慣。別に視力に問題はないけれど。

掛・け・と・い・た・ら、イ・メ・ー・ジ・に・合・う・か・ら、掛・け・る。

「お、おはよ」

「ん？ ああ……はよ」

教室の入り口で話してた女子に挨拶する。

私の席は、廊下側の列の三番目。

迷わずに、足早に席に向かう。

「ねえ、さっきの誰？」

「んー……覚えてなあーい。挨拶されたからとりあえず返した」

席に着いて、教科書を机の中にしまったら、本を取り出す。

図書室で借りた古典小説。あんまり内容が入ってこない。

それでも、本を眺めてるだけでも——イ・メ・ー・ジに合・うから、眺めておく。

「ああ、姫宮さんだよ。ほら、図書委員の」

「……あっ！　ほんとだよ！　『らしい』わあ〜w」

「あっ、うちも思い出した！　掃除やってくれたり課題写さしてくれたり、すごく良い子なんだよ〜」

こっちに一人、近寄ってきた。

内心ビクビクしながら、顔を上げると、その子は手を合わせて拝んだ。

「姫宮さん、今日の英語の課題写さしてくれない？　おねがい！」

「いい……よ」

こういう頼みはすぐに聞く。

その方が、私らしいから。

私の名前を忘れてたその子は満面の笑みで「ありがとう」と言った。

そしてすぐお喋り仲間の所へ戻っていくその子の背中を遠い目で眺めた。

小さく縮こまって本を読んで、おとなしくて、便利な『図書委員』。

それが、親睦会のカラオケで総スカン喰らった後、なんとか築き上げた私の立ち位置キヤラだった。

だから。

「友達感覚……かあ~~~~」

今朝の伽夜ちゃんの指摘には、けっこう頭が痛くなった。

バレないように教室の中を見回す。

そこには、全てが出来上がった空気に満ちていた。

わいわい騒ぐ男女入り混じったグループ、足並みを揃えて牽制し合う女子のグループ、同じ趣味で仲良くなった男子のグループと女子のグループ。

組み終わったジグソーパズルみたいな景色に、私は

「……むりだよおおおおお~~~~」

机に突っ伏して悶えた。

伽夜ちゃん無理だって。分かんないって友達感覚なんて。だって友達いないもん、いたけどいなくなったもん。カラオケでハジけたからいなくなったもん！

その上、更に言い合う？

煽って煽り返す？

バカなこと言っただけ付き合う気軽さ!?

「むりにきまっつてんじゃんむう~~~~~」

「あっ、姫宮さんが悶え苦しんでる」

「感動してんじやない？ 本に」

「ええ、あんな体捻じれるほど……」

はっ、まずいまずい。

クラスの女子のひそひそを察知して慌てて居住まいを正す。落ち着いて私。

よくよく思い返したら、別にクラスメイトとそうしろって言われてないじゃない。
い。

ただ眷属さん達とそうしろって言われてるだけで……出来る気がしないなあ？
リアルでも無理なのに配信で出来る訳ないなあ？

どうしよっかなあ？

ふう、と深く息を吐いた途端——教室の扉が勢いよく開いた。

びっくりりして見てみたら、三波くんが切迫した顔で男子達に呼びかけた。

「大変だお前らあ！」

「どしたー？ ついに自分の眉毛が M 字開脚に見えてきたかー？」

「ちがう、それはもうやった！ これを見ろ！」

気怠げな返しをする男子達に、三波君は手に持ったそれを掲げた。

まるで王者の証か何かのように、それは光り輝き、男子達の視線を引き上げた。

「——さっきそこで女子の上履き拾った」

見ると、それは確かにサイズの的に女子の上履きだった。

シューズの先が赤色だから 3 年生かな？

名前も油性ペンで書いてあるし、それなら届けに行けば良いんじゃないや……。

ガタタァン!! と轟音。

男子達の群れが、机を押しつけ、椅子を弾き飛ばし、三波くんの掲げる王者の証

(上履き) 目掛けて殺到する。

「寄越せや三波い！」「出会いのきっかけ出会いのきっかけ！」「先輩女子との交際の決め手え！」「学園ラブコメの冒頭お！」「歳の差カップルに！俺は！成る！」「僕、受験頑張って彼女と同じ大学に入るんだあ！」

「黙れ出逢いに飢えたカス共お！この良い匂いがする上履シンデレラきの王子様になるのは、この三波ブラ○ドー様だあ!!」

言い合って。

「俺はDTを辞めるぞ、野郎どもおおーっっっっっっっ!! !! !!」

「うわああああ上履き被りやがったああああ!! きっっっ色悪りっ!!」
煽って煽り返して。

「ぐあああああああ!!!」

「口ほどにもねえなあ王子様あ！」

「不甲斐ねえなあ王子様あ！」

「あばよ王子様あ！」

「おのれえええ、これが……NTRっ！」

バカなこと言っただ突き合う。

——全部できてるう!!

私ができないと思っていたことを、三波くんは息をするかの如く自然とできてた。女子の反応はというと……。

「明るいねー」「傷だらけ……かっこいい」「絆創膏いるかな?」「男子（三波くん）のあーいうバカノリ好きだわあ」

私は遠く離れた職員室に視線を送る。

先生このクラス、もう一回視力検査すべきです（主に女子）。

……それにしても。

私は本を閉じて、頬杖を突き、三波くんを見つめる。

——今思い出したけど、私、三波くんのことド突いてたなあ。

宵月レヴィアのエチチイラスト見せにきた時、伽夜ちゃんと同じようにくすぐって屈し屈しさせた。彼と話すようになって、まだ数日しか経ってないのに。

「これが……プロレスかあ」

そうだよ。

思い返せば、私、V t u b e r になってから色んな人にエッチなことされて困らされてきたけど——本気で嫌だと思ったこと全然ない。

それは三波くんとの、いつものお昼休みのお喋りの時だって。

「……………すごいな」

ぼそつと独り言をつぶやいて、目を細めていたら、

「なに見てるの？」

横合いから飛んできた声に、スンッと凍り付いた。

ふるふると、強くて冷たい語気が流れてくる方へ振り返る。

そこにはクラスメイトの——早乙女咲良《さおとめさくら》さんが立っていた。

早乙女さんは私の視線を追うと、すぐ三波くんに気付いた。

そして、鼻で笑って一言。

「姫宮さん……もう少し相手考えたら？」

「アッ、ハイ、ソウデスネ」

それだけ聞くと早乙女さんは「フンッ」と鼻を鳴らして、自分の席に座った。
え？ なに今の反応。

もしかして早乙女さんって……三波くんのこと、好き？
だったら。

私は左斜めに座った彼女の背中に、念を送った。

違いますよお〜私もうそういう感情無いですよ〜勘違いしないでねえ〜

カクヨムコンテストに参加してます！

現代ドラマの週間ランキング5位になりました！

ありがとうございます！

引き続き応援よろしくお願いします！

7
4
1
9
5
0

<https://kakuyomu.jp/works/16816927859130>

第29話 妾って……トーク下手? (推されるってこういうこと)

「いやあく土日レヴィクレコラボ凄かったなあ。」

燃え盛る謝罪会見場に相対する墮天使と雷神。

二人の一騎打ちは『ほんとにマイ○ラか?』『SEK○ROじゃね?』とのコメントで大いに盛り上が……」

「……………」

「……姫宮さん、今日なんか調子悪い? むっつっちゃ見てくるやん」

「へ? あ、気にしないで。」

ただ三波くんがいつもどうい風風に考えて喋ってるのか見てるだけだから」

いつものお昼休み、いつもの校舎裏で、今日も今日とて三波くんは宵月レヴィアの推し語りをする。

でも気付いた。

お昼休みって50分くらいあるけど……その間、三波くんってずっと喋ってる。

それも時間を感じさせず、それでいて飽きも来ないように。

いつもは変態さんだなあって思ってたけど——実は三波くんって結構トークスキル上手い？

そう思ってから私はまじまじと三波くんの表情を、語り口をしかと観察していた。参考になるところがあったら吸収しないと！

でも三波くん、なんだか唇をもによもによさせて黙りこくってる。

「どうしたの三波くん？ 早く喋って？ いつもはレヴィアちゃんのこといっぱい話してくれるじゃない？」

「いや……そ、そんなガン見されたら話し辛いつつーか……ねえ本当に今日どうしたの!? 変だよ、姫宮さん!? なんかあった!？」

凶星を突かれて、ぎくりと肩を揺らす。

「わ、わかる……の？」

「さすがにね!? もうなに？」

俺で良ければ話聞かからさ……その鬼気迫る目やめて?」

ひいひい、と目に浮かんだ涙を拭って。

三波くんは晴れやかに断言した。

「レヴィアたんって別にトーク上手いわけじゃないからねえ〜!?
むしろ
下っ手くそだとおも」

「指突！」

「あべしっ！」

反射で飛び出した私の挟りくすぐりに、三波くんはぶっ倒れた。

「な……なぜ」

「知らない。手が滑った」

バカ。三波くんのヴァカ！

口の中だけでもごもごと罵倒する。

なんなのこの気持ち。三波くんは未だに笑いながら、体を起こした。

「だってそう思わない？ 振られた言葉とかにリアクションとかはできるけど、墮

天使から何かアクションしたことってあんまり無いじゃん。だから妹さんの意見は分かるなあ」

しかめっ面を見られたくなくて、俯く。

口の中に広がる苦い感情を奥歯で噛みしめて、拳を握りしめる。

わかってる、わかってるよ。

だって三波くんが今言ったことは、自分でも思っていたことだから。それをあなたの口から言われるのが——くやし

「ま、だからってレヴィアさんにトーク上手くなって欲しいとか思わないけどな？」

「……え？」

あっけらかんとした声音に、思わず顔を上げる。

丸めた目で疑問を投げかける。

なんで？

トークが下手なら上手くならなきゃ。

苦手なところはすぐに直して、弱点を見つけたら無くさなきゃ……！

学校でも習い事でもバイトでも、そしてきつと会社でも失敗は返さないようにちゃんと克服しなきゃ。

そうしなきゃ、こいつはもう駄目なんだって見切られる——捨てられるんだから。頭から言葉が溢れて、喉に詰まる私の横で。

「だって俺、そーいうトーク下っ手くそで、一タリアクションがおもしろかわいいレヴィアたんが大好きなんだわ」

三波くんは、とろけそうな笑顔で、推しへの愛を口にした。

いつものお昼休み、いつもの校舎裏で——いつもの愛を、語る。

「素直なんだよなあ、レヴィアたんって。純情っていうかさ。たまに眷属のコメントで面白いのあったら『すごいすごい』って拍手するんだよ!」 幼女かったの!

そのくせ本人むっつりさんなのが透けて見えるんだよなあ、リエルのコラボとかクレアとのベッドの話からして。それでいて無知! まさかM字開脚知らないだなんてなあ、自分の眉毛がM字だからって興奮してた俺の立場よ。懺悔室に直行したくなるわ。あのピュアっぷりはステラママも抱きしめたくなくなるわ。まあー何が言いたいか一言で言ったらね」

ここまで 10 秒という、恐ろしいまでの早口。

まるで、そのくらい口が回らないと、推しの魅力が語れないかのような。

そんな彼はいつも、いつだって、大雑把に一言でまとめようとして。

「俺はありのままの宵月レヴィアが大好きだ！ だからレヴィアたんには、自分のやりたいことをやりまくって欲しい！」

全然一言じゃない、推し^{わたし}への想いを、告げるんだ。

いつも聞いている、聞いていた三波くんの変態語りが——頭の中に溢れていた言葉をまとめて吹き消した。

目をぱちぱちと瞬きしてると、彼はうんうんしたり顔で頷いた。

「だから別に、取って付けたみたいプロレストークなんかしなくて良いんだよね。妹さんにはそう伝えといて。ていうかプロレスとか煽りなんて、V の先輩達に揉まれていけば勝手に出来るようになるしねえ。」

紳士はいるけど清楚はいねえから、この業界」

そう朗らかに言っ、彼は私の肩を叩いた。

遠慮がちに、ちよんちよんと。

「でもレヴィアさんのメスガキムーブね。一ファンの願望としては良いんじゃない？
面白そう。ナイスアイデアだねえ妹さん」

親指を立てて、伽夜ちゃんのアイデアを褒めたたえる三波くん。

やっぱり変態さんだ。

でも——信じてても良い変態さんだ。

そう、思えた。

「……三波くん。今更なんだけどね？」

「うん？ なに？」

「——メスガキって、何？」

「知らんと話してたんかああああああああああああああああああい！！！！

！！

教えてくれた。

カクヨムコンテストに参加してます!

カクヨムコン…ラブコメ部門の週間ランキング101位でした。

956分の101? ……あれ、けっこういいける???

引き続き応援よろしくお願いします!

https://kakuyomu.jp/works/16816927859130

741950

第30話 妾っ、立派なメスガキになってみせる！（なんか不穏な視線を感じたけど気のせいだよね）

三波くんが保存してた画像（ピクシブ）とか動画（YUTUBE）で一通りメスガキを見せてもらった。

「ねえ三波くん？　なんでこの娘、こんなに大人を下に見てるの？　この年じゃ水道代も払えないのになんで大の大人に『ざあござあこ』なんて言えるの？　『わからせたい』ってあるけど、これ因果応報じゃない？　屈服されて当然だよ」

「やめろおとおおーっ！！　そんな純粋な目で一性癖をマジレスすんなああっ！！　つーか姫宮さんの意見が意外すぎる!?　お主さてはSじゃな？」

「えっ、えええSじゃないよ!!　何言ってるの、三波くん!!　このっ、変態っ!!」
「ほらSじゃん！　もおSじゃん、語るに落ちてんじゃん！」

そんな……ち、ちがうよ。私はいたって普通、SもMも無いよ。

確かにクレア先輩のお尻たくさん叩いたし、伽夜ちゃんにも痙攣するまで抉りく

すぐるけどSなんかじゃ……あれ？

自分で言ってる、全然そうじゃない気がしてきたよ？

「私は——S、だった？」

「ごめん姫宮さん、俺からは何も言えないよ。クラスメイトの女子の属性なんて断言したくねえよ。責任なんか持ちたくない」

なっ、なんだろう……いつもと逆な気がする。どうして三波くんが引いてるの？
おかしい、おかしいよ……とっ、とにかく！

メスガキについては分かった!! (現実逃避)。

つまりあれだね？ 眷属みんなに『ざあござあコード変態』って煽りまくれば良いんだ
ね!?

ふんすと私は鼻を鳴らす。

『だからレヴィアたんには、自分のやりたいことをやりまくって欲しい!』

三波くん。あなたはそう言ってくれたけれど。

だからってその気持ちに甘えたくないんだ、私。

——やるよ、メスガキ。やってみせるよ。

だからこそ……三波くんの耳に狙いを定める。

手を筒みたいに丸めて、口元に添える。

そうっと、バレないように、彼の耳元まで寄って行って……ささやく。

「ざあござあこ……ド・変・態♡」

彼がパツと勢いよく振り返る、より前に私はパツと離れる。

そしてメスガキらしく、口の端を持ち上げて、

「こういう……感じ？」

首を傾げて魅せた。

三波くんは耳を抑えていた。顔が、真っ赤だった。

「早乙女咲良の視点コメント」

「は？」

たまたまだった。

たまたま弁当を作れなくて、たまたま購買に行ったけど売り切れてて、たまたま学外のコンビニに行って、たまたま普段じゃ寄らない場所で食べようと思った。

それだけだった。

「は？」

教室のある校舎とは、反対の校舎の裏。

うちと同じクラスの男女がいた。

三波君と姫宮さんが、二人きりで、肩を並べてご飯を食べてた。

「は？」

姫宮さんが三波君に身を寄せた。

すぐにパツと離れたけど……三波君の顔は教室じゃ見たことない、驚いた顔を
してて——それ見た瞬間。

「はあああああああああああああああああああ~~~~~?」

ぶぢゅうううう!! と、ストローから牛乳が吹き出す。

そうして、うち……早乙女咲良さおとめさくらは苦勞して買ったやきそばパンと牛乳パックを握

239 第 30 話 妾っ、立派なメスガキになってみせる！（なんか不穏な視線を感じね）

り
つ
ぶ
し
た。
。

第31話 悪役令嬢..早乙女さん!?! (まってちがうの、誤解なの!)

「こういう…：感じ？」

練習をしたかった。

配信前にメスガキムーブって言うのを。

だって配信でいきなりやってスベるの嫌だし。

そういう、至極マジメな想い——だったんですよ。

「あんた達、ここで何してんの？」

私達を見下ろす瞳孔ガンギマリの早乙女さんに、私はそう心の中で語り掛ける。
手からなんかポタポタ垂らしてる…：え何なのそれ返り血？ の割には白いし。

え、ほんとに何!?

「あんた達、ここで何してんの？」

「お？ どうしたんだ早乙女。昼飯買えたのか？」

「あんた達、ここで何してんの？」

「早乙女さ……ち、ちがうの！ これはその、普通に一緒にご飯食べてただけで」

「き・さ・ま・ら・こ・こ・こ・で・ナ・ニ・ヲ・シ・テ・オ・ル・？」

語るにつれて人間辞めていってる声してるう！

なんか言い方も尊大になってる気がするう！

というか駄目だ、私の話も三波くんの話も聞いてない！

「あたしさあ、見てたんよ。なんかあ？ 姫宮さんがさあ？ 三波に近づいてさあ。

もうすっげえ近づいてさあ。まあすぐ離れたから良いけど……三波の面がさあ、明

らか何かあった顔つつーかさあ」

天界から脳天へピキューンと危険信号が走る。

墮天使^{センス}六感が言っている。

あ、これ——最大最悪の勘違いされている！

私は勢いよく立ち上がって、早乙女さんに詰め寄る。

「ちがうのちがうのちがうのお!! 早乙女さんが考えてることなんかしてない

よ!! !? だって私と三波くんだよ!? なにかある訳ないじゃない！」

「……うちが考えてることってなに？」

怪訝な目に見下ろされて、私はびしっと固まった。

あつれくくくく？ 墓穴掘った気がするくくくく？

早乙女さんはドンツと胸で私を押し出して、問い返してきた。

「ねえ？ 何がないの？ 姫宮さんと二波との間に、何かあるの？」

「あつ、それ俺も気になる。どうということなの、姫宮さん。そんなことって何？」

あーんたは何でそっちに加勢してんだあああああー！！

やめてよ！ 二人して私の墓穴ほじくり返さないでよ!?

そうして二人からの追求にあわあわしてたら……学校のチャイムが鳴った。

「仕切り直しね」

仕切り直すんですか。

早乙女さんはフンつと鼻白んで、大人っぽい巻き髪をなびかせた。

ずだんずだんと足を踏み鳴らして行って、途中で振り返った。

火矢かと思間違える程の眼光に、私は怖くて肩が跳ねた。

「いやあくくえらく睨まれたなあ」

「……どうしよう」

「？」と横で三波くんが不思議そうな顔をする。

地味で暗いのが私らしさ、おとなしくて便利なのが私の役割。

そんな私が、クラスの中心の三波くんところり会ってた。

『なんか姫宮さんらしくないね』

きつとまたそう言われる——あの時の、親睦会《カラオケ》の時みたい。

「終わった……私の学校生活……終わった」

「んー、別にそこまでの事態じゃないと思うけどなあ」

能天気な三波くんの言葉を無視して、私達はタイミングをずらして教室に戻った。

席に着くと……斜め前から火矢の視線を放たれた。

早乙女咲良さん。

テニス部のエースで学校の成績も優秀。街に遊びに言ったら読モの勧誘受けた、だなんて話しょっちゅう聞くくらいスタイル良い美人。

廃部寸前のテニス部を都大会常連まで押し上げた才女。

——もし、三波くんところり会ってたのが彼女だったら。

「なんにも問題ないのになぁ」

けど、問題は私だから。

姫宮紗夜だから。

私がらしくないことをしたから——今、早乙女さんにめちやくちや睨まれてるんだ。

………こわいこわいこわい！　じわわっと涙出てきた。

この後、私に何をする気なの？

私、何されるの!?

増すばかりの不安で視界はぼやけて、その間も早乙女さんの視線が突き刺さって
いた。

第32話 ボルケーノ・早乙女（テニス勝負ってドユコト?）

六時間目の授業が終わった。

結局、早乙女さんの噴気は止まることなく、チャイムが鳴る。

たった今、放課後を迎えて、私はごくりと喉を鳴らす。

クラスみんなが思い思いに動いて談笑する中、私は未だ動かぬ早乙女さんの動向を見つめ続けて。

——がたり、と立ち上がった。

来る。

端がぐしゃぐしゃになってる教科書を置いて、早乙女さんはくるりと踵を反転。大人っぽくて綺麗な巻き髪が翻って……アレ？

てっきり私の所に来ると思っていた早乙女さんは、ずんずんと反対方向の、三波くんの席へ向かっていく……ってアレ？

思わぬ動きに訳分かんないけど、とりあえず私も席を立てて早乙女さんを追う。追いついて早乙女さんの肩にそろそろと手を伸ばす。

態に、精神がぶち込まれる。

「ごるらあああああああああああああああああつ!! 来い、こらくソボツトが!! ボケ面ぎゅああああああああああああああああああ!!」

「んばああああー?」

ごぎゅん!! !! と掴んだ襟首が1080度捻じり込まれ、早乙女さんは三波くんを持ち上げた。

椅子から。座った状態から。

早乙女活火山は「んばー」と謎の悲鳴を上げる三波くんを引きずり倒して、教室を出ていった。

——って! 見てる場合じゃないよ!?

私はダッシュで追いかけて……早乙女さんはツツツや!?

人ひとり引きずって走ってるのに、全然追いつけない。ていうか……階段でも三波くん引きずってる!?

「さ、早乙女サア——ン!! まって、死ぬ! 割とマジで三波くん死ぬうううううううううううううううううううう!! !?」

雑に運ばれたキャリーバッグ状態の三波くんは最後、早乙女さんにテニスコートにぶん投げられた。

ごろごろごろと転がり続けてから、すつくと立ち上がる三波くん——に早乙女さんはテニスラケットを投擲した。

投げ槍の如きラケットを、三波くんは難なくキャッチして、網ネットの隙間をいじいじ調整する。

「勝負だ、三波 イイイイイイイイ!! 姫宮さんとランチした挙句、泣かせた報いを受けやがれああああああああああああああああああ!! !! !! !!」

火山弾。

いや、それはテニスボールだった。

噴火と共に火山弾と見間違える程のサーブを放った、早乙女活火山。その球威に追いつこうとラケットを伸ばす三波くん。

だけど……三波くん側のコートに深い弾痕が穿たれる。

「ファイファイ ラッ15—0。先制点…早乙女」

「伽夜ちゃん!?!」

いつの間にかテニスコートネット付近にいた妹を呼ぶ。すると伽夜ちゃんはちよいちよいと私を手招きした。

三波くんがぼーんとサーブを打ち返してる間に、私はひそひそ伽夜ちゃんと話す。

「どういう状況なのコレ!？」

「なんで当事者が知らないの」

「知る訳ないでしょお!？」

てつきり早乙女さんは私に不満持つてるのかと思ったら、いきなり三波くんを引きずり出して。

そしてどっから持って来たか分からないテニスラケットとボールで試合始めて。

……ていうか、なんで三波くん、秒で適応して試合やってんの？

そして、なんで伽夜ちゃんここに居るの!？」

「お姉ちゃんの教室にある盗聴器に反応あって、ドローンで見てみたらなんか面白いこと起きてたからスタンバりました。で、これ何の試合?」

「もーやめて。これ以上、私に新情報ぶち込まないで」

盗聴器? ドローン? ねえちよつと妹何ヤッテンノ? ていうか何の試合か

知らないで審判やってるの!?

「^{フォーティ}40—0。第1セット終了。トュー早乙女」

テニス第5セットまでやって、1試合。

一区切りついたおかげか、早乙女さんはさっきより落ち着いた様子で語り始めた。

「あんたは……分かってんの？ 姫宮さんだよ？ 居るだけで空気が和み、見て

るだけで優しい気持ちになれる、あたしの推しクラスメイトと！ 二人っきりで

！ ランチだぞ、ランチィ!? あんた、その希少さを分かってんのおお!？」

What are you saying?

ナアニイッテンダッ、コノヒトオ？

新情報をぶち込まれて、処理落ちする私の脳。

でも早乙女さんの力説は止まらない。

「それほどの幸福を教授しておきながらあ!! なんだあんた、そのシケた面ア!!

もっと喜べよ!! あた、あたしだったら! カレンダーに丸つけるのに!

記念日にするのにいいいいいいいい!」

「待て早乙女、俺だって初めて声掛けられた時は嬉しかったさ。だって姫宮さんに

限らずクラスメイトの女子と話すことって早々無くな?」

「だまれ童貞があ!! あたしの推しメイトを!! 汚すんじゃないかええええー!!

!! !!」

「いやまず推しメイトってなあーにぃー!」

私、そんな扱いだったのお!?

思わず口を挟んだけど、私の声は早乙女さんのサーブの風切り音で掻き消された。

初めほどじゃないけど、凄まじい球威を誇る早乙女さんのサーブ。今

度はそれをしっかり返した三波くん。

テニスボールが互いのコートで跳ねて打たれて跳ねて打たれて……ラリーと会話が續いていく。

「思えば今朝から嫌な予感はしてたよ! 姫宮さん、あんたのこと見てすごく嬉しそうだったし!」

「えっ、そうなん」

ちがああああああああああうっ!! !?

違うから! そういう目で見てた訳じゃないから早乙女サァン!?

ラリーは続く。

「そんな訳ないって思ったよ。だからあたし、姫宮さんに『もう少し相手考えたら』って言ったよ！ 三波なんかより、姫宮さんに相応しい相手はいっぱいいるから！」

あれ、そういう意味だったの!?

「そしたらお昼、二人がいますとこ見て！ ひめっ、姫宮さんがあなたにあんな近寄って！ マジあなたのこと睨み殺してやろうかと思っただワ!!」

あれ、三波くんを睨んでたの!?

「昼休み終わって、心配で見守ってたなら——姫宮さん授業中に泣き出して!! あなたへの怒りで一杯になったよ!! あなたが姫宮さんに何か言ったんでしょ

お!!」

あれ、私に怒ってたんじゃないなくて、三波くん怒ってたのお!!

早乙女さんの打球が三波くんの逆サイドを突く。三波くんは腕を伸ばすけど、ボールは届かなかった。

「^{ファイブティ}15—0。先制点…早乙女」

猛る感情の昂りか、早乙女さんは肩で息をしている。

紅潮した頬を伝う汗を拭い去って早乙女さんが三波くんに告げる。

「三波！ あんたがどれだけ姫宮さんを想ってるか確かめてやる！ あたしが勝つたら、金輪際、姫宮さんとはお喋り禁止よ!!」

「ほお……どうやって確かめるんだ？」

ニツと笑って、三波くんは早乙女さんにボールを放り渡す。

あ、三波くん悪ノリしてる……すっごい笑顔浮かべてる!?

伽夜ちゃんもなんか腕振ってワクワクしてる！

三波くんの問を受けて、早乙女さんの眼光がきらりと煌めく。

そうしてラケットでとんとんととボールをパウンドさせながら、

「ボールを打つ度に、姫宮さんの好きなどころを言いなさい。ラリーが続いたとしても、好きなどころを言えなくなった時点で……あなたの負けよ」

「面白れえ……乗ったぜ、その勝負」

「——乗るんじゃないよおおおおお!!」

切って落とされた勝負の火蓋に、私の叫びは届かなかった。

第33話 おのれえええくっ殺! (私、2センチ大きくなったんだ?)

「常にオドオドしてるところが可愛い!!」

バウンツ!

早乙女さんの強烈なカーブショット……に。

「レヴィアたんみたいなの笑顔!」

スパン。

軽いフットワークで三波くんは追いつき、返球。

「守りたい抱きしめたい撫でたいいいいいいい!!」

ガオンツ!

空気を噛み砕くが如き、早乙女さんの絶殺スマッシュ。

「レヴィアたんみたいなの清楚さ!」

ポーン。

その勢いを完全に殺し、コート奥深くへ返す三波くん。

「課題忘れたバカメス生徒にも微笑んで写さしてあげてるの優しい素敵すっつきい
い!!」

ギュボンッ!

地響きを起こしかねない踏み込みで、ボールへ追いつき返球する早乙女さん……
を。

「レヴィアたんみたいな声」

コン——ッ。

嘲笑うかのように、ネットぎりぎりにボールを落とし返した三波くん。

三波くんはテニスラケットをくるくると手で回転させ、ビシッとコートに這いつくばる早乙女さんにラケットを向けた。

「良いな、早乙女。めば○こ良い。お前の推し語り——おかわりだ」

「やかましいわああああああああああああああああああ!!」

すぐに立ち上がって、ボルケーノ早乙女は噴火する。

そんな火花散る戦いの横で……私は悶え倒れていた。

「バレてないと思ってましたあああうわぁーん」

「お姉ちゃんさあ、そんな悶えるならホイチェン使いなよ最初から」

「合格即デビューさせた口がなにほざいてんのお!？」

そりゃ薄々思ってたよ、三波くんに声で気付かれてないかなって!

でも何も言ってこないから大丈夫なのかなって思ってたんだよ!

バッチシ大丈夫じゃなかったよ!

「フィフティーンオール
15 15」

粛々と試合は続行される。

三波くんがボールを高く投げて、ぐっと力を溜める。そうして手足のバネを解放してサーブを放つ寸前。

「レヴィアたんより、ちよい小さめのバスト」

きらんと目を輝かせた。

対する早乙女さんは的確なフットワークで着弾点を見極め、バットみたいに豪快に振りかぶった。

「Dカップの、美乳うううううう!!」

ボゴオン！ とサーブをスマッシュで返す、強烈無比な一撃を放った。

—— お前らあああああああ!! !! !!

さすがに、私も怒った（心の中で）

三波くんが返球し、再びラリーが始まる……けど、伽夜ちゃんは「ふんっ」と鼻を鳴らした。

「にわかか。お姉ちゃんのパストは一昨日、2センチアップしたわ」

「え、そうなの!？」

パツと私は自分の胸を見下ろす。

か、変わってないように見えるけど……？

とか伽夜ちゃん。

なんで本人も知らない変化をあなたは知ってるの？

もう家に帰って寝たい気分だったけど、やっぱり見届けなきゃいけない義務感で試合を観戦する。今は早乙女さんが優勢で、三波くんは返すので精一杯だ。

「おにぎり食べる時、両手ではむはむしてるの可愛い！」

「レヴィアたんより、ちよつと垂れた目」

「話しかけられたら、びくって肩すくめちゃうところ可愛い！」

「レヴィアたんみたいに、通った鼻筋」

「どんな用事も笑顔で引き受けてるの偉い 1 京点！」

「レヴィアたんより、もちもちしてそうなほった」

「家がメテオで大変なのに！ 毎日バイトと学校頑張ってるの尊い
！——いいいいいいいいいい！！」

早乙女サア————ン！

早乙女さんの想いに涙こぼれる私。

そんな彼女の想いが乗ったショットは、今までで一番の球威を秘めていた。

あと三波くん。

今度会う時、私お面被って会ってみるね？

若干冷めた目で、早乙女さんのショットを返そうとしてる三波くんを見ていた。

「——レヴィアたんみたいなの、ささやき声」

どきり、と鼓動が一つ跳ねる。

小気味の良い、ラケットがボールの芯を捉える音が響き渡った。

滑らかな軌道で返されたテニスボールが、早乙女さんに迫る。早乙女さんがぎりりと奥歯を噛みしめた。

「……さっきから」

早乙女さんは緩慢に、力強く、居合切りのような態勢を取って——抜き放った一閃がボールを光に変えた。

「レヴィアたんって誰よおおおおおおおおおおおおお————————」

!! !?!?!

あつ、ごもつともな疑問だと思えます！

光線の如きショットを返されて、三波くんは目を見張った。

その時、私は確かに見た。三波くんがラケットを手放した瞬間を。

直後——三波くんの掌には、煙を上げたテニスボールが握られていた。

って、え？ 私も伽夜ちゃんも早乙女さんも、ここにいるみんな全員目を疑った。

第34話 墮天使、初布教です（初めてのリア友……できました）

『温かい……みんな温かいなあ……うううごめん、ほんとうにごめん……優しい、ほんとやさしいなあみんなあ——おわり、たく、ないなあ』

初配信。

『あのねえ？ いまわかったんだけどねえ？ ヒトってねえ？ のみもの飲んでるとき息止まるんだよね？ しってたあ？』

お〇っこ我慢スマブラ。

『先輩が……っ！ 悪いんですよ、私、もう……もうっ！！ 我慢！ しません！！』

ASMRコラボ。

『お母さん!? ねえお母さん!! 思ったよりキツツイし恥ずかしいんだけどお!!
!? う、くっ、ふぐう……あ、足とお尻プルプルして』

お絵描きセクハラコラボ。

『と、いう訳でな？ 妾にとつてクレア先輩は、その……頼りがいのある……お、お姉ちゃんって言うか……そんな、存在……んぬうにゃあああああ~~~~~!!!!!!』
お泊り振り返りコラボ。

それらの切り抜きを見せられた早乙女さんは、

「ばぶ~~~~~!!!!!!」

エビ反りブリッジで赤ちゃんになった。

……なんでえ？

トリップしていた早乙女さんは我に返って、悔しそうに三波くんスマホを返す。

「くっ……V t u b e r初めて見たけど……良いじゃない」

「だろう？」

「というか本当に姫宮さんそっくりね。もはや疑似姫宮さんだわ。実質あたしは今、姫宮さんのお○っことASMRを聞いたのと同義」

「だろうだろう。意外と似てるよな」

「特に心音最高。子宮の中で聞きたい」

「ごめん、流石にそれは分かんない」

ごめん、逃げて良いですか。

『あなたの子宮に入りたい』と言われて、膝が恐怖で笑わない女子高生いるでしょうか？ いやいいない。

「ふふっ……同じ産道通った」

ちよつと妹？ どや顔でぼつり呟いても聞こえてるからね？

なんのマウンティングなの、それは。

「あの……それで早乙女さん。分かってくれた？ 私と三波くんは、その」

「ええ理解したわ。二人は【宵月レヴィア】の推し語りをしてただけで特に深い仲でも何でもないのよね」

「そ！ そうなの！ だから三波くんとは何ともないの！ ただのお、推し被り！」

「そーそー、共にレヴィアたんを崇拜する墮天使の眷属さ」

「———そう。なら良いのよ」

早乙女さんはスカートの汚れをはたくと、すらりと立ち上がった。

その立ち姿はクラスのみんながよく見知ってるテニス部のエースだった。

「三波、悪かったわね……それじゃ、あたし部活だから」

大人っぽい巻き髪を翻して、早乙女さんが遠ざかっていく。

さつきまで火山憤怒ボルケイノしてたのに、びっくりするくらいあっさり去っていく。

ひ、ひとまず誤解は解けて良かった……私はホッと胸を撫で下ろした。

『姫宮さん授業中に泣き出して!! あんたへの怒りで一杯になったよ!! あん

たが姫宮さんに何か言ったんでしょお!!』

撫で下ろした胸の中が、じくじくと締め付けられた。

え……? 一歩一歩小さくなっていく早乙女さんの背中を見てて、どんどん息

がしづらくなる。

「なんで………あ」

頭の中に浮かんだ早乙女さんの言葉の意味に気付く。

するり、と締め付けが弱くなる。

そっか、早乙女さん——私のために怒ってくれたんだ。

私が、泣いたから。だからあんなに怒って。

『課題忘れたバカメス生徒にも微笑んで写さしてあげてるの優しい素敵すっつきい
い!!』

ラリーと一緒に口走っていた、早乙女さんの言葉の数々が……頭の中でバウンド
する。

『おにぎり食べる時、両手ではむはむしてるの可愛い!』

『話しかけられたら、びくって肩すくめちゃうところ可愛い!』

『どんな用事も笑顔で引き受けるの偉い 1 京点!』

『家がメテオで大変なのに! 毎日バイトと学校頑張ってるの尊い
!』

見て、くれてたんだ。

おとなしくて、便利な『図書委員』の私じゃなくて。

早乙女さんはずっと、ずっと——私自身を見てくれたた。

そんな人が、今、遠ざかろうとしている。

「ま……」

呼び止めようと、声を出そうとした瞬間。

『なんか姫宮さんらしくないね』

不安が喉に張り付いた。

『なんか姫宮さんらしくないね』

地味で暗いけど、おとなしくて便利な図書委員が。

クラスの才女に話しかけるだなんて。

そんなの——らしくない。

「あ……」

伸ばした手が空を切って、踏み出した足が地面に縫い付けられる。

立ちすくんでる間に、早乙女さんはどんどん遠ざかって行ってしまふ。

ああ——こわい。

ただ、ここから、おういって……声を掛けるだけで良いのに。

私は、どうして

「お——うい、早乙女ええ！　なんか姫宮さんが話したいってえ——!!」

私の耳を横切った三波くんの声が、届く。

早乙女さんが大人っぽい巻き髪を翻して、こっちに向かってくる。

「……三波く、ん？　なんで」

「へ？　だって姫宮さん、レヴィアたんを布教したかったんでしょ？　だからあんなもじもじしてたんじゃないの？」

——いや、違うねえ!?

なんで自分で自分を布教しなきゃいけないのかなあ!?

そんな当然みたいな目されても困るよお!!

そんな気も知らずに、三波くんはフツと目を細め親指を立てる。

「安心しろ……早乙女はもう墮ちかけ寸前。あと一押しですぐ【眷属】になる。奴をきっかけに、姫宮さんは布教の喜びを知るべきさ」

「ふ、布教って！　……そんなの何話したら良いか分かんない」

「普通に姫宮さんが感じた、宵月レヴィアの好きな所を言えば良いんだよ」

「む、むむ無理だよ！　そんな、三波くんみたいにできないよ！　それに私みたいな地味なのが、早乙女さんと話すだなんて……吊り合わないよ」

「吊り合わない、かあ」

三波くんは顎を触って、考え込む。

私は自分で口にした言葉の苦みに、俯いた。

早乙女さんは美人でテニスも勉強もすごくて。私みたいなハブられ気味の図書委員とはキャラというか、立ち位置がそもそも違くて。

「それを決めてるのって、姫宮さん自身じゃない？」

爪先と地面だけの視界に、三波くんの眼差しが割り込んできた。

見開いた目がひやりと乾く。

しゃがみ込んだ三波くんは、私を見上げる目を細めて……口の端を持ち上げた。

「話の合う合わないで遠慮するのは分かるけどさ、そうじゃないならお話しなよ。

俺にはそうしてくれたじゃん？」

「そ、それは……」

「姫宮さん。話って何かしら？」

「うひゃあんっ!？」

飛び上がって顔を上げたら、もう早乙女さんが目の前にいた。

切れ長の瞳に、口をパクパクさせた私が映る。

心臓がばくばくと不安を刻む。

どうにか……どうにかこの静かな空気を！ 破る一言を……！！

「あ、ああああのっ、早乙女さ」

「時間、大丈夫なの？」

……え？ 何のことだか分からなくて頭が真っ白になる。

どういう、意味だろう？

目をぱちくりさせて、早乙女さんを見上げていたら、

「一度だけ」

ぼたり、と。

雨垂れみたいなか細い声が、私の目に落ちてきた。

「一度だけ、カラオケに誘った時、姫宮さん、すごく申し訳なさそうにバイトだからって断って……あたし後からメテオのこと知って……」

雨粒が振り注いで、私の耳に沁み込む。

沁み込んで——あっ、と声を上げた。

2年になった春、クラスの親睦会《カラオケ》で、ハジけたら総スカン喰らって。バイトで放課後空いてないから、どんどんクラスに居辛くなって。

でも早乙女さんは……声を、掛けてくれていた。

「家のこと大変そうで、バイト忙しそうで……無理に誘うの、迷惑かなって思ってた胸を抑えて、早乙女さんは途切れ途切れに言葉を紡ぐ。

切れ長の瞳が、憂いで潤んで、揺れた。

「もう……大丈夫なの？」

私はバカだ。バイトに忙殺されて、こんな大切なことを、忘れていた。

早乙女さんはずっと——私のこと思いやってくれてたのに。

すうっと息を吸った。

ちよっぴり滲んだ涙を、引っ込めて。

「もう、大丈夫だよ」

私は早乙女さんの手を取った。

一瞬、強張りを感じたけど見上げれば、それ以上に緩んだ笑顔が咲いていた。

「よかったあ……っ！」

私も嬉しくて顔がほころぶ。

——ほころんだその表情のまま。

「じゃ、じゃあ早乙女さん」

早乙女さんに「なんだろう」と見られながら、私はスカートのポケットからスマホを取り出して……………イヤホンの片方を、早乙女さんに差し出した。

「レヴィアたんのは、鼻歌聞きませんか？」

「は？」と早乙女さんが眉間にしわを寄せた。

うあああああ~~~~~~~~~~~~~~~~~~~~!!

はずかしはずかしはづかつし!!!!!!

耳と頬とリンゴみたいに発火する。

三波くんの真似をしたのが間違いだった!

『寝言聞く?』を真似したのがミ

ステイクだったああ~~~~~~~~~~~~!!!!!!

後悔先に立たず……………あううう、きつと早乙女さんもドン引き——。

「k w s k」

「……………え? あ! そ、そのココ○○ドルの鼻歌らしくて。か、可愛いって評判で。……………どう、思う?」

「——うん、声が可愛くて透き通ってる。姫宮さんの歌声と似てる気がするけど……………」

「そ、そそそそんな訳ないじゃん! ——つ、あはははっ!」

早乙女さんの耳と私の耳をイヤホンコードが繋ぐ。

一つのスマホの画面に肩を並べて、ちよつとずつお話する。

家にメテオが落ちてから初めて、私はリア友けんぞくが一人出来た。

そうして夕陽で私たちの影が長くなるまで話し込んで。

「……あれ？ 三波くんは？」

ふと周りを見回したら、三波くんはどこにもいなかった。

第35話 メスガキD○D 配信なんだけどお♡（眷属の雑魚、みってるー!?）

「はぁーい、ということまで……ぜ、全国のざこ眷属見ってるー!? ヘブンズライブ所属の墮天使、宵月レヴィアちゃんですえーす♡今日はあ、最近妾のこと舐めてる貴様らにい！身の程を分からせていっっちゃうんだからねーっ！」

「コメント」

・は？

・は？

・なんだあてめえ？

・わからせなきや……わからせなきや

・おうおうガキがなんかほざいちよるわ

「こ、こわ……つくないもんね！ ふ、ふん！ 勘違いしないでよね！ 貴様らは妾の眷属なんだから！ い、いくら怖がらせても妾の方が主人なんだからねっ

「！」

「コメント」

- ・そこかしこに滲み出る良い子感
- ・ヤケクソ感、草
- ・勘違いしないでよねって
- ・なんでツンデレみたいになってんの
- ・微妙にキャラ古っ

「そんなことないもおん!! 古くないもおん!! アーもう怒った怒っちゃったもんね妾。そんなざこ眷属達には——D○Dで罰を下してやろうぞお!!」

デッドバ○イデ○ライト、略してDb○。

人間役のプレイヤー4人と、殺人鬼役のプレイヤー1人がステージ内で鬼ごっこするホラーゲーム。人間役側は脱出すれば勝ち、殺人鬼側は皆殺しすれば勝ち。

そしてこのゲームはあ! 殺人鬼は絶対に倒されないのだあ!

「ふぁーはっはっは! 覚悟してねえ? ざこ眷属おじさん達い! さあ、救済を求めし慟哭の声を上げてみせよお!! !! !!」

『D○D』メスガキになって眷属おじさんをわからせてあ・げ・る♡ ざあー
 こお!』——開始!

「ねえねえねえねえねえだめだめだめだめだめ!! 行かないで、ねえ、
 みんな行かないで一緒にいてよレヴィアと一緒にああああああああ!! !!

!!」

「コメント」

・Excellent!!

・眷属おじさん達、ナイスウ!

・その修理の腕前に痺れる憧れるう!

・あれ……レヴィアたん、いた?

・さっきのステージ、バグですね。殺人鬼キラいなかったもん

・ええ〜そんな訳……ほんとだあ、墮天使トウシいないやあ

「い・た・よ!! !! !! 妾メカいたよ!! ほんとだもん! 殺人鬼キラいたもおお

おおん!!」

くやしくやしくやしくやしくやしい!

バンバンバンバン！

「コメント」

・どこからか台パンの音が!?

・おかしいなあ？ 誰もいない筈なのになあああ？???

・いつも右下に可愛い堕天使いるのに、今日はいねえなあ!?

・h u u u ! 　こーわいよお！

・リアル怪奇現象だよお！

・初見です。誰もいない筈の配信画面から台パン聞こえるって本当ですか？

それは幽霊の仕業かもしれません！ 幽霊のお悩み相談はこちら（サイトリンク
添付）

「い・る・よお！ 私はここにいるよお！ いないことにしないでお願いだよお
お!! !!」

「コメント」

・聞こえない聞こえない

・おい堕天使ミュートになってんぞ

・一人称が『私』の墮天使なんぞ知らねえなあ!? !?

「くつつつそおおおおお!! 貴方達の血と悲鳴で存在証明だあ!! あ、プレ

イ終わった眷属はすぐ出てくださいね。ご了承ください」

あれ……………なんだろう？

逃げる眷属の背中を斬りつけたら、達成感で胸がすく。

吊るした眷属みんながもがいてると、「がんばれ♡ がんばれ♡」って声を掛けてずっ

と見守りたくなる。

投げナイフでちよつとずつちよつとずつ傷つけながら「ざーこ♡ ざーこ♡」っ

て罵倒して追いかけるの、すっごく解放感。

結果的に逃げられても良いの、負けても良いの。

私が K I L L する度に、コメント欄では「ナイス」って言うてくれたり、「くそう」っ
て言うてくれる。

私が試合に勝ったり負けたりする度に、眷属は褒めたり煽ったりして。

そうして私は学校じゃ、クラスじゃ絶対言えないようなことを口にしまくる。

——— たのしいいい……………っ!

ぞくぞくお腹の奥が震えてきて、煽ってくる眷属おじさんがかわあいく思えてきて。

「ごめんねっ！ ごめんねっ！　ざこなんて言っつてごめんねっ！　おじさんだなんて言っつてごめんねっ！　眷属あつ！　妾、良い娘にするから!?　だから逃げないで？　置いてかないで？　——殺人鬼といっしょにいてえ???’」

「コメント」

- ・どけ！　俺はパパだぞ！
- ・なにやってんだよ店長お！
- ・パパ（店長）の大群が押し寄せている!?
- ・お○っこスマブラ以来、行方をくらませていた眷属《パパ》達が！
- ・集まっっていく！

・ねえもうこれメスガキじゃないよお

「あつ！　そうそう聞いて眷属あ！　妾ね！　今日友達できたよお！　リア友が一人い！　後ね！　チェンソーも振り回せるようになったのお——ほらあ!!

!!　!!」

唸るエンジン音が眷属^{ババ}の背中に突き立って、お腹を掻き混ぜる効果音が鳴る。

「コメント」

- ・そっかあ、すごいなあ
 - ・友達できて、よかったねえ
 - ・笑顔で切り裂かれていく眷属（パパ）達いいいい！！！！
 - ・つーか段々上手くなっていつてるの草
 - ・クソ強キャラの殺人鬼使ってるしwww
 - ・くくく、まだまだアドオンを使いこなせていないよ。がんばって
 - ・くくく、リア友できたんだね。おめでとう
 - ・くくく、今までポッチだったんだね。良かったね
- 「ありがとお！ 含みのある笑い方する眷属^{ババ}達い！ さて、次の試合は……」
- と、言いかけたところで配信PCから着信音が鳴る。ビィスコードの着信音だった……って、え？ 誰だろう？

眷属達に断りを入れてから、ティロンと通話に出た。

「こんばんはあ。旭日騎士^{ガーディアンス}団です。ヤンデレメンヘラ堕天使がチェンソーを振り

回していると通報が来たので、僕が降臨してきました——いやあんた何やっ
んねん」

「コメント」

- ・リエルんが来てくれたぞお——！
- ・旭日騎士団だあ！
- ・たすけてえ
- ・たすたすけてえ！
- ・お助けお！

リエル先輩の凸で、コメント欄の流れが加速した。

第36話 ヘブメン勢ぞろいで殺し合いー♡（おいなんか猫いんぞ?）

「ああ〜〜リエル先輩〜〜。お久しぶりですう」

「なんでロリボイスになってるのよ、貴女はあ!? コメント欄見えてます? 助けて、で溢れてるんですよ!?!」

「え? ちがうよ? 眷属パに遊パんでもらってたんだよ? ね、眷属パ? 助けてなんてそんなこと」

ダァンツ!!

強く台を叩いて、フフフッと笑みがこぼれる。

「言っていないよねえ?」

「…:うん。そうだね。無かった。助けてなんてコメントはなかった。はい、それではお邪魔しました。失礼しま〜す」

コメント

・ 帰るんかい W W W

・ おいしい、日和んじやねえ！

・ 仕事しろ、クソ雑魚天使い！

・ 騎士団の名折れだぞお！

・ 連行しろよお！

「はあああああ!? 雑魚じゃないし！ 僕、雑魚じゃないし！ 戦略的撤退だし

！ 決してこの墮天使手に負えねえって思ったわけじゃ」

「リエルせんぱあい、そんなこと言うなら妾とも一緒に遊びませんかあああ??

あは、あははは♪」

「——はっはっはっはっはっはっ、クレアあっ!! ステラママあ!! たすけて！

喰われる僕喰われちゃうよおやだよだよだよお————!!!」

かくて天使の過呼吸（祈り）は天に通じた。

ティロンティロンとサーバーに雷神と妖精が乗り込んできた。

「いねがあ!?! 生意気なメスガキはいねがあ!?! おへそ取っちゃうゾオオ♡」

「電鋸振り回す墮天使！ カー————っ！ 絵になるねえ！」

「わあい！ 先輩達が来てくれたあ！」

私は無邪気に喜ぶ。これで人間側が3人。

あと一人来てくれたら、ゲームが成立するんだけどなあ？

——ティロン。

「大きい○こには棘がある。どうもはじめましてこんキヤスです。個人勢V t u
berキヤスパーです」

「三味線にするね」

「うはあんっ、だめだよレヴィアたん！ それはえちちだよお！ 花魁墮天使に

三味線になったキヤスパーのキヤスパーをべんべんされるなんてえ！」

「今の一言でなんでそんな気色悪い未来を描けるの？」

ともかく、これで人数が揃った。

私は意気揚々とチェンソーを担いで、先輩達の背中を狙った！

「せなカーラーにぴったりらんらん！ ててん、てん、天使の！ はーねえ！」

「イヤァァァ！ みんなあ！ 助けてみんなあ！ 先輩に吊るされるう！」

「^{チャッ}匣やられたわね」

「まっつたく使えねえチャフ困チャフだなあ」

「とりまクレアさんとステラちゃんチャフは修理を。ほほおーいほいつ！ おい宵月い!? あっ間違えた、ぷよ月レヴィアあ？ どしたのかなあ!? こっちこいヨオ、脇腹ぶにぶにレーヴィアちゅああああああん!? !?!」

「キヤスパあああああああああああ!!!!!!」

倒れてるリエル先輩を放置して、私はチェンソーを振りかぶったあ！

ちよこまかとカーブを繰り返す淫乱猫お！

「あれ見えてるう!? 僕ちんのこと見えてるう!? あっ見えねえかあ！ ぷよぷよの腹で隠れて見えねえかあ!? !?!」

「太つてないもん!! そんなに太つてないもおおん!!」

ぶうんぶうんとチェンソーの駆動音が虚しく響く。どこ!? どこにいったの!? 狭い視界をキョロキョロ振り回してたら。

「よっしゃ行った行ったバカだバカだ」

「あ、ありがとキヤスパー……きゅんきゅんしちやった」

「はうあっ……!! 今夜——空チャフいてるぜ」

・ ついにレヴィアたんが言ったああ！

・ うんまあキツイよなあ……

・ クレア先輩ガチシヨック受けとる W W W W

・ キャスパーの煽るねえ!! 燃やそう(炎)

・ 墮天使への切れ味キレッキレ(炎刀)

・ 何気にお○っコス○ブラ以来の対決

言い合って。

煽って煽り返して。

バカなこと言ってド突き合う。

リスナーとも、Vの先輩達とも。

私は今日、はじめてちゃんと——配信が楽しいと、そう感じた。

第37話 墮天使の裏側生活音（オフの姫宮家のことですよ）

「それでは眷属達よ、今宵はここまで。グッバイ墮天フォーレン〜〜」

配信終了の挨拶を言って、しばらくオフで先輩達と話した後、ふすまを開ける。四つん這いで押し入れから出てきたら、伽夜ちゃんが目を細めて微笑んだ。

「おつかれさま——お姉ちゃん」

加湿器のついた部屋で伽夜ちゃんを作ってくれてた葛湯を飲む。喉にとろりと流れて、ホウッと暖かな息を吐く。

「いつもありがとう、伽夜ちゃん。……おいしい」

「どおいたしまして〜。飲み終わったらすぐ布団入ってね。喉と体冷えないうちに」
「あ、はは……配信するようになってから、至れり尽くせりだねえ」

申し訳ないけどいつも甘えてしまう。

はああああ配信終わりのお布団さいこお〜♡

溶・け・て・しまいそう〜。

「気にしないでよ……今まではあたしの方がそうだったから」

「……伽夜ちゃん？」

「電気消すよ」

伽夜ちゃんはすぐに家の電気を消す。私の配信が終わったらすぐに就寝。

これが最近の姫宮家の習慣になっていた。電気代節約節約………うん？

暗闇の中でもぞもぞと布団がうごめく。

布団に潜り込んできた伽夜ちゃんがばあと顔を出した。

間近に迫った妹に思わず笑みがこぼれる。

「またあ？」

「またですっ」

ひしっとくっついてくる伽夜ちゃん。

寝返りを打って、私も伽夜ちゃんと向き合う。

おでおことおでおこをくっつけて。

目を閉じて……心に浮かんだことを、そのまま口にする。

「——メスガキできてたかなあ~~~~~?????」

「できてたできてた！ 行かないでって泣きつくところゾクゾクしたもん！」

「大丈夫？ それ伽夜ちゃんの癖にだけ刺さってない？」

今日の配信の内容が頭の中をよぎって、私はたまらず唸る。

目蓋をきつく閉じながら、もわもわと浮かぶ不安を吐き出す。

「ううう、大丈夫だったかなあ？」

リエル先輩カモだから、ついKILLし過ぎちゃったけど怒ってないかなあ？

ステラママが話題振ってくれたのに、間が空いて上手く返せなかった。

クレア先輩のネタが分かんないよお、多分漫画のネタなんだろうけど」

「うん。うん。それで？」

「そもそも眷属はパパじゃないし！ 私のお父さんは姫宮権蔵だし！」

なんで私いざって時『パパ』って単語が飛び出すの!? それもこれも店長のせ

いだ、きっとそうだ！」

「そっか。そっか。それで？」

「……上手く喋れてたかな？ ちゃんと楽しんでもらえたかな？ 嫌われて……」

ないかな？」

——ずつと心の底に沈んでいる不安を口にしたタイミングで、伽夜ちゃんが私の頭を撫でた。

ゆっくり、はつきりと伽夜ちゃんが声を出す。

「大丈夫。ちゃんと出来たよ。お姉ちゃんは、ちゃんとやれてるよ」

掛けられた言葉と髪の上から伝わる温もりで、不安で唸りたい気持ちがちよっぴとずつ収まっていく。

そろそろと目蓋を開けると、伽夜ちゃんの柔らかな苦笑が見えた。

「——いつもごめんね」

「——ほんと。いつもだね」

こうして眠たくなるまで妹と話してる時間は、静かで、心地よくて、好き。でも、姉としては少し情けないのもまた事実で……。

「うう、甘えてくるのは伽夜ちゃんの方なのに……最後はいつつもこうなる」

「気に入らないんだよ、お姉ちゃんは。でも今日は出尽くすの早かったね。バイト三昧の時はもっともって言ったのに……配信、楽しかったんでしょ？」

「ん……んー……そう、だね。思ったより楽しかった」

普段じゃ絶対言わないようなこと言いまくって。

眷属みんなも先輩達も応えてきて。

——今まで、家族以外の人とこんな風に話せたこと、あったかなあ？

応えるように伽夜ちゃんが、私の胸に顔を埋めた。

「良かったね、お姉ちゃん。……ほんとう、良かった」

少しだけ、じんわりと、私のパジャマに暖かな染みができる。

ハッと息を呑んだ。

私は、私にくっついて小さくなる妹の背を擦って、頭を撫でた。

「大丈夫だよ。離れないよ……もう大丈夫だよ」

暗闇に慣れた目で、時計を見る。

帰ってくるなら、そろそろお父さんとお母さんが帰ってくる時間だった。

私も、レヴィアになる前は、お父さん達と同じくらいの時間に帰ってきてたなあ。

しばらく妹の背中に手を当てていると、すうすうと手の平に寝息を感じた。

私は目蓋を閉じた。

もう伽夜ちゃんを、一人ぼっちで寝かせたくなかった。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい!!」

いつも配信部屋神入れで大声出してたから、申し訳なさで胸がいっぱいになる。

私は壁に口をくつつつけて謝ってから、飛び跳ねてる伽夜ちゃんの後頭部を掴んで床に押し付けた。

「ぐはああああああああ!! !!」

「おっきい声出しちゃ駄目え!! なに!? どうしたの急に!? なにかあつ」

突きつけられたスマホの画面に、言葉を奪われる。

それは【宵月レヴィア】のYUTUBEチャンネル。

その登録者数が——6桁に、なっていた。

「うそ」

「銀の盾……っ!! 貰えるよおっ!! ——うっ、うううわああああやった!

やったああ~~~~~!!!!」

こぼれちゃいそうなくらいおっきな伽夜ちゃんの瞳から、大粒の涙がこぼれる。

ああ……伽夜ちゃんがこんなに大泣きしてるの久しぶりだなあ。

ぼうっとした頭でそんなことを考えながら、10万人と表示された墮天使のチャ

ンネルを見つめる。

「……?」

指先が勝手に震えてる。

胸にまで伝わって、熱く震える。

あっ、と頭に理解が追いついた時——じわりと世界が暖かくぼやけた。
壁がドンドン鳴いてるけど、全然気にならなかった。

「お姉ちゃん！ 今日配信は好きなのやって良いよ！」

「うええ!? す、好きなの!?!」

隣を歩く伽夜ちゃんの方へ振り向くと、朝日を浴びて更にキラキラした笑顔を浮かべていた。

今までの配信の企画は、ほとんど伽夜ちゃんが決めてきた。私は色んな単語（メスガキとか）を理解するのに必死でミーティング||質問会という有り様。

「10万人記念だからね♪ それにそろそろお姉ちゃんも企画考えられるようになってもらわないと困るし」

「あい。ホントにすみません。おっしゃる通りです」

妹が敏腕マネージャー過ぎる件について、私は己の不甲斐なさを謝罪しました。それにしても……好きなこと、かあ。——Road in ng: Road in

g……。

「な、なにすれば良いと思う？」

「さっきの謝罪取り消せよ、姉」

うっぐう！ 伽夜ちゃんのキツイ口調が胸に刺さる。

見上げてるのに見下げ果てた妹の目に心折れそうになる。伽夜ちゃんは呆れたように息をついて、

「自分の好きなことやれば良いんだよ。無いの？」

「う……な、無いわけじゃ。ただ……」

ただ好きなことをやるだけじゃ、それは、私が満足するだけで終わってしまう。記念だから、嬉しいことだからこそ……眷属みんなと一緒に楽しみたい。

私だけが「楽しい」「好き」ってだけで——終わらせたくない。

そんな感じに伝えたら、伽夜ちゃんは首を傾げて、あっけらかんと言いつつ放った。

「好きな人の、好きなものを知るのって、普通に楽しいことだと思っただけ？」

「……そういうものなの？」

「そういうもんだよ。現にいるじゃん、おねえちゃんの周りに。なんだっけ、なんかほらテニスしてた……」

「三波くんと早乙女さん？」

「そう、それ」

「伽夜ちゃん。あの衝撃のテニスラリーをその程度にしか覚えてないの!？」

「あたし、興味ないから。おねえちゃん以外のことに」

何ら一切の躊躇なく言い切った!？」

自分がそのテニスの審判もしてたのに……シスコン恐るべし。

「あの二人だって、自分の好きなものベラベラ長くくっっちゃべってたじゃん。でもおねえちゃん、別にそれで嫌な思っしてないでしょ？」

「し……してない。したことない」

「なら、そういうことなんだよ」

伽夜ちゃんはそう微笑みながら、私の背中を優しく擦った。ベッドの中で私が伽

夜ちゃんにしている時のように。撫で方が私そっくりだった。

「好きな……もの」

口の中で、誰にも聞こえないように、つぶやく。

好きなものを語る。

そう考えると真っ先に思い浮かぶのは——三波くんだ。

毎日毎日、お昼休みの、校舎裏で、宵月レヴィアについて推し語りして。

変態だなあって思ったけど、なんならちよつと引いてたけども………不思議なことにこうして思い返すと「楽しかった」と感じる自分がいた。

『俺はありのままの宵月レヴィアが大好きだ！ だからレヴィアたんには、自分のやりたいことをやりまくって欲しい！』

彼はいつだって——自分の好きなものにまっすぐだった。足を止めた。

伽夜ちゃんに追い越された。

胸に手を当てた。

私の好きなものは………深く深く問いかける。

問いかけて——まっすぐ向き合った。

「う、た」

「うん？」

先を歩いていた伽夜ちゃんが首を傾げて振り返った。

恥ずかしくて、居たたまれなくて顔を俯かせる。

心細さでおぼつかなくなってる足元が見える。知ってはいたけど、好きなことを言うのって、やっぱり怖かった。

それでも顔を引っ張り上げて、きちんと言葉にして言う。

「歌枠、なんて……どうかな？」

頬が熱かった。

やっぱり恥ずかしくて、視線を少し反らした。

口に出した途端、やっぱり脳裏に掠める、親睦会のカラオケ。

あの時の、自分だけ浮いてしまった空気を思い出して、ぞわっと鳥肌が立つ。

「あつ、あの！ そりゃ、下手だよ!! 友達無くすレベルで下手! とてもじゃ

ないけど人に聞かせるレベルじゃない。それは分かってるんだよ! でも」

らしくないって、また言われるかもしれない。

それでも私は、私の好きなことは——変わらないから。

「下手でも……好きだから」

歌うのが好き。それが私の決めた『好きなこと』。

それでもやっぱり不安で、私は伽夜ちゃんの反応をちらりと伺った。

伽夜ちゃんはニマニマと意地悪そうに笑っていた。

「良いんじゃない。記念歌枠。音源探しておくから、歌いたい曲だけ後で教えて」

「あっ……うん」

テキパキと段取りの相談を決めていく伽夜ちゃん。

そうして校門に着く頃には、あらかたの段取りはまとめられていた。

「じゃあ、今夜は歌枠ね！ あたし押入れの防音壁のチェックと改良考えるから、

帰る時間ずれるかも！」

「お、遅くならないようにね」

すたすたと行ってしまう妹の背中に声を掛けたけど、届いているか不安だった。

決めるべきことは決めて、言うべきことだけは言って、行ってしまった……有能

だなあ。

でも伽夜ちゃんが動いたということは、もう今夜の配信は歌枠なのは確かだった。

「うううう、やっぱり緊張するなあ……」

バクバクした心臓を抑えながら、教室へ向かう。

でも、どうしてだろう。緊張してるのに——胸の奥が弾んで仕方ない。

頬が緩んで、鼻歌を歌ってしまう。

スキップはだめ、廊下ではだめ、恥ずかし過ぎる。

そうしてる内に教室の前に着いた。私はいつものように度無しメガネを掛けて、教室の扉を開けた。

「ねえこれってさあ」「あゝなにこういうの好きなの?」「ちがうってそうじゃなくて」「ちよいちよいみんなこれ聞いてみ」「なに?」「なんだよ、なんかあんの」「あゝそういうのあんまり見なくて。ごめんね」「ちがうの、声。声聞いて」

「10万ってすごいな」「そこそこでしょ」「大したことない」「ぶってるねえ」「こういうのに騙されるんだろうね」「伸び方変じゃね?」「登録者何人が買ってるんじゃないの」「で、これがどうかしたの」

「声よく聞いてみるって」「何が言いたいの」「わからん」「あー確かにあんまり喋らないからね、あの子」「でもさ」

「なに」「なんなの」「なんだよ」

「てかさ」「これさ」

「え？」

「あれ」

「あっ」

「たしかに」

クラスの空気がざわついていた。

首筋に悪寒が走って、「おはよう」と言うのを止めた。

いつも通り、別々のグループで喋ってるのに、今日だけはどのグループも同じことを話してるみたいで。

何をどう話してるかは知らないけど、知りたくないけど。

とにかく気付かれないように、息をひそめながら席に座って――頭上に
人影が落ちてきた。

顔を上げたら、女の子が私の席のまん前に立っていた。

昨日、私に課題を写させてもらえるよう頼んできた子だった。

「ねえ、姫宮さん。これ知ってる？」

突きつけられたスマホに映る、漆黒の堕天使。

その YUTUBE チャンネル。

私は。

ゆっくり。

首を。

横に振った。

「し……し……し……しらな」

声を出した、その瞬間。

——じっ、と一斉に視線が突き刺さった。

第39話 身バレ事変（——心に背いた、声）

わいわいと、数人の女子達が私の周りに集まる。

ざわざわと、数人の男子達が遠巻きに人だかりを眺める。

人影に囲まれて、暗くなった視界の中……正面にあるスマホの画面だけが白く浮かび上がっていた。

「この、よ……なんて読むのこれ。まあ、レヴィア？　って配信者の声、声がね？　姫宮さんと似てるなあ……って皆で話してたんだあ」

私にスマホを見せてきた女の子が、笑顔で噂の話題を振ってきた。そしたら私を囲んでる女子達が次々と曖昧な返事で遠回しに肯定する。

曖昧な返事も、この人だからの中だと反響して、まるでクラスの総意のように聞こえてくる。

でも、それを笑いながら否定する声が出てきた。

「いやいやいや、でもさあ、ありえないっしょお？　だって姫宮さんだよ？　配信なんて無理でしょ？　ごめんねえ、こいつが突っ走っちゃって」

配

「ええうちよつとつ、やめてよお。あたしが問い詰めてるみたいじゃあん」
私の前で、女子二人がきゃいきゃいとしゃいでいる。

それに合わせて周りの女子達も盛り上がってる風を作っていく。

私もほおを緩めて、微笑みを作る。

「だいたい、そしたら姫宮さんがこれ言ってることになるんだよお？」

——え。

誰が言ったのか分からなかった。

けど笑い混じりの口調のまま、囲んでる誰かがスマホをタップして。

『ふぁーはっはっは！ 待たせたな眷属達！ さあ、邂逅を告げし関の声を上げようぞ！ こんレビい！』

大音量で、それは流れた。

「きゃあああああああー！ー！ やっっぱあーい！」

「はっず！ はっずう〜〜！」

「これアレじゃん！ 電車でイヤホン抜けた時のアレじゃんアハハハハッ!!」
女子達の黄色い笑い声が、直前の墮天使よりも大きく響き渡る。

——ぎゅうっと、奥歯を噛んだ。

赤くなった顔を伏せて、垂れ落ちた髪で隠す。

椅子を前に寄せて、スカートの端を握りしめた手を机の裏側に隠す。

「あつ、ごめん姫宮さん。うるさかったよね？」

「……………ううん、へいき」

顔を、上げなきや。笑わなきや。合わせな、きや。

まぶたが熱いのを悟られないように、瞳が揺れてるのを気付かれないように。

「お、面白い、よ？」

「ああ〜〜〜そうなんだあ〜〜〜！ よかったあ、あんた達うるさすぎって思

われたらどうしよっかなあって！」

また笑顔が咲き誇る。黄色い花畑が咲き誇る。

私も、わら、って。

「えへ……へへ」

「他にもさあ、このレヴィアって子ヤバくてさあ。なんか他の配信者とのコラボでもやらしい目に遭ってたりさあ、はっず！ むりむり、あたしあんなのできない

よお」

「……あ、はは」

「結局さあ、こういうのって、見た目だけイラストの配信者じゃん。イラスト越しにちやほやされて虚しくならないのかなあ？ ……それで満足する方も、持ち上げる方もちよつと気持ち悪いよね〜。ねえ？ そう思うよねえ姫宮さん？」

視線が刺さる。
肌が粟立つ。

びくびく肩が震える。

だ、め。なにか、いわないと。でないと、また、私だけ、浮いて……………。

「そ、そうだね……きもちわるい、ね」

「やー……っぱりい。そうだよねえ！」

「うん、なんか安心したわあ。姫宮さんらしい」

「あつは、姫宮さんがV t u b e rだなんて。そんなのらしくないもんねえ〜」

「ごめんね姫宮さん、誤解して。またはなそーねー」
思い思いに女子達が私に声を掛けていって、自分の席に、グループに戻っていく。

——
今、私、なんて言った？

いつものお昼休み、いつもの校舎裏に、私は行けなかった。

第40話 記念歌配信かい——ッ（墮天使は砕け散った）

「あっ、お姉ちゃん!? 何してたの、もう配信始まっちゃうよ!?!」

「……………うん」

「? とにかく! 遅いから勝手にサムネと配信画面作って枠立てといたからね! 後は開始ボタン押すだけだから。それじゃ——楽しんでね!」

遅れたのに。迷惑かけたのに。

伽夜ちゃんはニツと笑って、押入れの扉を閉めた。

PC画面には、配信が始まる前の、待機画面のアニメーションがループで流れていた。

「待機コメント」

・きちゃ!

・きちゃ!

・きちゃ♡

・きちゃああああああああああ

・登録者10万人おめでとうございます！

・キタアアアアア

「……あははっ。きちゃ、ってなあに？　なんか響きがかわいい」

どんどん流れてくる待機コメントに目を細めて、微笑む。

コメントの一つ一つから、喜んでくれることが伝わってきて……。

『イラスト越しにちやほやされて虚しくならないのかなあ？』

——びしっ、と頭の中から変な音が鳴った。

「……はじめな、きゃ」

うた。

歌を、うたわなきゃ。

下手かもしれないけど、これが私の、好きなことだから。私の好きなものを、眷属みんなに知って欲しいから。

配信開始ボタンをクリック。

ヘブンズライブ専用の配信ソフトとYUTUBEが接続されて————パアッと頬を持ち上げてみせる。

「け、眷属のみんな……っ……あつ、こ、今宵、集まっていたただき大儀である。こんレビ……お、音は大丈夫か？」

「コメント」

・こんレビー！

・こんレビッ

・こんレビ！

・大丈夫！

・パーフェクトだ、墮天使

「そ、それは……よかった……え、と。じゅっ、10万人記念ということ。きよ今日は初めて歌枠をしていこうとお、もう」

「コメント」

・おめでとおおおおお！

・10万人おめでとー！

・いえー！いい！ ギールティ！！

・ひゃあー、めでてえてえぞお

・レヴィアさんの歌声ずっと楽しみだったー!

・あまりハジケるなよ、ポッチに見えるぞ

「あ、はは。うるさいぞおー、妾は孤高の墮天使故に。ハジケる？ 総スカン？
 なんのことやら……ふ、ふあっはっはっはっ」

「コメント」

・？

・？

・だいじょうぶ？

・大丈夫ですか？

びくっ、とマウスに添えていた指が跳ねる。

「な……なにが？ そ、そんな憂慮よりも鬨の声を上げよ、眷属達。ほれ、ほれっ」
 流れを、流れを変えなきゃ。

コメント欄……の流れ、を——。

「コメント」

・なんか

・声が変わ

・沈んでる

・震えてる

・落ち込んでる？

・だいじょうぶ？

・無理してない？

・レヴィアさんのペースで良いので

・好きなこととして

・一緒に楽しみたいんやから

・絶対に無理しないでほしい

——あ。

止まらない。

流れが止まらない。

温かい。

初めての配信から、なんにも、変わってない。

眷属みんなは——温かくて。

なのに。

『そ、そうだね……きもちわるい、ね』

ぱきり、と温かな亀裂が胸の奥から拡がった。

「——ごめん、なさ、い」

はくはくと口がわななく。

歯がカタカタと鳴る。

「ごめつ、なさ…… わたつ、わた、し……なん、でえ……っ！ えつ、なつ、ごめんなさい！ ちがうのに……いっ！ そんな、ことおもつ、てない……のに」

涙が、熱くて、喉をふさぐ。掌が、冷たくて、胸を握り潰す。

一人は平気だった。

ただ、ただ……弾かれるのが怖かった。

いないことにされるのが嫌だった。

仲良くなんてなくて良い。

カーストの低い娘でも良い。

便利な人扱いでも良いから。

ただ存在してもいいって空気が欲しかった。

そのためだけに、私は、この人達を、眷属《みんな》を——否定した。

この、声で。

コメント欄がすぐく流れてる。

もう、だめだ。こんな、とこ、見せて、せっかく、みんな、おめでとうって。

「ご……！……っ！」

目を見開く。

喉に手を当てて、声を絞り出す。

——声ですらない、掠れ切った音がひゅうひゅう飛び出るだけだった。

押入れの戸が勢いよく開いて、後ろから伸びた手が配信を切断した。

「お姉ちゃん!?　　ねえ、お姉ちゃん!!　　どうしたの!?　　ねえってばあ!!」
伽夜ちゃんが私の背中を擦りながら、目に涙をにじませる。
私は、声が出なくなつた。

過食気味の惰眠を貪る（——どうして誰も○めてくれないの）

「それじゃあお姉ちゃん……行ってきます」

沈んだ声がした後に、ボタンと空っぽな音が部屋の空気を震わせた。

布団の中でその震えを感じて、私は更に深く潜り込んだ。

それでも薄ぼんやり明るくて、口の中に苦みが滲んだ。ぴったりと隙間を埋めて、吐息がこもった温い暗闇の中で、小さく丸まった。

膝からつま先まで丸めて、胸元に両手を寄せて。

唇を噛むのと同じくらいの強さで、目蓋をきつく閉じる。

のしかかる温もりと眠気で、何もかもを鈍らせる。

あの配信の後——この暗闇からまともに出れていない。

「~~~~~」

眠気に沈む前の、この数分が、身をよじりたくなるくらい、きらいだ。

だいきらいだ。

しかも回数を重ねるごとに、時間が掛かる。

……当たり前か。疲れてないんだから。

それでも横になってたらウトウトするこの感じに救われている。

睡眠欲ってすごいね。

なんだか、あれだよね、お腹が空いてなくても冷蔵庫を開けちゃう感じに似て

誰に対して話し掛けてるの？

「~~~~っ！~~~~~~~~あっ」

何も出てこなかった喉から、ボロボロの音が吐き出てきた。

『そ、そうだね……きもちわるい、ね』

髪を掴む。歯を噛みしめて、もっともっと小さく丸まる。

——なさいっ、ごめんなさいごめんなさいごめんなさいっ！

自分が何を口にしたのかも忘れて、また頭の中でお話してる。

みんな眷属はなしと雑談している時みたいに。

「ふっ——うっ——うううう~~~~~~~~~~~~っ！」

私は、私を許せない……っ！

唸りが、涙が、嗚咽が、温い闇の中を熱く、息苦しくした。

鈍った頭の中が茹だって、眠気が完全に醒めた。

「」

枕の下に手を潜らせてスマホを取る。

ぎゅうううと強く握りしめると、電源ボタンが長押しされた。ブルーライトが布団の中を明るくする。

そうして電源が点いた途端——連続した通知音が鳴り響いた。

「ビスコードサーバー」

クレア「レヴィアちゃんおは☆ 喉、大丈夫？ 気にせず、この機会にいっっ

ぱい休んじゃいなー！ 治ったらオフで温泉いきましようよ！ また浴衣でイチャ

イ

チャしようねっ☆ チュッ♡」

ステラ「ママです。お元気ですか？ しつかり療養してくださいね。具体的に

はお布団でごろごろ食っちゃ寝しなさいね。娘の成長した腹すがたが楽しみです。

PS。ぽよ月レヴィアもまたオレの癖に刺さるからねえ！ 今度また吸ってやるから早く治せえ！ いや？ あんたが家に来るなら話早いがね？」

「B i n e」

早乙女さん「姫宮さん大丈夫今日は学校来るのいやごめんなさい無理言いました休んで好きに休んで無理しないで自分のペースで来てくださあああああああああああんの脳スカマン臭メス豚が精肉して吊るすぞってあああああ誤爆ったちがうの姫宮さんに送るつもりじゃとにかく気にしないでね、あの豚共の鳴き声なんかあ！」
 ビイスコードにも、B I N Eにも、毎日メッセージが来ていた。

【宵月レヴィア】は今、配信活動を不定期で休止していた。

表向きは喉の治療として、既にB w i t t e rでも発表している。

覗いてみると、みんな——みんな眷属、一人一人、それぞれの言葉で心配してくれて、励ましてくれていて。

クレア先輩達も、早乙女さんも、みんな心配してくれて、毎日メッセージを送ってくれて。

「じ………！っ！」

優しくて温かい言葉が、真綿のように胸の中と喉を締め付けた。

スマホを胸に抱きしめる。

あの時の、私を囲んだ女子達は、友達でも何でもない。

嫌われたって良い筈なのに。

そんな相手のために私は……【宵月レヴィア】を否定した。

墮天使になって出会えた人達も、墮天使のことを好きになってくれた人達も、が
んばってきた自分でさえ、ぜんぶ否定した。

——気持ち悪いのは………私だ。

ティロンティロン♪ ティロンティロン♪

胸の中のスマホが着信音で震えた。

この音………ビィスコードから。通話相手を確認めた。

——リエル、先輩？

どうしてって思った。

だって今、私、声出ないから。

通話に出れたとしても返事すらできないのに……着信は切れない。

いつまでも、いつまでも鳴り続けている。

布団の暗闇の中、私は通話ボタンをタップした。

「姫宮ちゃん、今から会える？ 会えるならメッセージで送って」

駆け込み乗車みたいな、急いだ声音が私の耳に駆け込んできた。

目を丸めてる間に、リエル……天海先輩は私に呼びかけ続ける。

「今、姫宮ちゃん、ほとんど一人でしょ？ ずっと一人は駄目だよ！ 分かるの、

わたし覚えがあるから！ やっぱり——こういう時は直接会って話した方が良い

よ！」

男の人とは思えない透明で綺麗な声が、必死さに塗れてる。

その必死さの後ろにある思いやりに、胸の奥が熱くなった。

「顔、見せて、会おう。会って話そ？ 姫宮ちゃん」

パジャマ姿のまま、家から飛び出す。

外はいつの間にか、夕陽に暮れていた。

329 過食気味の惰眠を貪る（——どうして誰も〇めてくれないの）

姫宮紗夜という『魂』

待ち合わせ場所が駅前になった時は、少し怖かった。

今の夕方の時間帯は会社帰りのサラリーマンや学校帰りの学生と多くすれ違う。

——会いたくない……っ！

視界に学校の制服が入る度に、胸の中が曇る。

すれ違っても声を掛けられないように、走っていく。

ダンツと強く一步を踏みつけて、ブレーキをかける。

改札前に着いたから。

息が弾んで、赤くなった顔で改札を見回す。

スーツスーツ制服スーツ制服集団、スーツと、どんどん視線を移していくと——

——縦縞ハイネックの天海先輩が見えた。

先輩もしきりに周りを見回していたけど、ふと私と目が合った。

速足でどこか駆け寄ってくる先輩の姿に、私はくしゃくしゃに顔を歪めた。

「姫宮ちゃん！」

駆け寄った勢いのまま、天海先輩は私を抱きしめた。

私は先輩の肩に顔を埋めて、きゅっと抱きついた。

香水の香りが鼻先を撫でた。

「吐き出しちゃいな。全部聞くから。一つ、一つ」

芯が通ってるのにふわふわした、天使の羽みたいな声が、私の耳元で紡がれた。
ああ……だめ。だめなのに——こらえきれなかった。

天海先輩の肩が雨に降られたかのように、濡れてしまった。

「ここがわたしの家。そういえば初めて人上げるわね」

ここって……っ。

到着した場所は、駅からそう遠くないワンルームマンションだった。

天海先輩って最寄り駅、私と同じなんだ……!?

やがて目的の階について、先輩が「いらっしやい」と鍵を開けて招いた。『おじや
まします』と言う意味も兼ねて、私は頭を下げて入らせてもらった。

配信では何度も顔を合わせて話したけれど……家にお呼ばれするのは、やっぱり

緊張する。

先輩の三步後ろを付いて行って——天海先輩の自室が、目の前に広がった。青や紺色がベースになったその部屋は、世間一般的に思い浮かべることが出来る普通の男性の部屋だった。

あれ……………意外だ。

女の子より女の子してる先輩のことだから、部屋もそうだと思っていた。

きよろきよろする私の表情で分かったのか、天海先輩は返答した。

「ああ親が来るから、その時のためにこうしてるんだ。姫宮ちゃんが想像してるのは……………こっちの方じゃない？」

そう言って、先輩はクローゼットを開け放った。

そこには、一着一着が店頭に並べるほど、手入れの行き届いた可愛くておしゃれな服が揃えられていた。

息を呑む横で、先輩は皮肉るように肩をすくめていた。

「親には言っていないからさあ——これが『わたしらしさ』だって」

そう言った天海先輩の横顔が……………悲しそうだったから。

私は先輩の袖をつまんだ。

先輩は一瞬、目を丸めて……黙って私の手を取った。

——上手く伝えられるか不安だけど。

私は一つ、一つ、今までのことをビースコードのメッセージで書いていった。

高校1年生の頃は、まだ普通だったんです。

朝のホームルーム前、お昼休みに放課後、一人二人の友人とずっとお喋りしてても隕石が降ってから、家はめっちゃくちゃで。私も必死にバイトして。

気付けば1年生の頃の友達とは、疎遠になっていました。

そのまま2年生になって、でも忙しさは変わらなくて。

つながりが欲しかった。話せる相手が欲しかった。

だからクラスデビューは成功させなきゃって、親睦会カラオケを全力で歌いました。ハジ

け過ぎて総スカン喰らいました。

放課後バイト三昧なのも変わらなくて、気付けば——1人でした。

1人なのを悟られたくなくて、寝てるふりをするのが辛かった。

トイレに落ち着きを感じてる自分が虚しかった。

昼休み、ひたすら一人で学校の中をブラつくのは、嫌だった。

……せめて。

クラスの中に居させて欲しかった。

教室の中に居させて欲しかった。

だから、『姫宮さんらしさ』を突き詰めた。

度無しメガネを掛けて、読みもしない本を開いて、目立たず小さく縮こまって、頼み事を断らないことで、そういう立ち位置カーストに納まろうとしたんです。

そうしてやっと私は——教室に存在いるすることが出来たんです。

ビスコードに送った長い長い私の告白を、天海先輩はじっと静かに読んでいた。読んでくれていた。

会いたい人は、誰ですか？

ビィスコードに送った長い私の告白を、天海先輩はじつと静かに読んでいた。膝の上に置いた両手が震える。

人にこんなことまで話したの、初めてだったから。

「——わたしね、物心ついた時から『こう』でさ」

……………え？

何のことか分からなくて瞬きしたら、天海先輩は親指で自分の背後を指差してた。指の先には、可愛い服がたくさん詰まったクローゼット。

「服が好き、化粧が好き、アクセサリーが好き。強そうよりも可愛い、カッコ良いよりも綺麗なものが好き。でもね、親もみんなもこう言うんだー。」

『そんなの天海くんらしくないよ』って」

私、びっくりした。

だって、違うところはたくさんあるけど、その掛けられた言葉は——私のことにもやって来た言葉だったから。

天海先輩は唐突に仰け反って、天井を仰いで笑った。

「だからびっくりしちゃった！」

だって学校の過ごし方が中高生のわたしなんだもん！ 昼休み、教室に居づらいの分かるなー、それで学校うろついてたら自然と図書室に行っちゃうの。本読まないのに」

っ！！！！

わかります！

思わず声に出した、と思つてたらハクハクと無音に喘いでいただけだった。私はふんすふんすと息を荒くして、速攻でフリック入力していく。

胸に渦巻く共感をメッセージに変えたら、天海先輩は「あはっ」と吹き出した。「そうそう、そのせいで『本好き』ってレッテル貼られる時なんか否定しづらいのよ！ 図書室行ってるしなー……って！」

『そうなんです！ それに何故か【本好き】ってことにしたら、周りの理解が得やすく……最後は図書委員任されるんですよね』

「本好きだからイージャンってね！ ほんとあれなんなんだろうねー？」

私がビィスコードにメッセージを送って。

それを読んで天海先輩が話して。

デジタルな筆談を交えても、天海先輩は嫌な顔一つせず談笑してくれた。

夕陽が地平線を染め上げて、先輩の部屋と私たちの横顔を照らした。

「だからね。すごく分かるよ。全部は無理だけど、わかる」

天海先輩が手を伸ばすのを見て、私はスマホをテーブルに置いた。テーブルの上で先輩の手がそっと私の手の甲に触れる。

「ハブられるのは怖いよ。怖くて周りに合わせちゃうなんて当たり前だよ。だから

—— 姫宮ちゃんは悪くないよ」

先輩の手が、私の手を強く握りしめた。

スマホで返信できないから……私はふるふると首を横に振る。

そんな私に、先輩は柔らかな眼差しを向けてくれて。

「わたしもね、ずっと怖かった。女の子みたいに、綺麗に、可愛くなりたかった。

でも誰もそんなの認めてくれなかった。—— 【旭日リエル】 になるまでは」

柔らかな眼差しが、懐かしそうに細まる。

胸の奥に閉じ込めた、宝物のような嬉しさを口にする。

「へブンズライブに入れて、V t u b e r になって。クレアやステラ、ご主人様達と出会えた。みんな、『女の子』のわたしを受け入れてくれた」

……受け入れて。

私を、【宵月レヴィア】を、受け入れてくれたのは。

「まあでも、姫宮ちゃんを囲んだその子達からすれば、わたしって本当は男なのに、ガワで女の子のフリをして、チャホヤされてるだけなのかも」

「——っ！」

ちがう……ぜったいちがう！

前のめりにそう言おうとしたら、私の鼻を先輩がつついた。

「わたしが言いたいことはね？　今、姫宮ちゃんが言おうとしてくれたこと……同じなんだよ？」

私の手をそっと包んで、ゆっくりと、まっすぐに、声を掛けてくれた。

——【旭日リエル】の魂は、可愛くて綺麗で……優しい女の子そのものだった。

「大丈夫だよ。姫宮ちゃんは、眷属のみんなを否定なんてしてないよ。むしろごく大切に想ってる。姫宮ちゃんの想いは、ぜったい眷属のみんなに伝わってるよ」肩を震わせて鼻をすすりながら、私は声になってない不安を吐き出す。

——そう、かなあ？

本当に……そうなの、かなあ？

そしたら、ガタリと天海先輩が椅子から立った。

立って、テーブルの向こう側から体を伸ばして……自分のおでこを私と重ね合わせた。

「それでも不安な時は、会いに行きな。誰かが決めた『らしさ』じゃない、姫宮ちゃんが一番姫宮ちゃんらしくいれる人のところに」

私が……私らしくいれるところ？

そんなの家族以外に、伽夜ちゃんにいな——あ。

昼真っ盛りの日差しが蘇る。校舎の陰で少し肌寒くて。

いつものお昼休み、いつもの校舎裏で話してる時の私は………クラスの子が言う『姫宮さんらしい』私じゃなかった。

おとなしくて便利な『図書委員』でもないし。

小さく縮こまって地味な『立ち位置』^{カースト}にいる女子でもないし。

勿論【宵月レヴィア】でも無かった。

——三波くんと話してる時だけ、私は、【姫宮紗夜】だった。

ずっとずっと、初めて話すようになってからずっと。

私の目の中に誰かが映ったことを感じて……天海先輩はすうっと身を引いた。

「そういうつながりを大事にすれば良いって、わたしは思ってる——行って」

「~~~~~っ！」

頷いた拍子に散った涙は、夕陽色だった。

声にならない感謝を込めて、お辞儀してから、私は天海先輩の家を飛び出た。

「天海渚の視点」^{コメント}

あの子ずっとパジャマだったけど大丈夫かなあ~~~~~？

背中を押した手前、そこだけがわたしの心配所だった。

いや言える雰囲気じゃなかったから言えなかったけど、駅前でパジャマ姿は目立つわ。すごい見つけやすかったもん。

まあ、姫宮ちゃんが誰の所へ行くか知らないけど……警備員さんとかに捕まらな
いことを祈るわ。

夕陽は沈んで、部屋の中が夕闇に染まっていく。電気をつける気にならなかった。

「もう少し……浸ってたいな」

独り言が、紫煙みたいにくゆる。

目蓋の裏に、あの輝かしい涙を描いて。

「——少しは、先輩らしくできたかな？」

ティロンと、スマホが震えた。誰からだろうと思って、画面を見る。

そのメッセージはビィスコードから………僕が『わたしらしく』いれる二人から
だった。

ついさっき姫宮ちゃんに言ったことを思い出して、タイムリーさに頬が緩んだ。

「もしもし？」

『渚あゝ！ あんたのおすすめ美容オイル、めっちゃ肌になじむ〜〜〜！』

『おいアラサー、第一声で脱線すんな』

『はああああ!? 綾香はまだ20代だから、んな舐めたこと言えんのよ!』

「なに？ 二人とも、外？」

クレアとステラのプロレスを流して、通話越しの環境音について尋ねた。

『そうそう。私も綾香も今、帰り。渚もこっち来なさいよ。女子会しましょ』

『姫宮となに話したか聞きたいしな……先輩風は吹かせられたかよ?』

奏クレアの朗らかな口調が、綾香ステラのからかい口調が、わたしを誘う。

わたしらしさの詰まったクローゼットに。

「うん。行く。わたしも今ちようど——二人に会いたいって思ったから」

パジャマ登校姫宮! (こっちです、アル○ツクー!)

学校へ駆ける私の背に、夕陽が追い縋ってくる。

視界の片隅に流れる景色が、じわじわと夕闇に飲み込まれていく。

——お願いお願い……まだ学校にいて。

祈りが足の回転を速めていく。

焦りで、息が乱れて詰まる。

苦しくなって、だんだん顎が上がっていく。

……私なんで走ってるんだろう。

三波くんと話すなら、通話で良い。B I N Eで連絡を取るのも良い。なのに、どうしてこんな息を切らして、走ってるんだろう?

肺が痺れる、喉の奥から血の香りがする、視界が目の前しか見えないように狭く搾られていく。はあはあ息を吸う度、ごちゃごちゃした思考が単純うすくなっていく。

——会いたい。

顎を引く。

脇を締めて、膝を高く上げる。

酸素以上に肺の中を駆け巡る想いが、目からこぼれて散っていく。

会いたい、会いたい、会って、話したい。

いっつもいっつも推しのことばかりで、レヴィアのことばかり早口で喋って。

鼓膜破いてもらいたいとか意味不明な欲求あげすけに話して。

エッチな絵とかASMRとか普通に聞かせてきて。

とんだ変態さんだよ、クラスの中心イケメンだなんて思えないくらい。

———そういう風に、私は、私が嫌いな人達と同じ見方しかしてなかった。

あなたはずっと私に……【姫宮紗夜】に向かって、話してくれていたのに。

「~~~~~っ！」

三波くんっ！

校門に飛び込む。

ちらほら校舎はまだ明るいところもあって、でも漂う空気がどこか静かで。

からからの喉なんか裂けちゃえば良いっ！

そんな気持ちで彼の名前を呼ぶ。

「~~~~っ!」

返事も私の声自体も、何も夜の校内には響いていかない。

ただ……校内の明かりが、少しずつ消えていく。

玄関にたくさんの人の足音を感じる。

もう、このタイミングを逃したら、三波くんとは会えない気がした。

焦りが募る中……私は肌寒い校舎の影を思い出した。

「~~~~っ!」

お願い……間に合って!

どこからか「またね」と聞こえてくる。夕闇に染まった校内を、走る。

入り慣れた校舎とは反対側の校舎っ、その裏側へ角を曲がって飛び込んだ。

ただでさえ薄暗い校舎裏は、夕闇が付け足されて……しんと静寂に満たされて

いた。

——ああ。

放課後の、いつもと全然違う校舎裏がうるうるのにじんで……唇を噛ん

「あれ？ 姫宮さん？」

「——っ!!」

きゃっ!!

無音の悲鳴が飛び出て、両肩がびよこんと飛び上がった。

静寂に包まれていた暗闇を破って、三波くんは立ち上がった。

その位置は、私たちがいつも腰を下ろしてるアスファルトの段々があるところだった。暗すぎて見えなかったんだ……なんか………恥ずかしっ!

私は慌てて袖で目元を拭った。そうしてホウツと息をついた瞬間。

「姫宮さん……なんでパジャマなの？」

「……?」

へ？ なにを言って……私はおそろおそろ俯いた。

きよとんと丸めた目に——ここ数日ずっと肌に馴染んだ薄ピンクのくま柄パジャマが映りこんだ。

刹那、駆け巡る。

家を飛び出してから、学校に着くまでの、これまでの記憶。

その間ずっとパジャマだった自分を知って。

正しく声にならない悲鳴が、校舎裏に響き渡った。

「~~~~~!! !! !! !?」

肩の温かな重み（——溶けだす、声）

見ないで……みないでえええ……っ！

すっごい自分の顔が熱くなってるのを感じながら、私は自分の両肩を抱いた。

片方の手はズボンの方へ伸ばして、下を隠そうとしたけど……なんかよくわかんない恰好になる。

「~~~~~っ」

羞恥心に歯噛みする。なんでえ？

なんでこんな時に限って、私……っ！ だらしないところ見られた恥ずかしさが、耳にまで届いて——フワっと布生地が肩に掛かった。

びっくりして顔を上げたら、三波くんがすぐ隣で視線を逸らしていた。

「は……春先でも……夜にパジャマは寒いでしょ」

何が起こったのか分からなくて、温かくなった肩を見やったら……ブレザーを羽織っていた。もう一度顔を上げると、ワイシャツ姿の三波くんが照れくさそうに顔を逸らして……っ！ 私はブレザーの襟を引き上げて、口元を隠す。

……すう、はあ、と俯いて深呼吸を繰り返す。

息がこもって口元が熱くなる。

ちらりと見上げて……ひとときわ大きく息を吸った。

「あっ」

喉に手を当てたら——声がとろけ出た。

襟の中でこもった、小さな小さな声に潤みながら……私は声を溶かし出した。

「あ、りと」

ずっと堰き止められていた声が川のように、さらさらと流れ出した。

あれ、私、変だなあ……。

眦が垂れるのに、口角が上がる。

ずっとこもって淀んでいた胸の中が晴れ渡っていくのに……きゆうっと切なく締め付けられる。

正反対の想いがなймаぜになつて私を、三波くんは不思議そうに見つめて。

「どっ……どういたしまして」

やっぱり照れくさそうに返事を返してくれた。

私はまだ喉に手を当てながら、ゆっくり小さく発声する。

「今日、どうした、の？　なんか……変だよ？」

小首を傾げる私に、三波くんは困ったように眉を下げる。

突かれたくないとこを突かれたような。

彼は頬を指先で掻きながら、視線を泳がせた。

「いや、その……最近、姫宮さんと話せなかったから……話したいなあ〜って

ずっと思ってた時に——来てくれたから」

「……………っ！」

走ってきた時の、駆け巡ってた想いがよみがえる。私はブレザーの襟をもっと、もっと引き上げて目の下まで覆い隠した。

ぱくぱくと脈打つ音が、吐息に熱っぽさを引き起こす。

——ありがとう三波くん、ブレザー貸してくれて……本当にありがとう。

一向に下がらない口角を襟で覆いながら、私は三波くんと目を合わせる。

いつもだったら、三波くんがレヴィアについて推し語るから……お互い一向に話し出せずに見つめ合う。

その、見つめ合いが、なんだか……っ、変で、変な空気で。

——ふいっ、と視線を逸らすタイミングが全く一緒だった。

「「あ」」

そしたら、いつもお話しする時決まって二人で座る、アスファルトの小さな段々が目に入った。

私たちはそろりそろりと、その段々にそろって腰を下ろした。

いつもじゃない放課後、いつもの校舎裏（たわいもないつながり）

目を閉じて、耳をすませば、まだ「またね」「さよならー」と挨拶してる声が聞こえてくる。

そして更に遠くからは、野球ボールが打たれたり、サッカーボールが蹴られたり、テニスボールがバウンドしたりする音が、やまびこみたいに響いてくる。

夕陽はとっくに沈んでいて、照明スタンドの真白な光が夜の闇を散らしていた。私と三波くんはアスファルトの段々に座ってから、ずっと黙り合っていた。

放課後の、部活でしか響かない音に耳を傾ける。

この一時が……なんだか心地よくて。
変だなあ。

三波くんと話したくて、ここに来たのに——無理に話さなくても良いやつて思えている。

「……姫宮さんはさ」

「なに？」

三波くんが口を開いた。私はパッと振り向いた。

すると、彼は遠くから響いてくる部活の音に耳を澄ませながら、訊いた。

「なにか部活ってしてた？」

え？

私は目を見開いた。

だって、いつもの三波くんは、今までずっとレヴィアのもの、V t u b e r のことしかお話してなくて……。

私の驚きを見て取ったのか、三波くんはハハッと苦笑して応えた。

「レヴィアたんはおやすみ中だし。喉が良くなるよう、いつまでも待ってるから……
たまには他の話したいんだ」

「……………中学の時。陸上部だったよ」

「おっ、なんで？」

「用意しなきゃいけないものが比較的少なかったから。スパイクとユニフォームだ

け。長距離だったから、体力はついたねー」

私は体育座りに座り直して、両膝の上に顎を乗せた。

そうしてちらりと横を見やって尋ねる。

「三波くんは部活何やってたの？」

「カバディ」

「——え？」

「けっこうガチでやってたぞー。はちみつレモンスレイヤ^{ハニートレモンスレイヤー}いの三波って異名まで轟いて……」

「衝撃的すぎるんだけど!? ていうかはちみつレモン食べてただけじゃないそれ」

「いやいやいや、しっかり凍ったポ〇リも飲んでた」

「ベンチもほっかほかだね、それ」

「姫宮さん休んでたんだよね? 授業のノートってどうすんの？」

「あー……どうしよ、ぜんぜん考えてなかった」

「数学けっこう進んだよ。新章入ったし、新しい公式出たし。……教えてやろうか」

「ええ〜 WW 三波くんよりはできるよお〜」

「お? 言ったな? 言ったなおい?」

「ふふふっ、言ったよお。……どうする？」

「ノートを貸してやろう」

「やったあ。よかったあ」

その後も、つらつらと、私と三波くんはお喋りした。

体育の授業で男子の誰がバカやったこととか、窓を開けてたら布団に桜の花びらが入り込んだこととか。

教室にカナブンが入り込んで授業が中断になるくらいパニックになったこととか、妹の作る葛湯が大好きなこととか。

そんな、なんでもない話を語り合う。

こんな風に誰かと話すのなんて、いつぶりだろう。

三波くんと話す時はいつも、【レヴィア】がいた。

でも、今、この一時は——私と三波くんの間には、誰もいなかった。

二人きりの……たわいもない話を積み重ねていくうちに。

部活動の音が止んで、照明スタンドの光が弱まっていった。

空はとっぷりと暮れていた。見上げたら1等星の星以外、ほとんど見えないまっくらな夜空が広がっていた。

「——そろそろ帰ろっか」

「——うん」

私達はその場を立った。

じゃりじゃりと歩いていく三波くんの背中を見つめて——羽織らせてもらったブレザーを、ギュッと握りしめる。

いやだ。

顔を伏せたら、爪先に影が落ちた。

帰り、たくない。

足並みがだんだん、だんだん遅くなっていく。

じゃりっ、じゃりっ……足音が、止む。

「姫宮さん」

爪先から……先を歩く三波くんの背中へ、視線を移す。

彼は顔だけ振り返って——綿毛のような笑顔で、この場所を指さした。

「また明日な」

「——っ！」

手を伸ばす。

くいっ、と袖を引っ張る。

三波くんが少したたらを踏んで。

ぽすん、と。

彼の背中に、頭をつけた。

三波くん。

「ありがと……ね」

声が濡れる。

彼の背中は動かないまま、静かに……私を寄りかかせてくれた。

また、明日。

私が、姫宮紗夜が居ても良い——居場所なんだ。

私はそうは思わない

次の日の、朝。教室の前に着いた。

私は立ち止まって、度無しメガネを取り出し——それをバッグの奥深くに戻した。そして教室に入ると……すでに私の席は女子達に囲まれていた。

「あっ、姫宮さあーん。待ってたんだよお？」

「……なにー？」

私はすたすたとまっすぐ歩いて、席に着いた。

そしたら囲んでる女子の一人が「あれ？」と素っ頓狂な声を上げた。

「姫宮さん、メガネはあー!？」

「コンタクトにしたの」

度無しだっことを伝えたら、かえってややこしくなりそうだったから伏せた。それでも女子達は「ええー」と黄色い声を上げて、嘲笑する。

「ぜえったいメガネの方が似合ってたよー！ だってその方がすごく姫宮さん『らしい』しさあー！」

「——ありがとっ、でも今日はこの気分なんだあ」

にこりと、微笑んだ。

そしたら一瞬、囲みが静かになって……口々に「そうなんだ〜」と戸惑い気味につぶやいていく。私は瞬きして、首を傾げながら話題を戻した。

「それでさっきどうしたの？　すごく盛り上がってたけど……」

「あ……そ、そうそう知ってる？　宵月レヴィア、今日、復帰するんだってねえ！」

「またやらしい配信するのかなあ」

「やめてほしいよねえ、まーた勘違いしちゃうオタク君達が増えるじゃんね〜」

「女子《あたしら》のことそういう目で見てるんだって透けて見えるよね〜、ほんっと気持ち悪う〜い！」

「ねっ？　姫宮さんも、そお思うよねえ？」

喉に力を溜める。

すうっ、と空気が口の中に冷たく満ちて、

「私は、そうは思わないよ？」

言った。

囲み女子達が凍り付く。ぞくつと首筋が震える。

でも、ちがうから。

「気持ち悪くは、ないと……思う。たっ、たしかに……ちよいちよい変なノリあるけど、でも……楽しんでるのが伝わってくるから」

私は——妾とその眷属達は、そんなんじゃない。

そう思い切って良いって教えてくれたから……言った。

「私は、好きだよ。墮天使」

「……………いこお」

興味も何もかも失くした目で彼女が言うと、囲み女子達は散り始めた。

ひそひそ声が四方に散っていく……うううまだ見られてる気がする。視線が痛い。

でもかまわない。そう思っていたら——後ろから抱き着かれた。

「ひゃんっ!？」

「姫宮さあ~~~~~ん!! 　んはあ~~~~~ひめみやさんだあ~~~~~っ

!」

「さ、早乙女さん!？」

頭のとっぺんを頬ざりされながら、私は後ろを振り向いた。

口角がとろけてる早乙女さんが休んだ分を取り戻すかのように、ぎゅうぎゅうと押し付けてくる。

私はちよつと胸がくすぐったくなってきた、少し笑ってしまう。

「あは、ちよつ。そんな引っ付かなくても……」

「だって寂しかったのよ!? 教室入る度に『いないなあ』ってつぶやく気持ちになつてみてよお!」

「うっ……ごめん、なさい」

マフラーみたいに回された早乙女さんの腕を掴んで、口元をうずめる。

おっきい声で言われる恥ずかしさと……寂しがつてくれて嬉しい気持ちがあミックスされて顔を伏せる。

なにはともあれ、後頭部の柔らかな安心感のおかげでひそひそ声と視線は気にならなくな

「——何見てんだよ？」

噴火の前兆（ドスの利いた声）に、ひそひそと視線が霧散した。

早乙女さんは満足げに私の前に回り込むと、にやけてるのを隠さずに話し始めた。

「姫宮さん、B w i t t e r見た？ 墮天使様、今夜復帰するんだってね！ リ

ベンジ歌粹楽しみね！」

「うっ、うん！ 楽しみ！」

私と早乙女さんはそのままイヤホンを分け合いっこして、レヴィアちゃんの切り抜きを見た。

朝の、この時間はきつと大切な時間になっていく。そんな予感がした。

そして——いつものお昼休み、いつもの校舎裏に顔を出す。

「おまたせ。待った？」

「お~~~~~姫宮サン!! なあなあレヴィアたん復帰だって！ よ

かったあ！よかったわあ~~~~ちゃんと喉治ってさあ~~~~!!」

「あ、あはは」

ブレザーの重みを覚えた、肩をさする。

誰にも言えない、言う気もない秘密を、胸に閉じ込める。

それは飴玉みたいに甘くて、ビー玉みたいに煌めく——大切な秘密。

「ねえ、レヴィアちゃんの声なら、どんな曲が合うと思う？」

「ええ〜〜!!」それは難しっ、でも話が弾む話題だなあ〜。そうだなあ……

やっぱあれかな！」

三波くんが口にした曲名に、私は大きく目を見張ってから、ゆっくり細めた。

なるほどね……うん。

それは、私も大好きな曲だった。

リベンジ記念歌枠! 始めッ! (——○に落ちる音がした)

「音源よし、配信画面よし、ライブ2Dよし、お姉ちゃんよし」

「本人^{それ}チェックいる？」

「何言ってるの! 魂いなかったら全部おじゃんになるでしょうが!」

「それはたしかに」

押し入れの中で配信準備を終えた伽夜ちゃんが、怒りながら四つん這いで出てきた。

音量調節は配信中に微調整していくとして……私は伽夜ちゃんお手製の葛湯を飲む。

暖かなとろみが喉にじんわり広がる。

「準備できてる？」

「いいよ」

コツンと、妹の小さな拳と軽くぶつける。

入れ替わって、押し入れの中に四つん這いで入っていく。

ふすまが閉じられて暗くなった押し入れの中に、ブルーライトが浮かび上がる。配信台上的照明スタンドを付けて、配信開始ボタンを押して——頬を吊り上げる。「ふぁーはっはっは！ 待たせたな眷属達！ さあ、邂逅を告げし関の声を上げようぞ！ こんレビい!!」

「コメント」

- ・は？
- ・は？
- ・は？
- ・ハ？
- ・はあ？

「ねえ~~~~復帰早々それはひどいってえ~~~~!!!!!!」

「コメント」

- ・どうしたんだいレヴィア
- ・ひどいこと言われたのかいレヴィア
- ・パパ（眷属）きちゃあああああ

・もうファンネ、パパで良くない?

「良くないよお!! 貴様らは妾の眷属ぞ!? もう少し距離感を考えて!」

「コメント」

・距離感……靴下は分けておくれ

・うちの娘とおんなじこと言ってるう!

・もう浸食されてない?

・俺がパパだ!

・パンツも分ける、パパ共!

「んっ、んんっ! それで、えーと始める前にまずは……言っておかなければならない。B w i t t e rでも事務所から公表されていたのだが、改めて。前回の配信で号泣してしまって、みんなをたくさん心配させてしまいました。——本当にごめんなさい」

「コメント」

・もう大丈夫なの?

・無理しないでね

・しっかり治るまで休んでね？

・気にしないでよろ

・好きにやってくれ

・ついてくから

ああ……。

笑みがこぼれる。

相変わらず眷属みん達のコメントは妙に辛辣で、妙に変態で——妙に優しい。

「ありがとう……ありがとうね、みんな——ということ!! しんみりしたの

はもうおしまい！ 祝いそびれた10万人記念!! リベンジ歌枠!! 始めてい

くのじゃあああああああ——————!! !! !!

コメント欄に、ペンライトのスタンプがたくさん流れる。

カチカチとクリックして、伽夜ちゃんが用意してくれた音源を再生する。

流れるイントロ、察した眷属達がコメントを加速させる。

「それでは最初の一曲目！ 歌おうと思う——『メ〇ト』!!」

校舎裏、胸にしまった。

から。
飴玉みたいに甘くて、ビー玉みたいに煌めく秘密が……溶けてしまっ
そうだった

歌声に、溶^想け込^いませ^をませ^込めた。

ステラは回転橋の途中でプレイヤーに掴まれた！ ステラは落ちた！

ス「……すうー……うん。まだ間に合うから。こっからノーミスでいけba」

後続集団はステラにメロメロだ！

ステラは後続集団に掴まれて動けない！

ス「触っつっつてんなっブス!! !! 掴むなっつただろがぼげえッ!! !!

なんっつもおもしろくねえんだよバァカ○ねカスウツ!! きっつっしょいんだよ

ロリコン共おあ!! !! !! 臭え息、ガキにかけんな底エー—————

辺どもおおお!! !! !!

囲いの厚みが増した！

後続集団は罵られたみたい・・・

↓更に罵倒されませんか？ YES / NO

——2..34をクリックした！

旭日リエルはウシ娘をプレイしている・・・

リ「はぁーい見守ってくれたご主人様ありがとー♡ ねー♡ 当たったのにねえー

(ロリボ)

クレア「ちょww それwww あんたが喰いたいだけじゃんそれえwww」

リエル「お前らの脳みそは何色だあああああー！！！！！！！！！！！
デビュから長く経ってもピンクな同期に振り回され続ける天使に、レヴィアは
淡々と告げた。

レヴィア「先輩。裏から来てますよ(棒)」

リエル「うわああああああああああああああああああああああああああああ！！
！！！！！！

くそ雑魚天使の喘ぎ声15回目まで3……2……1……Q！

リエル「あ、あ……アアッ、やだっ♡ や、めて……」

ステラ「お前の喘ぎ声飽きた」

リエル「飽きたってなんだよお！！ やらせたのそっちだでしょお！！」

クレア「メス頂きすぎて、もうわんこそばなのよ」

ステラ「ありがたみ薄くなるんだよな」

クレア「パンモロと同じ理屈よね。チラリズムを辞書で千回引きなさい」

リエル「ううううううう！ ううううううううううう！！」

悔し過ぎてうなり声しか出なくなったりリエル。

ちよっと泣きそうな天使を置いて、クレアとステラはだんだんと一人のプレイヤーに狙いを定めていく。

クレア「ふふふふふふ、実は今まで一回も喘いでない娘が……いるのよねえ〜
？」

ステラ「そうだなあ〜？ もう一通りメスになったのになあこれは不公平だよ
なあ〜？」

復帰したばかりの墮天使目掛けて、大人げない先輩二人が殺到ヒヤッハした！

クレ×ステ「喘ぎ晒せ！ レーーーーーヴィアちゃアアアアアアン！！」

クレア「私……っ！ ステラのことお！ 好きいつ！ すきなのおおお！

ステラ「~~~~っ、あ、あた、しも……す……~~~~！！！！！！

レヴィア「制圧完了《クリア》」

即堕ち(てえてえ)させられた。

そして恥ずかしさで喉を詰まらせるステラに、レヴィアがパン……パン……パン……と拍手の圧を掛ける。

レヴィア「ステラせんぱあ〜い♡ どうしたんですかあ？

はやく言ってくださいよお 照れてるんですかあ？

ね〜えほおら……言って？ ——だ・い・す・き♡」

ステラ「つ〜〜〜〜〜！ だ！ だあああいすきだよおクレアあああああ!!

!!

クレア「ふあああああああ〜〜〜♡♡♡ 私もだいしゆきだよステ

ラあ〜

〜〜♡ ン〜〜ちゅちゅちゅ」

ステラ「ふざっつけん、おまつ、やあーだあー!!

てえてえしたくなあ〜い〜い〜!!

描くのが良いんだよ、あたしはあ〜〜〜!! 』!!

墮天使は暗黒微笑を浮かべた。

レヴィア「ふふふ……かわいっ♡」

リエル「れ、レヴィアちゃ……」

その日、天使は思い出した。

宵月レヴィアの圧を……

隠されたゲームスキルの高さを……

それに対抗できるのは——白き毛纏う淫乱猫だと……

レヴィア「せんぱいっ。妾は飽きてなんかかないよ♡

リエル先輩のお……かわいーい声♡

だからだからだから——もっと鳴いて？」

リエル（アッ、コレ殺され）

次の試合、めっちゃめっちゃ喘がされた殺された。

幕間の3 裏でのへブメン（深夜の雑談）

ハッシュタグ、というのがある。

Twitterに付けられる「#」を付けたら、同じ話題を見つけやすくなるという……。

そしてその中でもVtuberに欠かせないタグが、FA《ファンアート》タグ。そのままファンが描いてくれたイラストが投稿されるタグで、私——妾にも眷属のみんなが描いてくれた【宵月レヴィア】のイラストがどんどん投稿されている。

「……はあ~~~~~!! すご、すごいなあ~~~~~みんなあ~~~~~! どおしてこんなイラスト描けるの……うはあ~~~~~ん!! (バタバタバタ) すごく励みになる。

お布団で足バタバタしてたら伽夜ちゃんに叱られるけど……FAタグを見る、この一時がすごく幸せだった。

「——うんっ、がんばろ！」

パアツとFAのくれた元気が、目の前を明るくする。

どうしよう、なんだか目が覚めちゃった。

むくりと体を起こして、押し入れを見る。……………配信のサムネ作っちゃおかな。押し入れを開けて潜り込んだ。

夜更かしだ。許して、伽夜ちゃん。

YUTUBEで表示される『動画の看板』、それがサムネ。Vtuberはそのサムネによく、いやほぼ毎回ファンアートを使う。

「今回はどうしようかな……………あつ、スプ〇トゥーン。スプ〇トゥーンの配信しよ」
大まかな配信内容を決めてから、私は配信PCでB w i t t e rを開く。

こないだのヘブンズライブメンバーでやったスプ〇トゥーン配信以来、普通にゲームそのものが好きになった。

とか私、けっこう嵌りやすいタイプなのかも……………バイト生活の時は娯楽を遠ざけてたのも、自分の性質を自覚した上だったのかも。

「今度は一人だし……………眷属のみんなも参加してもらおう形にしようかな」

ぶつぶつぶやきながら、『#レヴィアート スプ〇トゥーン』で検索してみた。

できれば配信内容に合ったイラスト〃を!?

不意打ち気味に現れたFAに私は思わずのけぞってしまった。

……白濁色のインク。

クレア先輩を、ステラ先輩を、リエル先輩を、真っ白に染め上げたり……裸に剥いて三人並べてお尻を向けさせたり……。

嗜虐の笑みを浮かべた宵月^わレヴィア^たが、その、Sっぽく先輩達を責め立てたり、下に組み敷いてたり……

要は——えいちだった。

レヴィア×スプ○トゥーンは——えいっちで溢れていた。

「う、あう……ふああああ………っ!」

ますます眠れなくなった（※別の意味で）

「先輩達はえ……自分のえっちなファンアート見つけちゃったらどうしますか？」

『どちゃどちゃにシコるなあ、オレは』

『あたしは性癖^{乳首が反応したら}に刺さったら抜く』

『だっつっからお前らの脳みそは何色だあああああー！ー！ー！ー！ー！！！！』

ピンクに決まってるじゃないですか、天海《リエル》先輩……っ！

来栖《クレア》先輩と星辻《ステラ》先輩の豪速直球から回復して、私は配信台に突っ伏していた顔を上げる。

「そ、その……あの、い、いちおう自分……ですよ？」

『え〜？ だってせっかく描いてくれたのよ？ 濡らすのが礼儀じゃない？』
 『分かってるな、来栖《クレア》。絵師《オレたち》はよ、自らのエチ絵と戦ってるのさ。もう抜きてえ、今すぐ股に手突っ込みてえ、でもしたらイラストは完成しない……っ！ その葛藤を乗り越えて出来上がったものが—— エチ絵なんだよ！』

『うん、17の乙女の前で言うことじゃないんだよお！ ごめんねレヴィアちゃん。わたしの同期がピンクで』

「あっ、それは分かっています」

重々、承知します。

ヘブンズライブ一期生の良心のフォローに、私はなんとか持ち直す。

すると星辻《ステラ》先輩が天海《リエル》先輩におらついできた圧かけてきた。

『ああ〜〜〜ん??? なんてメリエルう？ なあにカマトトぶってんだよお

? お前自分のエチ絵こっそりブクマしてんの知ってんだかな?』

『こっそりお楽しみしてんでしょ！ わかるわかる、あたしも夜寝る前にブクマ

しておいたエチ絵眺めてうふふふふふふふふふ』

『ちっが！ ちがうからあ！ わ、わたしはただ描いてくれたことに感謝してブ

クマしてるの！ 本人にえちち見られるの嫌な絵師さんだっているから……だ、だ

からいいねリツイートもしてないの!』

『え〜〜? って言ってもまあ、そうよね。嫌がる人もいるから、あたしも大っ

ぴらにはハート押さないけど……乳首に雷落ちたらその限りではないわ』

『おめえはムー○ンか』

『ふふん、二つある分あたしの方が上よ。雷神だからね!』

『なんのマウントなのそれ？ 何も誇るんじゃないからね?』

……どうしてムー○ン？

私は先輩たちのやり取りに首を傾げた。

とにかく！ 『レヴィア×スプ○トウーン』で検索したら、エチ絵ばかりで……。今までこんなに偏ることなんてなかったんですよ？ レヴィアのイメージが変わっちゃったのかな……。本当に私……。どうしてなのかわ分からなくて」

『『いや、先輩《あたしら》をKILLしまくったからだろが!! !! !!』』
「ですよね—————!!!!!!」

一期生のトリプル突っ込みが、私の心をクの字に折り曲げた。

うううううなんで私あんなに倒しちゃったんだろおおお！ 配信後に後悔することはいつものことだけど、今回はその比じゃなかった。

そんな私に先輩達は容赦なく追い打ちをかけてくる。

『もおくあたし本当にワクワクしてたのに！ 墮天使の喘ぎ声え！』

『あそこはお前も喘ぐとこだろうがあく！ ったくガチムーブしやがってよお！
オレ……。あんなにひんひん言わされたの初めてだったんだからなあ！』

『レヴィアちゃんも結局同じなんだ……。僕にエッチなASMRしてくるお姉さまV
と一緒なんだ……。』
がた

「ご、ごめんなさい！ でも違くて！ 私、駄目なんです！

人を殺せるルールがあつたらどんな熱中して昂っちゃってもお夢中になっちゃうだけなんです！ 今まで沼を避けてた分、嵌りやすいだけなんですう！」

『『いや、なんの言い訳にもなつてねえなそれ！！！！』』

「ぐっつはー！ー！ー！ー！！！」

先輩たちのトリプル突っ込み、再び！

そしてまた追い打ち！

『え、レヴィアちゃんってもしかして戦闘民族？ 墮天使の正体サ○ヤ人？』

『サ○ヤ人の割りには禍々しいわよ!? そーだ、この子D○Dの時もこうじゃ

なかった？ 闇ロリボイスでチェン○ーマンしてなかった!?』

『つーか人殺す度に昂るってヤベー奴じゃねえか！ おい、これはちょっとオレ達が進めないといけねえぞ』

ステラ先輩の呼びかけに、クレア先輩もリエル先輩も大いに賛成する。

『そうね！ これは特訓が必要だわ！ ——ぜったい喘がてみせる！』

『私達もうかうかしてられないな……やりますか、ス○ラ特訓配信！』

『おう、そうだな！ 打倒、墮天使！ 打倒、宵月レヴィア！ オレ達の戦いは

——今、ここから始まる!!』

そうして三人はス○ラ特訓配信のコラボを決めて、ビィスコードの雑談チャンネルから抜けていった。

私……だけ……っ！

「いっ、いいもおん！ 私！ 一人でできるもおおん！」

墮天使は一人でス○ラ配信すると決めた。

さ、寂しくなんてないもおん!?

一期生の絆なんて羨ましくないもおん！

ないもおん……。

幕間の4 墮天使を分からせられるのは……（エッチスケッチワンタツチイ！）

おちつけ、おちつけ、おちつけ。

ぴよこぴよこ屈伸して煽られてるけどおおお……おちつけえ。

ふうふううう、と息を細く吐いて、私はリスポーン地点から再出発！

あいつのインクで汚れたステージを私色に戦場洗淨♪

「あれえ〜どこ行ったのかなあ〜？ であーておーいでー♪」

そうゲームは楽しくやるべき。

私の笑顔をキャプチャした【レヴィアちゃん】がニコニコと爆弾を投げる。

そこかしかにインクの爆風が吹き飛び、彼奴の汚らわしい白インクを塗り潰す。

「ほらあ〜？ どこに隠れてるかなあ〜にやんにやんどこかなあ〜おらあ〜」

？」

あっ、ついうっかり語気が乱れちゃったわ！

う!!!!!!」

『はい無理です！ もう無理です！ だって二本終わったモン！ ねえ？
分かる？ 5本勝負♡ 僕は3勝♡ 残り2回、君が勝っても……どうなるか
な？ 言っただらあん♡』

「うーざーいいいいいい！ やああああだ！ やあああああだ！

やあああああなのおおおおお!! も一回！ もう一回もう一回もう一回い
いいいい!!!!!!」

【コメント】

・ガキWWW

・駄々こね助かる

・ナイスだぁクソネコお！

・分からせできるのはお前だけだ……

「どおじでぞんなごどいのおおおおおー!?!?!?」
淫乱猫とコラボするといつもこうなのお!!

私のリスナーなのに！ 私の眷属なのに！ どおおおおして私の味方してく

れないのお!! !!

そんなズタボロの心に、キャスパーのしゃくれ声が塩みたいに塗りこまれる。

『いやー、ねっ! ステラちゃんとクレアさんから、ねっ!』

ディスク来た時は、ねっ! びっくりしたけど、ねっ! 急に『あのメスガキ

ぼこぼこにしてほしい』って、ねっ!』

「うーるーさーいいっ! 聞き取り辛いんだよお!!」

『まあ満足してもらてえ……良かったあ、ねっ!』

「うっ、エエエエ〜ン(号泣)今までっ、まげてながったのにいいい〜!!」

『はあーいそれじゃあ約束通り教えてもらいましたようかあ♡』

そう言ってキャスパーはマイクにエコーを掛けて、私に聞いてきた。

『——おパンツウ………何色ダアイ?』

「キモイ死ねエツ!!」

無駄にイケボっぽく言うなっ、バカア!!

私はスカートを見下ろして、唇をもによもによする。

やだあ……っ! 恥ずかしい!

でも言わなきゃいけない……どうしようと悩んだその時——私は閃いた。

この質問を乗り切る方法を！

ふふん、と鼻を鳴らす。

「いいよおー。答える答える」

「おっ？ やけに潔いですなあ。まあ良いでしょう！ それでは眷属どもお！

僕を褒め称えろおおおおお!!」

キャスパーが煽って、コメント欄がうおおおと盛り上がる。

その賑わいっぷりが、秘策を携えた私には可笑しくて仕方なかった。

そして答えた。

「——虹色ダヨオン」

「……………アアン？」

「あっ、茶色だったかなー？ あっトラ柄だったー。はい答えたー妾もう答えた

モーンはいいおしまいー配信おしまいーグッバイ墮天^{フォーレン}♪」

「なんだア？ てめえ……」

へーんだあ！ そんな怖い声出しても駄目だもんねえー！ だってキャスパー

も眷属もみんな確かめよう無いもんねー！

へっへーんだ！ コメント欄には『このクソガキ』って言われてるけどかんけいないもんねーだ！

私は勝利を確信し

「おじやましまーす」

「あっ来^{クレア}栖さん。いらっしやいです」

クレア先輩を我が家に歓迎する妹の声を聴いた。

—— っ て、え？

キヤスパアの重いため息が真っ白になった頭に注ぎ込まれる。

『残念だよ、レヴィア。この手段は取りたくなかった……残念だ……無念だ』

「ま、まって？ ねえまって!? 教える！ 教えますう！ 黒です！ 妾のおパンツ黒ですう！ だからおしまい！ もうおしま」

スウウウウつと、押し入れの引き戸が開けられる。

びっくうと跳ねあがった肩越しに……振り返れば……そこには……っ！

「レーヴィーアちゃんっ♪」

幕間の5 ヘブンズと!いっしょ!(妹ちゃん、マスコットデビュー!?)

「よーいこのみんなあ~~~~!! こーんにーちは~~~~!!」 歌の

お姉さんの、レヴィアちゃんだよお~~~~!!」

【コメント】

- ・ こんばんはだろ
- ・ 挨拶間違えてんじゃねえ
- ・ 不採用

・ 果たしてこの時間まで起きてる我らは良い子なんだろうか・・・

・ あのお、子ども扱いしないでもらえますかあ

「ハア~~~~!! うつつせえんだよ下等生物共がよ~~~~

~~~~!! てめえら、姉上になにナマこいてんだゴラァ

アアアアアア~~~~!!」

「妹オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!! !! !! !! やめてよ  
妹お!! 怒らないって言ったじゃあん! 収まってえええええええええええええええ!!」

「死んだホモサピエンスだけが良いホモサピエンスだあ—————!! !!」

「イモウトおおおおおおおお—————!!!!!!!!」

私は、ポイチェンマイクを掴んで至近距離シャウトかます伽夜ちゃんこと——  
——墮天使に仕えるチビ蝙蝠【コロリン】を、全力でなだめた。

なんで……なんでこうなった!?

私は今日のお昼の出来事を思い出した……

\*\*\*\*

事務所に呼ばれた。

社長の合谷さんが言った。

「ちゃんレヴィって妹いるじゃあん?」

「え? あ、はい伽夜ちゃんですか?」

「あの子配信出さない?」

出た。

\*\*\*\*\*

早すぎんだろおおおおお~~~~~!!?!?!?

でも割とマジでそうなのだ決まれば秒で話が進んだのだ。

伽夜ちゃんもクレア先輩もみんな即OK出すから、あっちゅーまに決まったのだ。

こうしてリスナーに呪詛を吐き出す毒舌蝙蝠(妹)がデビューしたのだった。

こんなの眷属みんな混乱するかと思ったのに——

「蝙蝠に罵倒されたいって頭どうなってるの?」

見下げ果てた変態ね。変態変態・変態! どうせ女の子と話したことないんで

しょお~~~~(笑) だからチャットとはいえそんなキモチワルウイお願いできる

んだよねえ~~~~?? やあだあ、みっともなあ~~~~い♡ 指動かしないで口開け

ばあ? あっやだどぶの匂いする、くっつさあ♡ もう二度と開かないで?

キーボードだけ叩いて会話してねえ~~~~下・等・生物があ!! !! !!

【マスコット】

・やばい立ち直れない

・たまんねえなあ!!

・ぶひいいいいいいいん!!!!!!

・罵倒うますぎないwww

・逸材

・このレベルは店行かんと受けれん 100点

・よくもまあ、ここまでスラスラと たすかる

秒で順応したよ…… (呆然)

なんだったら助かってる眷属の方が多かった。ええ……?? うそでしょお???

「はい見てくださあい、お前らがキモ過ぎて姉上絶句しちゃいましたあ。

こっからの『ヘブンスと一緒に!』はコロリンが仕切ってくんで夜露死苦う!

つってもな、ぶっちゃけ役者が揃ってねえんだよ。二足歩行の人外がな。要はワ

○ワ○粹だ」

それはいな○いな○ばあでは?

辛辣な○ーたんがてきぱきと企画を進めてる。そういうところはさすが伽夜ちゃん









私は速攻、二人目の面接者を突き返した。

そしたらコロリンがぶんぶん腕を組んで頬を膨らませた。

「もうわがままだなあ。素敵な人材でしたよ? どこが気に入らないんですか?」

「銃器で全身穴ぼこにしたいくらい嫌いだよ、あの元凶マスコット!!」

「まったくう……あつという間に最後の志望者になりました。まあとやかく言っても仕方ない! それでは最後の方あ、どうぞ!」

『レーーーーヴィアあああ~~~~ん!! こないだのス○ラ配信、楽しかった、ねっ

☆! ワイらやっぱり相性パーペキちょぶりんとすうっでゆふっふっふう~~~~

☆ おほっ、おほほキャス×レヴィてえてえ~~~~! 自カプしか勝たんティウ

ス58世☆☆ わいマジヘブンズライブ2期生説う~~~~☆』

「ねえ死?」

『あつやばあ WW ねえ死出たんですけどお WW なんで死なない略してねえ死なんで

すけどお WW 二人つきりで裏で話してる時だけの語録出たんですけどおほっ☆ お

ほっ☆ ぽまいらに見せつけちゃってすまぬンゴお~~~~ WW』



妾の同期がデビューするぞ！（一か月遅れで！ おっそ！）

私・姫宮紗夜が【宵月レヴィア】になってから一月が過ぎた。

地面に落ちた桜の花びらがどこかに消えた頃。世間は来るゴールデンウィーク（今年は5連休！）を楽しみにしている頃合いに。

「ウェイウェイウェイエエエエイ！！！！！！ 喜べ、ちゃんレヴィ、君の同期のデビューが決まったんだ☆ぞおい♡！」

「二 遅すぎんだろ社長ゴージャああああああああ！！！！！！！！」

「ぐああああああああああああああああああああああああああ！！！！！！！！」

「合あいたに谷さーーーー！！！！！！！！！！」

ヘブンズライブの代表取締役社長（仮）に、所属Vタレント3名（明星ステラ・鳴神クレア・旭日リエル）のトリプルキックが突き刺さった。

えっ、すご！ 私アン○ンマンでしか見たことないよ、あんな飛び蹴り！！

先輩達、カッコいい！！

「おせえよ合谷ゴージャあ！ ふっー新人デビューはまとめてやんだろがあ！ チャンプルーにすっぞごらあ！」

「だからあんたは合谷ゴージャなのよ！ 紗夜ちゃんが一人でどんだけ頑張ったかと思っ  
てんのお!？」

「ねえ社長（笑）としてどうなのそれ。ちゃんとプロデュースする気ある？ ……  
掘るよ？（ゴージャで）」

「アッーーーーーー!! !! !!」

お股を抑えて先輩達に足蹴にされてる合谷社長は、まるで木の棒でめっ叩きにされてるアザラシみたいな悲鳴を上げてた。

私はスマホに視線を戻して、うちの社長が女の子になりそう、というつぶやきをSNSに投稿した。

\*\*\*\*\*

へブンズライブの社長…合谷あいたにさん。

私が『お医者さん』だと勘違いしてた、あの面接を担当した人。

愛称は【ゴーヤ】。

そのイジラレ具合は『フリー素材』、『サンドバッグ』『困ったらゴーヤイジリ』と、ぞんざいというか愛されてるというか……不思議な立ち位置の人です。

「で? その新しく入ってくる新人二人はどういう扱いになるんだよ」

「はい……宵月レヴィアの同期として、その【ヘブンズライブ二期生】的な……」  
「だったら尚更デビュー時期合わせるべきだったでしょ? なにしてんの? ねえ  
なにしてんの?」

「だ———だあって! お金が! お金が(´・ω・´)ナナイ! !」

「もう事務所移ろうかな……ハロライブとかよじごじに」

「やめてえ……泣いちゃう……」

な、なんて顔してるの社長……お目目うるうるハムスターみたいな目になってる  
社長に私は微笑みかける。

「大丈夫ですよ、ゴーヤさん。私はずっとここにいますから」

「ちゃんレビい……っ! ありがとうとお、でも俺ゴーヤじゃなくてあいたに……」

「まあ、たしかに合格通知届いた瞬間デビューさせられてそこからコラボラッシュの配信ラッシュで忙殺されたし、先輩達はすごく優しくして沢山支えてくれたけれど、同期とか全然いなくてホンツツト大変だったし、拳句の果てには淫乱猫と同期説が流れて舌打ちしたい気持ちですけれど——私！　ぜんぜん！　へっちゃらですっ！」

天使スマイル！　にこっ！

「ぐはああああああああああああああああああ！！！！！！」  
相手は吐血する。

この吐血量からして……ふむ。伽夜ちゃんこと【コロリン】との修行で得た『笑顔毒舌』の切れ味は申し分なかった。

先輩たちは倒れた社長をチラ見した後、私に向かって拍手を送ってくれた。  
「すっごお〜い！　あなた、もう罵倒ができるVになったのね！」

クレア先輩は某フレンズのように褒めてくれて、

「妹さんとの特訓の成果だねえ！　……同業者として羨ましいやあ、その強さ」  
リエル先輩は『力が欲しいか』と怪しい勧誘を受けそうな目になって、

「へへっ……成長したな、娘よ。——ああっ、だめだ湿っぽいのは嫌いなんだがな」  
ステラ先輩は母性の発露か、何故か涙ぐんでいた。

——私がV t u b e rになってから一月が経ちました。

——どんどん余計なことを覚えてる気分です………!!

なんだか、得るものはたくさんあったけど、失ったものもあるような……失った何かに気づけてないのが我ながら一番ヤバいなあと思った。

ああ……遠くに……来ちまったなあ………っ (遠い目)。

自分の成長の方向性に迷いを覚えてると、ふと社長(へんじがない。しかばねのようだ)の懐から何か出てるのを見つけた。

なんだろう？

まさぐって取り出してみると、それは四つ折りにしたA4用紙だった。開いてみてみれば、それは私達の配信スケジュールだった。

「こんなもん、懐に入れとくなよ」

「なんでわざわざ印刷するのよほんと不用心ねえ」

「だからいつまで経ってもゴーヤなんだよ……で? どうかしたの姫宮ちゃん。固

まってるけど」

わいわいと私の周りに集まって、スケジュール表をのぞき込む一期生達せんぱい。

でも私は、それどころじゃなかった。

原因はスケジュール表に記載された——【宵月レヴィア】のGWの予定表だ。

「お？ 例の新人、GWの最初にデビューすんのか」

「なにに？ 一人目が5月1日、二人目が5月2日か。まあ、良いタイミン  
グじゃないかしら」

「そうだね、なんたって今年のGWは5連きゅ……っ!? 姫宮ちゃん!? なん  
で震えてるの!? ってウワ、冷や汗やばっ!!」

「耐久です」

「へ？」

カチカチと歯を鳴らしながら喋る私の声に、リエル先輩は困惑気味に眉を上げた。  
でも、私は、それどころじゃなかった(二度目)。

「5日間耐久配信です」

私は! それどころじゃ!! なかった!!! (二度目だ、あとは分かるよね?)  
 あっ、だめだ……先輩達が……すぐく可哀そうなものを見る目になってる……!  
 力を入れてないと膝が赤ちゃんになりそうだった。

「なんでえ? ず、ずっとって、え? 24時間? いや5日間だから……ひやく」

——アツ、だめだ、計算できない。脳みそが掛け算を拒否してる。

でも私の都合なんて知らずに、死の淵から蘇った不死鳥合谷が、掛け算の答えを  
 教えてくれた。

「120時間だね。リスナーとの疑似同棲生活。うん——正解ッ!」  
エサクタ

「——なんでえ?」

私は深い深い絶望をたたえながら、ごきりと首をねじり、シャ○度で尋ねる。

そしたら両腕を広げて後光を放つ不死鳥合谷は仰った。  
フエニックスゴーヤ

「え? だって面接の時言ってたじゃん。十日間耐久配信経験者なんですよ?」

刹那、脳裏に走る電流!  
シナプス

思い出すは一か月前、予防接種と間違えて受けたヘブンズライブの面接!

『そうですね! 週に幾つ入れるかは分かりませんが(他の店員との兼ね合いも

あるし) やったらいたい十は固いと思います!』

『やだなあ。大丈夫ですよ、前にもしましたから(十連勤)』

あの頃の自分を絞め殺しくなってきた。

でも今は殺意を滾らせてる暇はなくて!

私は汗だくで社長様に慌てて言い募る。

「あっ! あの一! ちがくて! あれはシフトと勘違いしてて! そのっ……!」

「楽勝っしょー、半分だし。デビューする二期生の初配信を同時視聴するもよし、さっそくコラボするもよし、なんなら眷属と相談するのも良いかもね! ハハッ!

期待&楽しみにしてるよ! じゃあ、俺これからスポンサーとの会合だから!」

どっかのネズミみたいな、やけに高い声で笑いながら合谷《ゴーヤ》は去った。

こうして私のGWの予定は、我が家を潰した隕石の如く……配信によって押し潰された。

朝レヴィ開始だぞ♡（一人目の同期はどんな娘かなあ?）

「ふぁーはっはっは！ 待たせたな眷属達！ さあ、日輪を迎えし関の声を上げようぞ！ はいっ、せーのっ！ おはレヴィイイー！！」

【コメント】

・ねみい

・ねむいわ

・関の声うるさい

・あの、ポリリューム下げてもらってよいですか？

・朝からその音量は止めてくださいあい

・関の声 ミュート 方法

「検索すんな!! ミュートすんな!! ていうか露骨にうっとおしがるなあ!!」

相変わらずスタート辛辣な眷属リスナーのコメントに、私は「ううう」と涙ぐむ。

せっかく早起きしたのに……っ！ 私は眷属に泣きついた。

「ねええええー、お願いだよおお！ おはようって言っつてよ眷属う！ せっ

かく妾が起こしに来たんだよ!?

目覚ましレヴィアちゃんだぞお!?

起きて

よお〜〜」

【コメント】

・おはれVZZZZ

・むにやむにや後、7時間

・むにやむにや後、日が沈むまで

・むにやむにや後、日出ずる処の天子、日没する天子に致す恙無くや

「ねーねー起きてよ眷属う！ なにガッツリ寝ようとしてんのお!?      なんか

妹子混じってるしい！ ねええええー！ みんなだけずるいいい！

おーきーてーよー！」

一人でも早起きさせてやろうと駄々をこねる中……私は気付いた。

これアレじゃん休日寝てるお父さんのお腹にダイブしてどっか連れてってせがんでる子どもじゃん。

私は——キッズだった？

そう思ったら案の定、【宵月レヴィア】ガチ恋勢が動き始めた……っ。

【コメント】

- ・ ごめんレヴィアごめん
- ・ もうちょっと寝かせてくれレヴィア
- ・ パパ、お仕事で疲れてるんだ・・・明日にしてくれえ
- ・ わかった起きる！ 起きるからZZZZZZ

「だからそのパパムーブやめてよおー！ だいたいおかしいよ、普通にガチ恋してよお！ なんで父性が目覚めてんのお！ もお〜〜！」  
腕を振ってみたけど、これじゃますますお子様だと思われかねない。

私は咳払いを一つして、気を取り直した。

「まあ良い。とにかく！ 今日から五日間！ おはようからおやすみまで妾と一緒だぞ♡ どう？ 眷属？ うれしい？」

【コメント】

- ・ 地獄かWWW
- ・ 五日間!?
- ・ 長すぎンダロ……

・だいじょうぶ？ 死なない？

・うれしいうれしい♡ 他の娘の配信始まるまでの時間つぶしがでk

「——へえ？」

声を低めた瞬間、後ろから妹の伽夜ちゃんがアルミ缶を差し出した。振り向かず  
にアルミ缶を受け取って、マイクの間近で——ゴキヤゴキヤギャツ!!  
潰した缶を放って、私はエコーをかけたマイクに唇を近づけた。

「なに他の子のところに行こうとしているの？ 眷属はずっとずっと妻と一緒になんだよ？ 嬉しいでしょ嬉しいよね？ 実質妻との同棲生活できるんだよ？ それなのに大好きな妻のことおいて他の女のところに行くわけないよねえ？ だってみんなは妻の眷属なんだから妻はみんなのこといっぱい大好きなんだからねえ？ 余裕だよねえ？ 120時間配信なんてあつという間だよねえ？ GW中はおやすみからおはようまで一緒に居られるよねえ？ ねえ分かった？——ニガサナイカラア」

【コメント】

・ヒュー—————!!

・こわいこわいこわい

・デビュー時から着実に闇が深まっておる

・ぺろっ、これは……30日モノのヤンデレ！

・病みもデレもしっかり熟成しておるわい

・分からねえ！俺にはサアッパリ分からねえ！

・今日、二期生の初配信だね

「あつ、ねくく！今日の夜ねえ！さっそく一人目がデビューするってね！

どんな娘か楽しみだよねえ……え？妾と二期生の立ち位置？いや、妾も二

期生じゃよ？同期同期」

【コメント】

・——？

・ん？

・え？

・え？

・——後輩、では？

「ちがつ、ちがうよ！確かに妾の方が一か月先輩だが……ちよっ、やめて1。

5期生って言うのやめて小数点やめて！ やだちがうから先輩じゃないから同期だから……………おい誰だキャスパーと同期だって言った奴！ ふじゃけんな!!」

そうして眷属にお昼ご飯咀嚼音提供したり、お昼寝の寝息提供したり、壺○じで蛇に引っかけたりしてたらあつという間に20時になった。

二期生の初配信の時間だ。

「どんな娘が来るのかなあ……………なんだかドキドキするなあ……………っ!」

この一か月、クレア先輩達とコラボしてきて思ったのは——やっぱり同期って良いなあっていう憧れ。クレア先輩もステラ先輩もリエル先輩も、お互い励まし合って活動頑張ってきたからこそその絆を感じて……………私にも『同期』がいたらなあって思った。

だから今からすごく楽しみ！ 一体どんな娘と同期になれるんだろう!

きらきらと目を輝かせて、配信画面を見ていたら——

『いあいあ—————! く○うるふふたぐん! ふんぐるい? むぐるうなふく○うるふ! るるいえ☆ うがふなぐるふたぐん—————!』

超エキサイティングに理解できない言語で挨拶する、正気を失った目の女の子が

425 朝レヱィ開始だぞ♡（一人目の同期はどんな娘かなぁ?）

現  
れ  
た  
。



二期生の機械神は邪神崇拝者らしいです（いあいあー!）

『あらあ？ 聞き取れない？ 意味が理解できない？ それは申し訳ありませんえ

ん、吾輩としたことがみなさま人類の知能指数を考慮しておりませんでしたあ！』

どこか人を小馬鹿にしたようなその子は、科学者《サイエンティスト》のような印象をまとったふわふわの銀髪を短く整えた女の子だった。

肩を出した分、白衣の丈がずれて指先が袖ですっぽり覆われていて、「ぷくく」と笑う口の端からはギザギザの歯が見え隠れしていた。

『さて、では低能な人類様でも理解できる言語と発声法で名乗りましょう！ 吾輩

は【絡線マキナからくり】と申しますう！ 高次の演算能力により、大いなる旧支配者の

一端に触れた機械仕掛けデウス・エクス・マキナの神でございます！ ぜひお見知りおきをばあ！』

あー！ ー！ ー！ ー！ ー！ ー！ ー！ ー！ ー！ ー！

わかる、わかるよ私もいきなり『傲慢な墮天使』とか言われてやったから。なんだか昔の自分を見てるみたいでほっこり。

——の割には、この子すごい堂々としやべるなあ。

マイクに息当ててないし、喋り口も淀みなくスラスラで、目とかぜんぜん泳いでない。……代わりに狂気で瞳孔グルグルしてるけど。

【コメント】

- ・機械仕掛けの神きちゃ!
- ・ヘブンズライブも色々揃ってきたなあ
- ・萌え袖肩出しギザ歯とかてんこ盛りだなオイ
- ・恐るべき存在よ……
- ・おのれ崇拜者ア!

「あれー！ー!?」　なんか妾の時より反応良いんだけどお!?　　なんでえー！ー!?」  
同時視聴してる私の眷属達のコメントが盛り上がってる!

お……おのれ邪神めえ!?　　そうしてジト目で睨んでたら、マキナちゃんは虚空の一点を見つめながら、ゆらゆらと首を揺らし始めた。

『さてえ?　さてさてさてえ?　ここまで来ればご察しかと思いますがあ!　吾輩がこの度、Vtuberなる存在になったのは、偉大なる支配者の存在を知っていたためでございますう!　そのためには如何なる労苦も惜しまぬ所存!』

そう言った途端、彼女はわざとクリック音を響かせて——何か名状しがたき起動音を鳴らした。

今までの言動からの意味深なクリック音に、コメントはざわついている。

なにになに!? なに起動したの!?

何が起こるか分からなくて、びくびくと肩を震わせていたら………マキナちゃん  
は超エキサイティングな声で叫んだ。

『吾輩、機械なればこそお！ 簡単なプログラミングもといゲーム制作なども嗜んでおります故！ リスナーたる人類様には、ぜひ吾輩の自作ゲームを楽しんでいただければと!』

……あれ？ おそろおそろ目を開くと配信画面には、どこにも見覚えのないゲームが起動されていた。よく見れば確かに……どこことなく素人っぽさを感じるゲーム画面が表示されている。

その右下で、恐るべき崇拝者（銀髪少女）が解説してる。

『これはなつ、これはな！ 任○堂が出したプログラミングの学習ツールでな！  
いっぱい……いや全然ちよちよいとプログラミング勉強して作ったのだ！』

ぷくくく、これで人類様は楽しみながらもじわじわと精神を大いなる邪神に支配されるといふ恐るべきゲームなのだ!』

マキナちゃんは一生懸命、解説おはなししてくれた。

これはねこれはね、と弾んだ声でゲームの仕組みを説明して、狂気に満ちた目をキラキラと輝かせてお話してくれた。

『これはね! 壺〇じを参考にしたゲームなんだけどね! ジャンプしたらお腹の中から触手が生えるのおく! ジャンプすればするほど触手に体の中ぐちゃぐちゃにされて人肉爆散するのおく! だから如何にジャンプしないで進めるかが肝なんだよお!』

そうなんだあ、うふふふ。

私はいつの間にかマキナちゃんの解説に、「うんうん」と優しく相槌を打って見守っていた。

【コメント】

- ・こいつ……キッズだ!
- ・いやベビィだ!

・うちの子がレ○ブロックで遊んでる時、こんな感じだわ

・何作ったか説明してくれる奴

・かわいい

・良い子だねえ

・すごいねえ

・作れて良かったねえ

『うん!』

優しいコメントを見て、マキナちゃんは嬉しそうに頷いた。

か〜〜わいい〜〜♡ 私はすっかりマキナちゃんにメロメロだった。

『だからね! 吾輩ね! 初配信が終わったら——レヴィア先輩にこのゲーム、プレイしてほしいんだあ!』

………うん?

私は首を傾げた。なんか……ん?

『レヴィア先輩、今耐久配信してるからあ! ぜひクリアするまでプレイしてほしいなあ!』

——え？

初配信終了後、マキナちゃんからビィスコードの通話が来た。加えて自作ゲームのリンクも送られてきた。

ヒエ。

---

更新遅れました。

少しバタバタしていました。これからもよろしく願います。

後輩（同期）と初コラボです！（うぐいすパンになりたあい）

壺○じとは。

壺に下半身ハマったおじさんがピッケル一本で崖を上り、やがて宇宙へと旅立つ  
壮大な感動スペクタクルSFゲームである。

ピッケルを崖の凹みに引っ掛けて登る独特の操作感に、私は心折られた。

何が辛かって……っ！ セーブポイントが……無い！

だから一生懸命進めても、一瞬のミスでスタート地点まで落ちることがさらにあ  
るの。珍しくないの。知ってるの。

なぜって？

朝の8時からやってたからだよ。

なんならマキナちゃんの初配信直前（夜の20時）までやってたからだよ。

そんな鬼畜ゲームをモデルにした、マキナちゃん自作のゲームを今、私はプレイ

させてもらっている……ンダケド。

「マキナちゃぁん……」

「はいっ！ なんですか？」

「ピツケル、不定形なんだけど」

「シヨゴスですね！ 漆黒の粘液上生物です！」

「後ろから青いヌルヌルの犬が追いかけてくるんだけど。噛み殺されるんだけど」

「ティンダロスですう♡！ ローションじゃなくて青い脳漿お♡！ 呑みたあい

！」

「」

まあ、良いよ。

追い立てられるプレッシャーでミス連発するけど、それは他のゲームでも見られる娯楽性なもの。

分かる、分かるよ？（どうしようクリアできる気がしない）。

だけどね？

——リスポーンする度に、だんだん操作が効きにくくなって、気がするんだ？



壺○じに襲い掛かった……………。

そしてまさかの——壺○じ、CV付き。

壺○じの悲鳴が黒い粘液に沈んでいった。

アイルビーバックはしてくれなそうだった。

「あー駄目ですよ先輩。シヨゴスをピッケルの形に留めるには、ZL・ZR・L・R  
・Aボタン同時押しで右スティックを回し続けないと！ でないと殺されます」

「……それをしながら左スティックで登り続けるんだよね？」

「はい！ 左スティックの操作は従来の壺○じ感覚です。ただ左スティックを動かす度に8%の確率でお腹から触手が孵化して爆散します♡！ 頑張ってくださいね、レヴィア先輩!!」

にっぱあ！

マキナちゃんがつつごく人懐っこく笑いかけてくれた。

——すうっ。

クツツツツツゲーだコレ——————!!

!!  
!!  
!!

クソ！ これはクソ！ なにこれ本家の壺○じがへブズに見えるくらい鬼畜！  
いや混沌《ケイオス》！

ていうかなんで壺○じにCV付いてんのお!? だれよ、この声!?

声質的にぜったいに声優さんじゃない。純然たる一般人ただけど……一つ一つの声にすごく実感がこもってるのだ。

『痛ったあ……え？ 痛い。痛い。痛いよ？ え？ へ？ え・え・え？ 痛いよ？ 痛いよお？ ねえなにこれめっちゃ痛いよお？』

『う〜っ……なんだよお、またかよお……なんでこんな目に遭うんだよお……俺なんか悪いことしたあ？ 呪われてんのお？』

『あー死にた！ もー死にたー！ はーうぐいすパンになりてえ』

プレイミスする度に、これ聞かされるのよ。

死ぬ度にうぐいすパンなのよ。

地獄なのよ。

なんかもう、リスポーンの度にすごく申し訳ない気持ちになるのよオ！

「ね、ねえマキナちゃん。このおじさんの声……だれ？」

「吾輩の叔父さあん」

「叔父さあん!? !?」

まさかの親戚!?

びっくりして聞き返すと、マキナちゃんは「うん!」と元気よく頷いてくれて。  
「叔父さん、よくタンスの角に足の指ぶつけて骨折れるからその時の声録ったのお。  
連続記録は7本だよ」

「叔父さんをもっと心配したげなよおっ!!」

「そんなことよりそんなことより———どうですか? 吾輩のゲーム! 楽しい?  
楽しい?」

その声は……とても無垢だった。

初めてお手ができて、褒めてもらえるのを待ってる子犬のような。

そんな無邪気な声で、邪気が宿った目で、にぱあと笑ってみせるマキナちゃん。

———言えない。

この笑顔を前に! クソゲーだなんて言えない!!

「う……うん！ すっごい楽しいよオ！ と、とってもやりがいあるしねえ〜  
！ やりがいに至っては、もはや本家超えてるよお〜〜〜！」

「ほんと？ やったあ♡！ よかったあ〜〜〜！」

「だ、だからね？ これクリアしたら妾のこと先輩って呼ばないでもら」

『おいおいおいおい、またかよお〜〜〜！！ またこれかよお〜〜〜！！  
い加減にしてくれよマジでよお〜〜〜！！ 痛ってえなあ！』

「チツツツツ！ クツツツツ……」

「え？ 先輩、いまなんて」

「ソ面白いなあ〜〜〜！ほんと、思わず汚い言葉使っちゃうくらい面白いなあ  
〜〜〜！ クツツソおおおおおおおお！……！」

そうして山頂《ゴール》近くで蛇の化け物に喰われた頃、窓から差し込む日輪が  
気絶した私を迎えてくれた。



ゆっくり寝ろ墮天使（二人目の二期生!）

「私は起きました窓の外天蓋の彼方は光に満ちていたしかし今私の部屋は暗い泥闇に覆われ蒼い脳漿を分泌する黒き猟犬が蠢き私の手の中でまどろむ不定形のモノは確かに覚醒の時をまっけていまるのを確かに感じそす私はすぐさまおはレビしました

——眷属の愚者《みんな》……いあいあ」

【コメント】

- ・ SAN値ピンチ！SAN値ピンチ！
- ・ あいさつ昨日と変わってるんだが
- ・ もうおはようではない
- ・ ゆっくり寝ろ墮天使

………はっ！

私はほっぺたを叩いて、脳裏にこびりついた眠気と狂気のブレンドを振り払った。「す、すまぬ眷属よ。ちよつとまだ意識が飛び飛びで……いやっ、だからって許されることじゃないけれど！」

そのっ——寝坊してごめんなさあぁーい！！！！」

肌がざわついて、胸の奥が時折ひんやりする。

これあれだあ、バイトに遅刻した時とおんなじ感覚だあ……っ！

完全にやらかしてしまった事実だけが頭の中でぐるぐる渦巻く。日が昇るまでは

【絡繰マキナ】 ちゃん自作の壺○じ（邪神）をやってるのは覚えている！

そして夢の中で粘液生物に襲われたのも覚えていて……目蓋を開けたら、もう窓の外がとっぷり暗かった。

「うう……あううっ！ ティンダロスがっ、シヨゴスが……っ！ 夢にまで出て

きて……はれ？ 頭の中に、中に、なにか……いる、よ？」

【コメント】

・ やめろやめろやめろ！

・ もどってこおい！

・ だから寝ろって

・ 起きろ墮天使なんてもうつぶやかないから！

・ ゆっくり寝ろ墮天使にタグ変わってる

WW

……ほんとだあ〜☆。私はもお自分が起こした事態に苦笑するしかなかった。ついさっきまで Bwittier のハッシュタグには「#おきろ墮天使」のつぶやきが多かったけど今では「#ゆっくり寝ろ墮天使」のつぶやきがほとんど上がってた。

「ううう〜〜ごめん……ほんとにごめんなさあい……優しい、みんなが優しいよおおわあああ〜〜ん!!」

あの邪神ゲームの後だと、人のやさしさがものすごく沁みる……っ!!  
ふうっ、ちよっと回復してきたかも（心が）。胸に手を当てて深呼吸を繰り返してから……私は眷属のみんなに声を掛けた。

「それじゃあ、みんな——いくよ」

時刻は 20 時!

そう! これから二人目の二期生がデビューするのだ!

私は眷属と共に身構えて、震える指でマウスを動かし……同時視聴を開始した! 「ひいひい……ひいひい! ど、どんな娘かなあ? 楽し m、ひいひい

!」

## 【コメント】

・おい、半〇狗がいるぞ

・「朗報」上〇の四、V t u b e rデビュー

・「悲報」うちの娘が半〇狗だった件について

・ひいひい！

・楽しみより恐怖の方が勝ってンダガ？

そうして新たな狂気の到来を恐れる堕天使とその眷属達は固唾を飲んで、二人目の二期生の待機画面を見守り——映ったのは、ドスケベだった。

細くも柔らかい足を強調するハイレグ！

脇腹と胸にしか布面積がないボンテージ！

私はたまらず叫んだ。

「これぜったいステラ先輩の性癖だぁ——！！」

あの太もものむちっと感！

慎ましやかなのにボンテージで妖艶に見えるちっぱい！

そのこだわりようは、レヴィアにも通ずるモノがあった。

更には魔女っぽい三角帽子に黒いローブ、片目を隠す眼帯などはすごく中二感があつて……なんだかレヴィアとすごく共通点《シナジー》を感じた。

【コメント】

・エツツツツ

・これはシコい

・肌色面積ランキング1位

・魔女っ娘か、良いね！

・眼帯良きぺろぺろしたい

・両目つむってるの可愛い

・キス待ち顔……ッテコト!?

ううううううまたみんなすっごく褒めてるうううううう！

でも——悔しいかな、すごく可愛い。

眷属が言う通り、表示されたアバターはいま両眼をつむっている。だからかな？  
なんだか……目を開けた所を想像すると、胸がすごくドキドキしてきた。

「へ、へーんだあ!! どっ、どうせまた変な人なんでしょ!! もう妾分かつ

てるんだから！　だってここへブンズライブもおん！」

もうお決まりだもん！

どうせまた変態ムーブかまして、私がセンシティブにイジられるんだから！

——まあマキナちゃんはまた別次元のイジリをかましてくれたけども。

邪神に傷ついた心が警戒し、子犬のようにフーフー牙を剥く。

いないんだ、結局、妾にまともな同期は………来ないん

『ふふふっ、そんなにじろじろ見て——イケナイ小鳥さんだね』

その声は、もう消えてしまった桜の花弁のようにひらりと私の耳に届いた。

その声音の柔らかさは、意固地になっていた心を解いた。

え？　なに？　なにこの——きれいな声。

アバターの魔女っ娘は表示されてから少しも動いてない。

眠り姫の如く目を、つむったまま。でも、声は優しく、ささやきかけてくる。

『そんなに食い入るように見ないで欲しいな……くすぐりたいよ』

はうっ!?

恥じらいのこもったささやきが、きゅうつと切なく締め付ける。

『たしかに僕はこんな格好しているけれど……そんなところより、もっと……見てもほしいところがあるんだ』

そしたら魔女っ娘のAvatarがどんどん拡大されて——目蓋を閉じた、きれいな顔が画面いっぱい近づいた。

『ほら、見える？ 僕の、まぶた。』

まだ何も映したことのない、この瞳に最初に映るのが君なんだよ。

卵から孵った小鳥が、初めて見たものに無償の愛を抱くように——この眼を一度開ければ、僕と君の間に、唯一つの恋が始まるんだ』

さわさわと触れるか触れないかくらいの、フェザータッチのようなささやき声が私の耳に入り込む。彼女が吐息を、いや声を発するだけで、私の肩はびくっと跳ねる。

『それじゃあ……開けるよ』

目蓋が、開かれる。

ゆっくりゆっくり、眼帯に塞がれていない片目が開いていって——その翡翠の輝きがガチ恋距離で輝いた。

そうして彼女は、強く、強く、命じる。

『見て』

『みて』

『みて』

『僕を、見て』

『見たね？』

彼女は穏やかに頬を緩めて——チュツと。

感触すら覚えるリップ音が、ときめく胸に鳴り響いた。

『もう絶対離さないよ、小鳥さん。これで君は……【夢乃クロア】の使い魔〈ファ

ミリア〉さ』

コメント欄がメス墮ちしていく。

圧倒的な演技力と抜群のウイスパーボイスが、初配信のリアタイ勢をガチ恋にさ

せていく。

そして。

「あっ……………しゅき」

墮天使もその例に洩れなかった。



はいっへブンズチェストォー! (魔女ちゃんは癒し枠なの!信じて!)

『はあ〜いというわけで、本日よりデビューと相成りました【夢乃クロア】です。さつきはごめんねえ、癖になってんだ王子ムーブするの。』

本職は魔女なんだけどねえ』

『なんかねえ〜すごい求められるんよお、あーいう感じのお WW 魔女学校でねえ。』

まあ女の子しかいないからかな〜?』

『でねー、その子達があんまり嬉しそうにしてくるから僕もどんどん楽しくなっちゃってえ〜〜…あつ、うん好き好き、人を喜ばせるの好きかも〜』

『あつ…ふふっ、いや、そのね? さつきの『もう絶対離さない』って押し強すぎたな〜〜って WW ごめんねえ〜無理強いする気は無いんだ』

『さつきは台詞でついああ言っちゃったけど…小鳥さん達ともっともっとい〜っばいお喋りして、ゆっくり僕の使用魔になって欲しいと思ってるよ。』

だから——僕のこと隅々まで、知って行ってね♡』

『Have a good Night 《よいゆめを》』と、ほんわかしたお別れを告げて、クロアちゃんの初配信は終了した。

ふうー……………。

クロアちゃんの声の残滓を堪能してから、私はゆっくりと体を起こして……………もう一度深く吐息をこぼした。

「——ごちそうさまでした」

【コメント】

・おう WW 良かったな WW

・なんて晴れ晴れとした声……………っ！

・なんか顔がツやつやしてませんか？

クロアちゃんの配信が終わってから、私は眷属のみんなに一言言ってから、クロアボイスを堪能していた。

仰向けで、手を組み、棺に入るポーズでクロアちゃんのほんわかボイスとイケメ

ンボイスを脳内再生して、浸っていたのだ……。

「クロアボイスを聞く時はね? 誰にも邪魔されず、ときめいて、なんとするか癒されてないとダメなの。一人で静かで豊かで……包み込まれてなきゃいけないの」

【コメント】

- ・なんか語り始めたあ!?
- ・一人でしっぽりお楽しみしやがって……
- ・なんて顔してやがる!
- ・だめだこいつもう堕ちたぞ
- ・「悲報」堕天使、魔女の使い魔に堕ちる
- ・まだ堕ちれたんすね……

「堕ちる? ちがうよ、妾はね? 契約したの。邪神に傷ついた小鳥さんが魔法で救われたの。そう、堕天使は所詮小鳥なの、羽生えてるし」

ええいうるさいうるさい、コメントうるさい。ほんとだもん、天使は鳥類だもん。鳥判定雑なんて言うなあ……。

「いやでもほんとびっくりした。びっくりするくらいまともだった、というかちゃ

んとしてた……うっ！」

私はたまらず口元を覆って、むせび泣く。

長かった、長かったこの一月と一日。先輩達に振り回され、昨日コラボした同期もとんでもなくて——でもよかった……っ！

ほんとによかったよお……!!

「うっ、うっ……これでへブンズライブの常識人枠が二人に……私の味方はあの子だけだあ……っ!!」

【コメント】

- ・あれ？
- ・うん？
- ・おかしいな
- ・うんおかしい
- ・なんか勘違いしてない？
- ・いつから自分が常識人枠だと錯覚していた？
- ・チェンソーでリスナー斬り殺すメスガキは常識人じゃあないんだよなあ……

・ パパあ♡（D○D 配信を見よう）

・ 逃げるな！ 自分の罪《キャラ》から逃げるなああああああ！

「えなにそれ知らないなあ全然記憶にないなあ（一息早口）」

もお〜みんなどうしちゃったんだろ？ 私はへブンズライブの中じゃ、一番まともだよんそうだよそうに違いない。

私は目をつむってコメント欄から顔を逸らして、うきうきと声を弾ませた。

「楽しみだなあ！ クロアちゃんとのコラボ！ そうだ、さっそくお誘いしよう！ 反応くれるかな？」

さっそくビイスコードにメッセージを送ってみた。

どんなコラボにするかは決めてないけど……それはクロアちゃんと相談すれば良いよね！ あっ、眷属のみんなと決めるのも良いかも？

なにはともあれ、始まるんだ！

へブンズライブ史に残る、最も健全な配信が!! !!

「んんんつつつつひいひい!! まあ……つ、て！ むつつ、りい！ むりい！

もうイケなっ！ はっ……くう、はっ、はあっ！ やっ……らあーっ！！』  
『いいよいいよお！ レヴィア先輩、輝いてるう！ 大腿筋がライトウイングう  
！ 筋肉がフライアウェイ！ 仕上がってるよ仕上がってるよ、頑張る小鳥は不  
死鳥《フェニックス》ウ！！ ！！』

だれか……。

だれか、教えて……。

リン○フィットって————並走勝負するようなものでしたっけ???

筋肉!やはり筋肉はすべて魔法!(リングフィット並走勝負  
配信!)

リング○イットとは。

リングみたいなコントローラーを押したり引っ張ったりして体を鍛えるRPG  
ゲーム。筋トレをこなす毎にモンスターにダメージを与えて、マ○オみたく複数の  
ステージを走り進むんだけど……。

『どっちが早く3ステージクリアできるか並走勝負しましょうよ! 僕はデータ  
消して最初から始めますね? あ、大丈夫ですよ、何周か全クリしてるので(Y、Y、Y)』  
以上が、ビィスコに来たクロアちゃんのメッセだ。

もう一つ、問おう。

リング○イットって、何度も全クリするようなゲームだったけ???

「はあはあはあ、んんっ! ああっ! だっつめ、きちやうきちやうきちやっ、  
アああああああああああああああ!! !! だあめええええ! 突い

ちゃやらああああああああ!! !! !!

むきむきの黒いドラゴンが連続でパンチしてくる!

私はお腹に力をこめてガードするけど……っ! ビキッ、とお腹の奥が鳴った気がした。つらい……つらい!

【コメント】

・リヨナ好き歓喜!

・涙ぐんだ声さいこおおおおおおおお

・きちゃうはシコいんだよなあ

・キャスパー…逝くのはじめてな無垢っ子って感じて最高なんですよ

・成神クレア…ばすばす責められてるシチュだと直義《なおよし》

・明星ステラ…今描くとこなんだがバックか騎乗どっちが良い?

「ハアーーーーーア! またエッチなんだあ! 結局、ヘブンズはセン

シティブなんだあーーーーー!! !! !!

くそつたれえ!

黒いドラゴンを叫びながら倒した途端、私はぶっ倒れた。

ふっふっふっ、と地べたに顔をうずめながら私は滝汗流してぐったり。

そしたらクロアちゃんの優しい声が耳元に吹き込まれた。

『お疲れ様です! 最高に煌めいてますよ、レヴィア先輩!! これなら墮落しても天国まで直帰できますよお! ナイスバルク!』

やさ……しい?

いやたしかに言ってることは優しいんだけど。ああ……まあ……いっか。

『先輩のファイトを見てたら僕も滾ってきました! このままもう3ステ進めちゃいます! うおおおおお見ててください僕のもゾーマ!!』

そうしてクロアちゃんはゲームを再開し始めた。

すごい勢いで走りながら、空気砲を連射しまくってる。いや何回コントローラー押し込んでるの、メ○ゾーマっていうか機関銃じゃない?

【コメント】

・ 魔女服と機関銃

・ 魔法 (筋肉)

・ 筋肉! やはり筋肉はすべてを解決する!

・今のはメ○ゾーマじゃない・・・機関銃だ

『ほらっ見てえ！ 僕の魔法お！ 汗流れてるう！ 僕の魔力流れてるう！

アアッ♡ 利いてる利いてる！ 背中に魔神降りてくるかもお!! 』

「やめて……昨日、邪神が来たばっかなの……もうやめてえ」

『ハアッ……喜んでる♡ 私の腹直筋《ファミリア》が喜んでますよお！

わたしはああああ！ 筋肉《ヒト》を喜ばせるのが好きなののおおお!! !!

ほう、うっ、ふっ、くう——ンンンンキモチイイイイイイイイイイ

イイイイイイイイ!! !! !!

魔女は絶叫して、プランクで激しく腰を振った。

私はぴくぴく震える太ももや腹筋の感触に身震いしながら、ぼつりとこぼした。

「いあ……いあ……健全って……なんだっけ……ふたぐん」

邪神に心を責められ、魔神に体を追い詰められ……堕天使《わたし》の心体ボロ

ボロだあ。

こうして——邪神・魔神・堕天使の、ブラック二期生が誕生した。

『え? 先輩は二期生じゃないですよ! 立派な先輩です! マキナちゃんとも

解釈一致でしたので (・∀・) b<sub>ダ</sub>え!』

「うわあああああー!ー!ー!ー!ー!! !! 入れてよお! 妾も二期生に入れ

てよおおおお!!!!!!」

宵月レヴィア、二期生オーディション編決定! (公開未定!)



墮天使さん、二期生オーディションです（妾は二期生なんだが!?)

『それでは宵月レヴィアさん。あなたの志望動機を教えてください』

私は首を傾げて思った。

あれ、【二期生】に志望動機っているの？ と。

5月3日、GWの折り返し。

全身軋む筋肉痛に耐えてお布団から這い出て、マイ○ラ配信をしてたら……クロアちゃんからお誘いチャットが来たのだ。

「同期3人でナカヨシマルチしませんか♡？」……だって！　こんなのっ！  
出ないわけにはいかないよおっ！

口では二人とも否定してたけど……二人も本当は分かってくれてたんだ！

私、宵月レヴィアも——へブンズライブ二期生なんだって！

大切な【同期<sup>なま</sup>】なんだって！

「そう……思ってたんだよ」

『レヴィアさん？ 早く答えてくださいレヴィアさん、答えないと——僕の広背筋から火矢が吹きますよ？（ハッ、）（セ）』

「そう！ 思ってたのにイイイイイイー！ー！！」

面接会場という名の見覚えのない建物に入った私を、マキナ邪神ちゃんとクロア魔女ちゃんが矢を構えて出迎えてくれた。

「ひどいよおおお〜〜〜！ こんなのああんまりだあ〜〜〜！！」

『甘い！ ココアプロテインよりも甘々ですよ、レヴィア先輩！！ 何かを欲するならば、それを得る資格を証明しなければなりません！ ですよねマキナ面接官！』

『ハーベストたべたあい』

『うん、美味しいよねハーベスト。でも今は面接中だからね？ しっかりやろうね？』

『ん〜〜〜…わかた！』

幼児かな？ きちんとクロアちゃんに言い含められたマキナちゃんは、こくり

と力強くうなずいた。

『ハーベスト買ってきたら面接ごうかくー』

「うっそほんとに!! ちよっ妾、今すぐ買ってくる!!」

『台本守れよ邪神キッズうううううううううううう!! !! !!』

筋肉……あなた意外と真面目なんだね？

マキナちゃんには今度私の作ったビスケットを持ってく約束をした。

『やっつたー』とマキナちゃんは駄々こねなくなった所で、面接は仕切り直した。

『良いですか！ 二期生に必要なのは『ダークさ』！ 邪神と魔女に並ぶ『闇の

深さ』を僕達に見せてください！』

や、闇の深さ!?

その字面にまず困惑した。なに闇の深さって……そんなの分かんないよ。

ただいつも配信でコメントくれてた眷属さんがコメントしなくなったらB w i t t e rのアカ見つけてどうしたのか過去ツイで確認したり。

ガチ恋勢<sup>ババたち</sup>が他の女の子可愛いって言ってたらそのつぶやきを無言でいいね押した

りしてるだけだから……

「妾には深い闇なんて何もないよ！」

『思ったんより濃いめの来たんですが!?』

「え？　なんで？　普通だよ？　だって眷属のみんなは妾にとって大切な存在だもんだからコメントしなくなったら心配するじゃないそれに妾という娘がいるのにどうして他の女の子可愛がるの？　おかしいじゃない？　それでも妾縛りたくないから何も文句言わずにいいね押ししてるだけだよ？　これのどこが闇が深いのか？　教えて？　ねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえねえ」

『こわいよおおおおおおおおー！！！！！！！！』

『さすがレヴィアせんぱあい！　生贄にふさわしい狂気！　だてにクロ○ちゃんパンツ履いてる訳じゃない！　吾輩、ヘブンズライブに入れて良かったあ！』

「クロ○ちゃんパンツが決め手でヘブンズライブ入ったのマキナちゃん!?」

そっちの方がよっぽど闇深いよ！　まさか自分の履いたパンツが原因で人生動かしてしまったなんて!?　!?

私は自分の闇の深さより罪深さに打ちひしがれそうになった。

『くそお……突っぱねてやろうと思ってたのに割とガチでビビってしまった……マ

キナ面接官。これはもう採用では？」

『いや！ まだだ！ まだおわってない！ 次は吾輩からの質問です！』

そう言ってカクカクしたアバターの銀髪白衣少女が降りてきた。マキナちゃんが私のカクカク墮天使の周りを『ふむふむ』と回る。

私はごくりと唾をのんだ。キッズムーブでかわいらしいけれど……マキナちゃんの本質はやはりいいあいあだ。その狂気の塊が繰り出す質問を聞き逃さないよう、私は耳を澄まして身構えた。

『——おっぱいが大きい！ 採用！』

『なんでだああああああああああああああ！！！！』

「育乳してくれてありがとうとおおおおステラママああああああ！！！！」

二期生になれた嬉しさと共に蘇るのは、ステラ先輩との育成の日々……。脇の肉寄せて何になるんだと思っただけ……ばんざあい！ ばんざあい！

やっぱりおっぱい！ おっぱいが全て解決する！

両手を上げて喜ぶ私の後ろでは、二人の面接官が取っ組み合っていた。

『台本にない流れしないでよマキナちゃん!! 生贄なら僕でも良いでしょお!?

『嫌だよ！ だってクロア、ムキムキじゃあん！ ペったんこじゃあん！ 大きい乳房の方が生贄として上等……』

『——ン？』

その、たった一音が面接会場を凍らせた。く……クロアちゃん？

震える私とマキナちゃんに、クロアちゃんのかくかくアバターが迫る。

『今、なんて言ったのかな？ どこを見て、何を比べたのかな？』

顔の影を濃くして、ほんわかしてたイケヴォに凍えるような圧を宿して。

『僕の大胸筋フアマリアはあ！！ ペったんこんなかじやなああああああああああ

あい！！！！』

『うるしええええ！ このムキムキがあ！ 腹筋バキバキ魔女お！』

「ちよっ！ まっ、やめて二人とも！ ここ室内！ 室内だから！ 火矢を撃ち

合わないで——あちゅっ!？」

気付いた時には……もう遅かった。

喧嘩する邪神と魔女、引火する火矢、燃え移る墮天使。

そうして燃え広がる面接会場が崩れ落ち  
——その瓦礫をもって二期生の墓  
標とした

墓標にはこう刻まれている。

「ちっばいはアドバンテージ」と。



妾は創るだけだ……このイカレた世界を

5月4日、マイ〇ラ配信中のことだった。

「ちっばいはアドバンテージ」と刻まれた墓標を見つめながら、私はふと気づいたことがあった。

「あれ？ 妾、破壊しかしてくない？」

ここで改めて、『マイ〇ラ』というゲームについて振り返ろう。

マイ〇ラは正方形にデフォルメされた無限に広がる世界で、文字通り色んな事ができるゲームだ。

建物を建てたり、動物を飼ったり、モンスターを倒したり……目的は無くても、本当に自由に遊べるゲームだ。

しかも同じ世界内だったら、同時にたくさんの人とも遊べちゃうのだ。

現にこうして私が歩いているだけでも、リエル先輩の警察署やらステラママの美術館やらクレア先輩のライブハウス等々たくさんある。

新しくヘブンズライブに入ってきたクロアちゃんは筋トレジムを建設中だし、マ

キナちゃんは……なんか………ルルイエ神殿建ててる。

まあ、ともかく『マイ○ラ』って創るのが醍醐味なんだよね。

なのに私がこのヘブンズライブサーバーでやってきたことといえは

- ・クレア先輩の謝罪会見場（焼き土下座）へ侵入、ツルハシでの暴行のち倒壊
- ・クロアちゃんとマキナちゃんが創った面接会場が炎上、倒壊

「妾のマイ○ラ、破壊と炎から切って切り離せなくない？」

「コメント欄」

- ・気づいた
- ・気づいてしまった…
- ・気づいてしまったのか
- ・ああ……いつかこんな日が来ると思っていた
- ・ああ、鐘の音が聞こえる……
- ・壊しなさいレヴィア君！ 誰かのためじゃない、あなた自身の願いのために！
- ・ただ壊すだけだ、この腐った世界を

「混ざり過ぎだよォ!! 色々混ざり過ぎて訳分かんなくなってるよォ!! 皆、妾のことなんだと思ってるんだよお!!」

「コメント欄」

・破壊の権化

・終末装置

・巨〇兵

・終〇りのセラフ

・ラグナロク

・ハルマゲドン

・黙示録のラツパ

「ねええええええええええ待ってよおおおおおおお!! もう妾、『終わり』という名の概念じゃあん!! 妾、この世界のラスボスになっちゃうじゃああー!ー!ーん!! !?」

いけない……これはいけない状況だよ。

このままじゃ『宵月レヴィア』のイメージが『破壊を好む墮天使』になっちゃう

よ！

—— こうしちゃられない。

「 妾もなんか創る!! !! !! 」

そうしてまず私は先人達の知恵を求め、ヘブンズワールドの建物を見学しに行っ  
た！

お久しぶりです。生活状況が変わった影響もあり、更新遅れて申し訳ありません。  
カクヨムコンテンツ読者選考、無事通過しました！

応援ありがとうございます!!

これからは、月・金を目途に週2回更新の予定です。

今後ともよろしくお願いします！





## マイ〇ラ振り返り配信①（雷神BBAは若返りたい）

〓〓Case.1 鳴神クレア〓〓

「そうねえー、色々作ったけど一番思い入れあるのは、このライブハウスかな」  
初めにボイチャを繋げてくれたクレア先輩は、そう言いながら私を入れてくれた。  
はわあ……すごい。

神は細部に宿るって言うけど、正方形にデフォルメされたものとは思えないクオリティのライブハウスだった。

「ここは……幕張ライブだった？」

「あははっ！ 幕張かあ、良いねえいつかそんな大舞台でライブしたいわねえ」  
そう笑って『雷神』鳴神クレアのテクスチャを着たキャラが、ライブステージの上でぴよこぴよこ跳ねる。

ライブ……Virtualuberが……。だとしたら3Dライブということになるのかな……私には想像もつかない。

でもクレア先輩はライブステージから観客席にいる私の目の前に飛び降りると、

その声を弾ませた。

「その時は、レヴィアちゃんも一緒だからね。観客席埋め尽くしちゃいましてお！」

夢を想うその笑顔は四角くデフォルメされていても尚、稲妻のように輝いていた。

私は気付けば、小さく、でも確かに頷いていた。

「はい……っ！」

でもね、クレア先輩。

——今現在、このライブハウスを埋め尽くしてるのはウーパールーパーなのですが、これ如何に？

「あつれえ……？ おかしいなあ？ どうして青ルーパー出ないんだろお？ なあ？？ ちょこつと夢ライブに向けての運試しでやり始めただけなのになあ？？」

「先輩……」

「青ルーパーさえ手に入れたら、頑張れるのになあ？ それこそ17歳の時のバ









マイ〇ラ振り返り配信②（ステラママ、法律って知ってる?）

）  
））Case2・明星ステラ））

ガチ恋距離、って知っていますか？

アバター……私の場合、『レヴィア』をおつきくズームして、唇とか目とかを配信画面いっぱいに映すことを言います。

そうしたらほら、見つめ合ってる感じになってドキドキするでしょ？

でもね、このガチ恋距離って他にも使いどころがあつてね……

「ねえ、訊いてよレヴィアちゃん！」

ひどいんだよ、二期生のクロアちゃんとマキナちゃん。あの娘達、ぜんぜんステラのオフコラボに参加してくれないんだよお！」

「エロイラスト描かれますからね」

「ステラは普通に誘ってるのに……どうしてあんなに警戒されてるのかなあ？」

「ママが無理やり家に連れ込もうとするからだねえ？」

「もお〜ほんつと——絵師《ママ》に逆らうなんざほんつと良い度胸だよなあ？ 全員剥いてコ〇ケで売りさばくぞ娘どもがあ」

「みんなああああああ!! 逃げてええええええ！ モンスターママだああああああああ!! !! !!」

ステラ先輩が建てた美術館の前まで来たけど、そのすさまじい母性の圧（幼女Vのドス声）にさらされて私は全力で逃げた。

けれども彼女——ヘブンズライブVtuberのイラスト全て描いてくれる神絵師《ロリママ》、明星ステラ先輩はぴょんこぴょんこ跳ねながら追いかけてきた。

「ああ〜〜ん♡ なんで逃げるのおレヴィアちゃん♡ ステラはみんなのママなんだよ？ さあ、このつるぺた乳首に飛び込んでオギャリなさああーい！」

「——その乳首にBANされかけてるんだよお!!」

そう、ガチ恋距離はね、映しちゃいけないもの（R18肌色）を隠せるんだよっ

☆



そう、バブ味備えたロリは仮の姿。

真の姿は、画力の代わりに遠慮と道徳心を捨てた『てやんでえ系』神絵師なのだ！

「だいじょーぶだいじょーぶ！ オレ未だに消されてないから！ ユチューブ君になぜか見過ごされてるから！」

「それはいつ警察に摘発されてもおかしくない系のエチチお店なんだよお!!」

いやステラ先輩の場合———そういうお店でもまだ犯してない一線をブチ越えてるのだ。

それを隠すために、私は、『レヴィア』は身を挺してガチ恋距離してるのだ。それは———今走って追いかけてきてるステラ先輩のテクスチャ。

肌色なのだ。

全裸なのだ。

ロリ（未成年）の！

全裸なのだ（乳首描かれた）！……！

「児ポおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!! !! !!

!!  
!!

「だいじょうぶだから！ 自分だから！ 合法だから！ 何も問題ないからあ

！」

「コメント」

- ・ おいおいおい
- ・ 死ぬわアイツ

・ 地獄

・ 生々し過ぎるわあ！

・ 合……法？

・ 問題しかないんだよオ！

・ まったくけしからんなあ。ところでレヴィアたん、ドアップガチ恋距離も良いんだけどそろそろどいてくれないかな？

よ  
・ 本人のリアルな乳首拝めるマイ○ラってどういことだよまったく、あくどけ

・ ふざけんなごら

・どいちゃだめだああああ!!

・これでBANされたらワイはもう……っ！　ロリを！　愛せねえ！

・いかん！　個人の性癖の尊厳が犯されている！

・おまわりさん、こいつらです

・旭日警察に通報しろお！

・ぶっKOROせばいいんだっぴね！

みんなあ……私はコメントの反応に涙が浮かんだ。

目先のエロに惑わされない高潔な精神に、私の決心は固くなる。

元々ドアップだったレヴィアのアバターを更におつきくして、もう配信画面いっ

ぱいに『妾』の唇が迫る。

「妾は！　乳首なんかに！　ぜったい負けなない!!」

「ちなみに美術館に展示してる、左真ん中の列2番目の絵は、おめえの乳首だよ。

この前のオフコラボン時に模写した」

「だから二期生とオフコラボできないんですよ！」

「コメント」

・行ってみようか？

・行ってみるの良いんじゃないかな？

・見もしないで否定するのはいけないことだよ

・裸婦画とかあるから。芸術では普通だから

・偏見は良くないと思う

・知見を広めるつもりで

・1枚だけ見て帰ろう

・そうだね、左真ん中の列2番目の絵だけは見ようか

「またか貴様ら……またなのか……」

私は絶望に慣れた目で眷属達を見下げ果てる。

きつと眷属達の手首ドリルだよ、くるっくるなんだ手の平。

それに——そろそろ私、恥ずかしくなってきたあ……！！

私が喋ったりする度に『レヴィア』の唇が動いて、なんだか自分の唇をじつと見  
つめてるみたいで顔が熱くなる。

しかも……眷属《あんたたち》！　なんで唇動くたびにキスマーク送るの!?

はずかしいってばあ！

未だに画面はユチューブコミュニティガイドライン越境状態。

私の羞恥心マックスハート。

もうこうなったら……あの人に頼るしかない！

ヘブンズライブ唯一の良心。

このマイ○ラ世界で『騎士団』を建てた、天使の先輩を！

「助けて、リエルせんぱあーーーーーい！」

私は『旭日騎士団』のギルドがある方向を振り向いて。

——その方角で、爆炎と黒煙が大地を消し飛ばし、白いテクスチャのキャラが空の彼方に吹き飛んでいくのが見えた。

「せんぱあーーーーーい!?」

忘れてた。

あの騎士団、激弱だった。

## マイ○ラ振り返り配信③（邪神後輩に負けないで天使先輩）

～Case3・旭日リエル～

旭日騎士団。

このマイ○ラ世界に蔓延るヒヤツハー世紀末的な治安を守る、唯一まともな組織。

ユチュープの規定や六法全書などのラインをブチ超える巨人《ヘブメン》達を食

い止める最後の壁。

秩序と敗北を司る天使メイド『旭日リエル』先輩が8回目の復興を経て、建て直した立派なお城が………：なんとということでしょう。

紫の炎を吐きまくる、黒いドラゴンに破壊されてゆきます。

「いあいあ！ エ○ドラふたぐん！ いあいあ！ エ○ドラふたぐん！」

萌え袖白衣の邪神ちゃんが赤ちゃんみたいな声で、頭上を旋回するドラゴンを歓迎しております。

煌々と燃える建物に照らされる、ベッド上のリエル先輩。

その何とも言えない表情を、私はおろおろしながら見つめていた。



「コメント」

・逝ったか……

・SAN値ピンチ！SAN値ピンチ！

・いやでもうん——知ってた☆

・ごめん、知ってた

・あれ？ おかしいな、このシーンもう切り抜きで見たような気が……

・未来ニキ!?

・親の顔より見た光景♪

・親の顔もつと見ろ

・落ち着けおまいら。こんな場面、今日が初めてだ

・いあいあ！ え○どらふたぐん！ いあいあ！ マキナふたぐん！

・あかん手遅れやあいあいあ！

「コメント欄がSAN値ピンチ!? ちょっ、侵されてる！ 邪神後輩の狂気に

侵されてるう！」

ううっ……!! やばい、これはやばい。

これ普通に放送事故では!?

私は「どーこどっこどーこどっこ」と虚ろに歌うリエル先輩を置いて、マキナちゃんにチャットを送る!

「マイ○ラ内チャット」

・レヴィア…ちよつとマキナちゃん!?

・マキナ…あ、レヴィア先輩お疲れ様ですう

・レヴィア…これどういう状況!?　なんでエ○ドラがこんなところにいるの!?

・マキナ…《(卵、孵しました》》!

・レヴィア…何してくれてんのあんたああああああ!?!?!?!!

エ○ドラ。

マイ○ラ内の正式なラスボスにして、本当なら限られたエリアでしか出現しないけども——卵から産まれたんならかんけーないねえ~~~~~!!　!!　!?

「マイ○ラ内チャット」

・マキナ…かの竜こそ、この世界における旧支配者の眷属!　なればこそ信徒

たる

吾輩がかの御子を生誕させるのは必然・当然・大歓声！

・レヴィア…ふざけんじやあないよおおおおお!! !!

ほら武器持って！ 倒すよ！

・マキナ…

へ？

・マキナ…うそ

うそだよね？

吾輩

卵

だいに

・レヴィア…だめだよ。ヤルよ。

マキナちゃんには悪いけど、あのエ○ドラはリエル先輩の騎士団を壊した。

このままじゃ、この世界は壊されてしまう！

「させるものか！ 妾のクラフト生活はまだ始まってもないのに！」

何一つ創れてないのに壊されるなんてあんまりだよ！

そう意気込んでいたらディスコから着信がきた。

マキナちゃんからだった。どしたの？

「やあああああだやだあ~~~~~（泣泣泣）!! !! !!

吾輩のドラゴンのお~~~~!! 吾輩がママなんだもおおおおお

ん!! !! やだやだやだあ!!」

「うるさい!!　あなたにバブ味は二千年早いわあ!!　いいからやるんだよお!!」  
 オギヤる邪神ちゃんに手伝わせながら、墮天使《わたし》はエ○ドラに躍りか  
 かる。

「うりゃああああー!!!　!!　尻尾ぶった斬ってやらあああああああああ

あ!!　!!　!!」

「コメント」

- ・ 創って無くな?
- ・ あれこれモ○ハン配信?
- ・ 炎と破壊がズットモな墮天使マイ○ラ
- ・ 結局、破壊から逃れられぬ運命
- ・ そのの、血の、さあだめえ~~~~~♪
- ・ レ~~~~~~~~~~ヴい~~~~~~~~~~♪

解せぬ。

## 第66話

5月5日。GW最終日。

この120時間越えのイカレた耐久配信も終盤に差し掛かった。

その最後の一日で、私は今何の配信をしているかというと……

『おいおいおいおい、またかよ~~~~!! !! またこれかよ~~~~!! い

い加減にしてくれよマジでよ~~~~!! 痛ってえなあ!』

「アアアア……マキナちゃんの叔父さん、デスしてごめんなさいーっ!!」  
マキナちゃん作の『クトウ叔父』のリベンジを始めていた。

いや、たしかにね？ まごう事なきクソゲーだよ、これは。

でもなんか……妙に……やりたくなるというか……。

もう元祖の『壺』の方じゃ物足りないというか……。

二度とやらんわって思った時にはリプレイしてるというか……。

「ああああー~~~~♡! 指イツ! 指の筋がプルプルしてるヨォ!! 攣り

そう……ッ！　これえ♡！　この負荷を味わいたかったノォー……♡！！  
いあいあー……！！！！

「コメント」

- ・二度とやらんわこんなクソゲー
  - ・……ふー（スチャ）
  - ・仕上がってるよ仕上がってるよ！
  - ・がんばる墮天使美しい！
  - ・なお絵面
  - ・あの、脳漿塗れで指の筋トレしてるスプラッタ枠はここですか？
  - ・二期生に着々と汚染されとるなあw
- ピンポーン。

え？　不意に鳴ったインターホンに、私はぎよっとする。  
だれだろう？

「ちよっ、ちよっのごめん眷属。少し外すね」

そう言ってミュートにしてから、おそろおそろ玄関の扉を開けると……

\*\*\*

「海の果てよりいらっしやいませ、ご主人様。天使メイド【旭日リエル】……と？」

「こんクレアあ♡ 雷鳴の如く轟く歌姫V♡ 雷神【鳴神クレア】……とお？」

「こ、こんレビ！ 待たせたな眷属達よ！ 堕天使【宵月レヴィア】……と♡」

「こっ、こここんステラっプユ♡ ステラのアトリエにようこそっプユ♡

星の妖精【明星ステ……なにニヤニヤしてんだてめえら文句あのかゴラァァ!!

だプユウン♡!! !?」

いつも恥ずかしめる側の【明星ステラ】……もとい綾香さんは、自分の語尾に真っ赤っかだった。

「はぁーい！ という訳で！」

GW最後の日に、なんと妾の家に一期生の先輩

方が来てくれましたあゝゝ!! ありがとうございます！」

「いえいえ、レヴィアちゃんすごく頑張ったからね。最後はみんなでパーっと騒いじゃおってことでお邪魔しましたあ！」

「ほらっクレア、レヴィアちゃん。たこ焼き焼けたよゝゝ!!」

「わぁーい！」

「いや、まずはオレのこの散々な語尾を説明しろプユウ♡!!  
これじゃオレだけ  
新生物扱いだっプユウ♡!!」

「「ええ……」」

「げんなりすんじゃねえっプユウ♡!?!」

リエル先輩のたこ焼きをほふほふしながら、私とクレア先輩がしぶしぶ今回のオ  
フ企画を説明した。

と言ってもシンプル。

クレア先輩達が作ってくれた『ヘヴンズくじ引き』をするだけ。

くじに書かれた内容は絶対守る!

これだけ!

「そう! まさに天国《ヘブンズ》な内容しか書かれていない、幸せのくじよお  
~~~~! だからみんな、ちゃきちゃき引いてねえ!」

「地獄の間違いじゃないっかプユウ♡」

「妾、今すごい幸せですよ」

「うん。僕も今同じ気持ち」

予防接種に行ったはずなのになんでV
t u b e r になってるの?? ～地味女
子JKは変態猫や先輩V達にセンシテ
ィブにイジられるそうです～

著者 ビーサイド・D・アンビシャス

発行日 2022年4月20日